



* 0 0 4 3 3 4 3 0 0 0 *

0043343-000

263-493

初等一，二年学級經營細案

滋賀県島国民学校・編

明治図書

昭和16

AHE



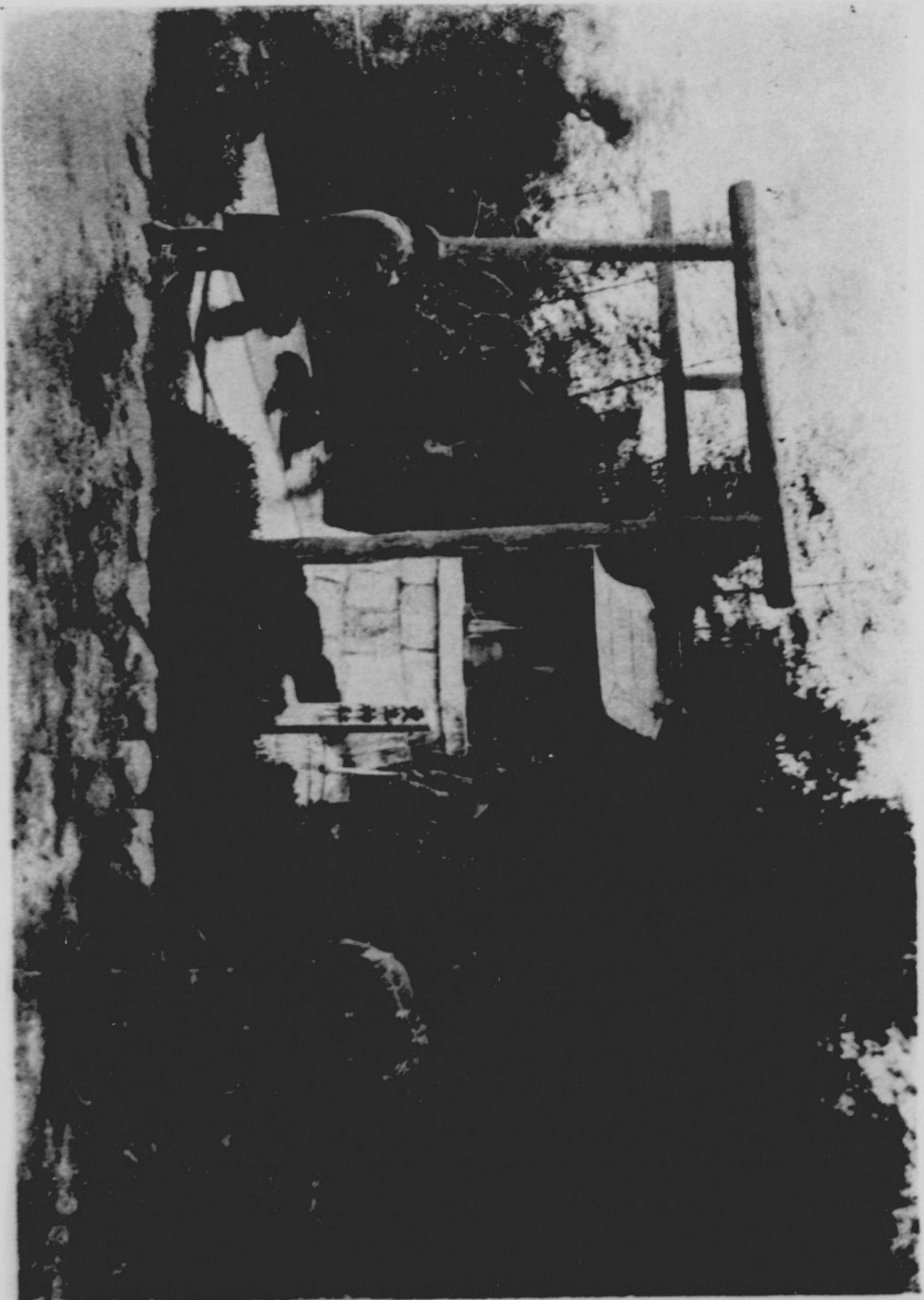
滋賀縣島國民學校編纂



級經營細案

東京 明治圖書株式會社





更新神社の児童と共著者

序

○

我が國の飛躍的なる發展に即應して國民學校は誕生した。まさに教育別に黎明は、おとづれ、華やかな論戦が、しきりと巷間に、紙上にと行はれつゝある。されど靜かに實踐界を凝視するとき、うたゝ寒心に耐へぬものがある。しみじみと心寂しさを覺えるものがある。これは、私のみを抱くひがみなのであらうか。論戦なり、紙上のにぎはしさにひきくらべて、實踐界は、あまりにも動かうとしない。「看板のぬりかへ」にすぎぬと言つた現狀に墮してはゐまいか。「果して之でよいのか」と、私は、いくたび自

問自答してみたことか。

○

こゝに私は、私の行ひつゝある實踐營爲の一部面を求められるまゝにま
とめあげた。私は事實を、具體を、直觀を、行的修練を實踐營爲の根幹と
する。

事實は、あらゆる知識の母胎である。すべての生きたものは、こゝから
生れてくる。

具體は、あらゆる概念への港である。すべての尊いものは、こゝから積
み出されてくる。

直觀は、あらゆる統一への故郷である。すべての光あるものはこゝから
芽ばへてくる。

行的修練は、教育の根幹である。すべての枝葉は、こゝから出發する。

この書が、活潑なる實踐界への椽の下の力持的存在となりうるならば幸
甚である。

昭和十六年四月

新たなる決意にて

栗下喜久治郎

初等科
二年級
學級經營細案

目次

第一章 初一・二學級經營體系……………一

 第一節 兒童の凝視……………一

 第二節 初一・二兒童の姿……………四

 第三節 未分化時代の初一・二學級經營の體系……………一〇

 第四節 皇民鍊成の初一・二學級經營方針……………一七

 第五節 皇民鍊成の初一・二學級經營構圖……………二六

 第六節 皇民鍊成の初一・二學級經營體系……………三六

 第七節 初一・二の級風論……………三五

 第八節 初一・二學級擔任者の使命……………三六

第二章 初一・二道場性の教室經營細案

第一節 初一・二道場性の教室經營論……………四一

第二節 初一・二教室經營への念願……………四五

第三節 初一・二教室經營構圖……………四九

第四節 初一・二教室經營の條件……………四四

第五節 道場として初一・二教室の經營細案……………四六

第三章 初一・二教科經營の實踐細案

第一節 初一・二教科經營方針……………五三

第二節 初一・二教科經營の實踐……………五四

第四章 初一・二躰の生活錬成細案

第一節 躰の教育論……………一〇七

第二節 「躰の教育」觀點……………一一一

第三節 躰と級風……………一三〇

第四節 躰の錬成細案……………一三八

第五節 躰實踐上の諸問題……………一八三

第五章 初一・二健康教育實踐細案

第一節 健康教育場……………一九三

第二節 健康教育の實踐體系……………一九四

第三節 初一・二の健康教育實踐……………一九五

第四節 初一・二健康教育實踐細案……………二〇〇

第六章 初一・二校外指導實踐

第一節 校外指導論……………二二三

第二節 校外指導の概説……………二三四

第三節 校外指導實踐細案……………二三五

第七章 初一・二學級行事經營細案

第一節 初一・二學級行事經營體系……………二三八

第二節 初一・二學級行事經營細案…………… 四

第八章 初一・二作業經營實踐細案…………… 三五

第一節 初一・二作業の構圖…………… 三五

第二節 初一・二作業實踐細案…………… 三六

第九章 家庭との連絡細案…………… 三八

第一節 家庭との連絡…………… 三八

第二節 「家庭との連絡」概略…………… 三八

第三節 「家庭との連絡」實踐細案…………… 三八

初等科 一・二年 學級經營細案

滋賀縣 島國民學校 著

第一章 初一・二學級經營體系

第一節 兒童の凝視

學級の經營は、教師が兒童と一緒に生活することによつて、よりよき生活經營を産み出すものでなければならぬ。ことに初一・二の學級は、兒童の生活から生れなければならない。だから、教師は、何時でも兒童がほんとに理解出来ないでは、兒童と一緒に抱きあつた生活は出来ない。さうすると、兒童を見凝めることによつて始めてよりよい學級の經營生活が築かれることになる。だから、先づ兒童を凝視せねばならぬ。兒童を凝視することは、兒童をあやまりなく理解するといふこと

とである。児童をあやまりなく理解しやうとするには、児童の本然の姿を見極めなくてはならぬ。児童の本然の姿を見極めるためには、児童の生活を自由にのびしてやることである。常に伸び伸びとした生活のうちに児童は自分らしい生活の翼を擴げて行く。そこに始めて個性の生々した姿相が開展する。個性尊重の教育とは、ゆとりある、くつろぎのうちに平和に遂げられなければならぬ。宏遠な教育も、美しい理想も児童を識らずして、これを實現しやうとすることは教育の冒瀆であり不可能事である。そのために児童に念願することは、

○自分のよいと思つたことはやつてみる。これが他人に迷惑をかけることになるなら、もう一度考へ直して見なければならぬ。自分一人の世の中でないからだ。

○ぼんやりして何もしないのが一番悪い。無駄な生活を續ける程馬鹿な生活はない。

○やりかけた仕事には、正面からぶつつかる。眞面目にやる。

○何時までも、その純眞さを失はないで育つて行かう。

○何時も自分が、伸びて行つてゐるのであるといふ自覺をもちたい。その自覺を持つためには何時も、自分の生命の眼が開いてゐなければならぬ。

○自分ばかり生きた様でも、社會が生きなければ、それはうそである。

○自分のことが自分で出来ない様なことでは何時も社會の厄介者になつてしまふ。

○身體も強く意志も強い児童にならう。 ○何時も伸々とした潑刺とした児童にならう。

○遠慮のない、正直に、何でも話しあふ親しみに生きやう。

○三つ子の魂百まで、今のうちに良習慣を作らう。

私自身の望むことは

○純情な心で児童に觸れて行かふ。 ○児童の産んだ生活のあらはれは、何時もその中から擡げ

させた生命を見凝めてやりたい。

○教師の利己的な頭で児童の活動を壓制してはならぬ。どこまでも伸してやらねばならぬ。

○児童の内から伸びてくる力に順應して之を適當に指導する態度を採らう。天理に従つて種子を播き天理に逆つて草を取る。尊徳翁の教育を習はねばならぬ。

○させなければならぬ場合には、これを直ちに強制することなく、それをしなければならぬ様に環境事情を作つてやる必要がある。

○児童の喜び、興味ある仕事は價值が多い。興味からやがて努力にまで導きたい。

○児童の名譽心は尊重したい。人の上に立つことはうれしいことだ。

○個性は尊重しなければならぬ。だが、妥協出来ない偏癖は斷乎として改めさせる。

○秩序は正しく守る。人間の本質からくる自然的な力による秩序を尊重する。

○教育は、よい温かみと、明るい陽の光りと、堅實な肥料とを與へねば育たない。草の育ちも、人間の育ちも、生命の育ちである。

○何と言つても、教育の根本は教師の生活である。豊饒な知識と高尚な趣味と、潤澤な生活者でありたい。

以上のやうなことが、初一・二學級經營の教師の基調であると思ふ。

第二節 初一・二兒童の姿

(一) 兒童の姿

自分の擔任兒童のほんとうの姿態を明確に認識把握する事なくては、如何に徹底した研究も、如何に行届いた學級經營案を樹立しても、所詮は空な觀念に墮してしまふ。即ち、學級經營は、どこまでも、その對象とするところは、兒童であり日々生長し育成する兒童の生命の上に營まれて行かねばならぬからである。故に、そのスタートに於て兒童の生活に浸透すべく、その個性(廣い意

味)を凝視し、認識せねばならない。然し學級兒童の個々の具體的な認識は、日を過ぎ、月を経るにしたがつて益々深まるものではあるが、先づ一般的に自己の學級の兒童は、如何なる心理的發展段階にあり、如何なる身體的成長期に位置してゐるか、従つて大體に於て、どんな姿態をもつて發展しつゝあるかを知つてゐなければならぬのである。

この一般性と自分の學級の特殊性や個々の兒童の具體性の上に、着實眞摯な方案は實現されるのである。この一般性と特殊性の二方面から兒童を眺める事なくて、たゞに一般性に走れば、それは概念に墮し、或はその特殊にのみ眼を向けて、その一般性を忘却すれば教育は偏狹な畸形兒を養成する結果となつてしまふ。

初一・二の兒童と呼んだだけでも、私の頭に浮んで來るのは、遊びに、食べることも、日の暮れるのも忘れて、全我的に遊びそのものゝ中に融けこんでゐる、その澄刺とした童顔である。

遊びをせむとやうまれけむ たわぶれせむとやうまれけむ。

遊ぶ子供の聲きけば わが身さへこそゆるがるれ

梁塵秘抄のこの今様は、まこと童の心に通うたものである。全く子供の遊びを見てゐるほど心の晴れるものはない。子供は遊ぶ。遊んで遊んで遊び悦れる。子供が遊ぶ時には身も魂も遊びにうち

こんでしまふ。それが鬼ごつこにせよ、かくれんぼにせよ、心から遊び惚れてゐる子供を見てゐると、そこにはたゞ遊びそのものばかりしか見へない。そこには遊ぶ子供の命ばかりが光物のやうに燃えあがるのみである。遊びの形などは眼に入らない。全く見てゐる人の心までがうちゆらいでく。さうなると遊びも尊い、三昧とはこの遊びの妙境に澄み入ることである。

「洗心雑話」の著者、北原白秋氏は、かく語つてゐるが、まことに遊びは、初一・二兒童のいのちの源泉であり、彼等の生活の殆んどでもある。初一・二の教育は、兒童のこの遊びに關聯し、遊びに即して營爲せなければならぬ。遊戲の學習化、學習の遊戲化も、當然初一・二學級教育の正道である。如何なる子供も、これは大人を小さくしたり、その心理を壓縮したものではない。子供は子供としての生活の獨自性を有する、その心理は大人への豫備的のものでも、準備的のものでもなく、これ自體生命と價值をもつ實在である。私達はこの子供の世界に於て、子供を教育せねばならぬ。

初一・二兒童の子供としての世界は、遊ぶこと、食ふことが殆んどこの總てであると言つても過言ではない程である。まこと天真爛漫に全我的に遊びに熱中し、然して生長せんがために、食ひしん坊であるかに思はしめる程に又よく食べる。この遊びと食ふことをうまく指導し育くんで行く

ところに祝福すべき彼等の全き生長があるであらう。

兒童心理學說に従ふと、初一・二は、幼兒期末期であつて、幼兒の殻をつけた時代で、非常に空想力に富み、現實と舊の世界が相錯綜してゐる時代、未分化時代であり、環境の中に遊ぶ時代である。初一・二の教科書が「ヨイコドモ」「ヨミカタ」「コトバノオケイコ」「カズノホン」「ウタノホン」「テホン」「エノホン」といふやうになつたのもかゝる點に立つたがためであらう。

(二) 未分化時代の特色

未分化時代の特色を、今少し具體的にすると、

一、本能的生活を營むで、瞬間的刹那的で生活の永續性を意識しないで、断片的に經驗するだけである。

二、主我的主情的で、よく怒つたり、喧嘩したりする。

三、模倣性にとんでゐる。

四、想像性が強い、恐ろしく活潑大膽な想像の世界に恍惚とする事がある。故にこの期の兒童は、恐怖心をそゝる様な童話をよけいに好む。

五、好奇心が強い、兒童はなんでも珍らしいもの變つたものを好む。

六、分析的でなく総合的であり、作業的である。例へば「竹」といふ教材を取扱ふに當つても、作業によつて水鏡砲を作らせる。即ち、竹の観察、竹の植物學の意味を教へるよりか、かくの如く作業を通して竹といふものを覚えさせる方法によることである。

七、滑稽なことを好み、自らよく人を笑はせる様な事をして自ら楽しんでゐる。

八、競争心が案外に強い。

以上の如きものの外に、同情とか、愛情とか、嫉妬の情なども、初等一年より二年、三年と行くに随ひ漸次濃厚になつてくる。然して理解力と推理力とかは未だ發達してゐないが、これらも徐々に發達してきて、その生活範圍を次第に擴充してくる。

尙又この期の兒童の身體的な方面を考察してみると、下肢に比して頭部の發達が稍々優つてゐるが、全體的に、あたかも梅雨晴れに若芽がすく／＼と伸びる様に心地よく、朗らかに成長して行くこの肉體の自然的な旺盛な發達の爲に、その生理的欲求として、先きにも述べた様に、食へることに非常に熱心をもつてゐる。だが、それは彼等が食へる事に意地穢いのではなくて旺盛な身體發育のため自然的な生理的欲求なのである。かゝる方面においても正しい認識による寛大な態度によつて彼等に臨まなければならない。

(三) 環境との關係

初一・二の兒童と郷土との關係、言ひかへれば、この學年に於て郷土といふものが、どんな生活交渉をもつてゐるかといふことである。無意識時代から稍々意識的時代となつた今日までの彼を、生みはぐくみ育て上げてくれた母胎、人生最初の印象を與へてくれた根帯、それは實に郷土である。夏の陽がかん／＼と照りつける森の木蔭に、チイ／＼と嫌に大人の心を苛立たせ壓迫する様な聲でなく油蟬を捕へたり、初秋の晝下り、小川のほとりに飛びかふ蜻蛉追ひにすべてを忘れさせてくれる所、ひたすら無條件に、自由に朗らかに、思ふままに、彼等の遊びを満たしてくれるものは實に郷土の自然である。慈しんでくれた祖母の死に、なぜともなく悲しみの涙を流させて、人の生命の有限をかすかにも覚えさせてくれるのもやはり郷土である。實に彼等の具體的な生活内容は、郷土より外にはあり得ない。

しかし本學年兒童の郷土は、彼等の全生活の具體的な母胎であり、根帯ではあるが、それは彼等の生活の意識的な自覺的な研究ではない。彼等の心理が未分化であり混沌たるものであるので、同様に彼等の郷土意識は混沌としてゐる。それだけに反面又、彼等の生活が郷土の中に、郷土と一體の中にあると言ふことが出来る。

第三節 未分化時代の初一・二學級經營の體系

(一) 遊戯的生活の高揚

初一・二の兒童の生活が目的結果を豫想せない遊戯的生活のものであるが故に、この生活をしてできるだけ殺すことなく、しかも自然に價值あるやうに指導してゆかねばならない。教育は何處迄も教育でなければならぬ。たとへ兒童の生活が目的もなく結果の豫想もないからと言つて、初一・二の教育に目的も結果の豫想もなくよいと言ふことはない。何處までも目的も確實なものを握つていなければならぬ。何處までも人間完成への導きでなければならぬ。放任でもなければ勝手氣まゝにさすことでもない。種々の本能を善化して努力せしむることである。

つまり、兒童の遊戯的生活はいつまでも遊戯的生活であつてよいとの謂ではない。彼等の遊戯的生活をして、なるべく本性を傷つけない様にし、そして止揚して一步でも高い作業生活に導いてゆかねばならぬ。只兒童の方から見て其處に何等の拘束も重荷も、退屈も感じない、爲すことが出来るだけ興味によつて仕事を推進してゆく様な方法を探ることが、この時代の兒童の姿態を知るもの當然採るべき方法である。兒童の生活をしてなるべく興味を失はしめずして、より價值ある生活

に導くことそれ自體が、初一・二の改善すべき點である。だから、彼等の生活を遊戯生活に終らしめることなく、漸次より高き方へと導くやうに努めなければならぬ。

これには兒童の心身の動きに注視してそれに順應しつゝ急激なる變化をあたへずしてすゝめることが必要である。

(二) 作業的生活の歡喜

こゝに言ふ作業生活は極めて程度の低いものと考へたい。又極めて廣義に解釋して廣汎に考へたい。先に述べた如く、兒童の生活は遊戯としての生活である。それは何等の目的も結果の豫想も持つてゐないのである。しかし、彼等の生活を詳細に觀察するならば、全く目的を意識しないと云ふ生活ばかりではない。たとへ、それが漠然としてでも、又殆んど無意識的であつても、もつてゐるのである。

初一・二の生活に於ては理想的な作業は出來ない。所謂遊戯的作業生活である。だから、彼等の自然生活の内に遊戯的作業生活を見出し之を意識せしめ内省せしめつゝ、これに興味を持つ様導くべきである。しかし、注意せねばならぬことは、あまりに功利的に實利的に導いてはならないし、自然生活として何等の目的や結果に拘束されない程度に於ての指導でなければならぬ。目的につ

いても、方法についても結果についても、児童自身のもつ處のものだ、教師が認めてやり、又児童に發見させるところに意義をもたしめるやうにする。結果についても、教師や大人が考へる様な要求を以てしてはならぬ。児童は結果を豫想してゐても、大抵は、豫想通り行かないのである。また、大人が考へた様な結果も招來しなくとも児童自身は満足してゐるのである。結果よりも常に方法やそれが實現の過程をよく認めてやるのが大切である。その作業も、長続きはしない。なるべく児童の程度に合したるもので短時間に終了させる。倦怠心を伴ふ様な過重なもの、長時間のものは、彼等の作業心の芽を摘だ。苦痛を忍んでよき結果への努力と言ふことが作業そのものの本質であるとしても、初一・二に於ては本質的の作業を爲さしめるのが目的ではない。彼等の遊戯生活をして、できるだけ、その本質を損せずして自然の流れの中に作業生活の初歩へ流轉せしめるやうにする。

(三) 自發的生活の擴充

こゝに言ふ自發的生活とは、狭い意味だけのものではない。児童が内部から發する處の知識感情意志のすべてを含むものである。謂はゞ全的要求生活と謂う廣い意味に於てである。児童は児童なりに要求を持つ、之は生活上、自ら内部から發してくるものである。自らに必要迫つてきて、其處に

要求として發現するのである。それは他人から與へられた詮方なしの生活原動力ではない。止むに止まれない強い自己の要求としての生活原動力である。それは筋肉活動としての生活にも同様である。この強い自己の要求は、自らその生活に對しても非常な興味を持つものである。教師又は他人から與へられた餘儀なくされた生活は自然に興味がそがれてしまう。なるべくこの時代の生活は他から與へるよりか、自分の要求を中心にしてやるのがよい。児童自身の要求する生活は、自己の生活に必要な必然の生活である。この要求の中、教育的なるものを指導してゆくのが教育である。必然としての生活の全面を指導誘掖することは至難である。その中の教育的の部面をとつて指導することによつて、児童をより高く止揚することが出来る。必然としての要求は本能としてあらはれる。しかし本能は、環境その他の關係から發現するものと、しないものとある。人間としての生活の凡てが必ず要求として發現するとは限らない。ある部分は人間として生活すべく必要あるに拘らずその児童には發現しない場合もある。だから児童の自發的要求のみを以て生活せしめただけでは、教育の上から言へば眞に児童を教育したことにならぬ場合もある。そこで、單に児童生活から出る要求のみに甘せず、教育的に考察して、かくあらねばならぬと言ふ生活方面を觸發することが必要であり、児童の自發的要求を無視して教師の考へる事のみを生活せしめることは誤りであ

る。自發的要求のうち教育的要求としての生活を満足せしめ、進んで不足の生活を生活せしむべく誘導しなければならぬ。

不足な生活であると言つても生活を生活せしむべく與へることではない。兒童の自發的要求として發現すべく觸發しなければならぬ。自然的に發現要求しないものを教師の指導によつて觸發し其處に新しく自己の要求となつて止むに止めぬ生活として現さしむべく努力しなければならぬ。この點については、指導者はその態度に於て、干渉となつたり壓迫的となつたり、強制的となつたりしてはならぬ。また、兒童の自發的要求であつて、その兒童自身から言へば當然生活上必要なるものであるとしても、これが社會生活の上に移すとき、そこにその兒童の價值生活と認めることのできない様なものは、いくら兒童の自發的要求があるとしても、それをそのまま、生活せしめることはできない。教育としては、其處にその要求をして、轉移せしめる必要がある。從來かゝる場合とかく壓迫や黙殺が行はれてゐた。壓迫、強制、黙殺は初一・二の教育上避けるべきである。

(四) 興味的生活

初一・二の教育に於ては、兒童の自發的要求生活を中心として生活せしめ、尙、見られない部分は教師その他の指導によつて出來得るかぎり彼等の自發的要求として發現せしめるやうに指導しなけ

ればならない。兒童の自發的要求生活は彼等の止むに止まれぬ生活であるから、兒童にとつては、何の苦痛も伴はない生活である、否苦痛の伴はぬといふよりか、如何なる苦痛にも敢て辭せない生活である。全く歡喜の生活である。このやうな生活こそ眞に彼等をして成長せしめる處の生活である。これは即ち興味の生活である。國民學校に於て「教育ニ際シテハ兒童の興味ヲ喚起シ」と示されてゐるが當然である。たゞし、この「興味」は、單に形式的に、他人からの安價なる面白半分とか滑稽的とか言ふ、上塗りの興味でもつて引きすつて行かうとするのではない。材料に於て、方法に於て、すべて興味を中心とすることが必要である。しかし、それは、あくまで糊塗的なものであつてはならぬ。兒童の内部から發したものでなければならぬ。それは結局、自らの要求を自らの方法で自らの力で實現するその事の生活であらねばならぬ。食事を忘れて廣い野原に蝶を追ひ、蜻蛉を採り、手の凍るのを忘れて雪達磨をこさへることに餘念のない程の生活である。自分の要求の止むに止まれぬ生活こそは、實に彼等の唯一絶對の生活なのである。

初一・二の兒童生活は、先にのべたる如く本能的衝動的の生活である。本能的衝動的の生活は、総合的の生活であつて、いまだ分化しないところの生活である。社會生活を繼續するところに生活は次第に複雑となり自ら生活は分化してくる。しかし、この時代の生活はいまだ分化しない衝動的

全一生活と言ふべき程のものである。その兒童に對して、社會的分化的教科によつて分化されたる文化そのまゝを取扱はれては兒童生活が無味乾燥になるのは當然のことである。本能的衝動的生活に適する様、教科に於ても教材に於ても全一的のものを中心として生活せねばならないのである。國民學校に於ては、綜合教授は、ある條件のもとに許可される方針であるが、綜合的取扱或ひは統合關聯等は當然なさねばならぬし教材機構も、そのやうに編纂されてゐる。

以上、興味生活が、この學年の中心生活であらねばならない。しかし考へなければならぬことは興味的學習が往々にして誤られ易いことがある。人の弱點として努力の伴はないもの、苦痛の伴はないものを好むのである。

興味的生活とは、かゝる何等努力の伴はないもの、苦痛の伴はないものではない。興味は、極めて簡單なる場合はともかく、少し複雑になると、興味は興味として直に天來するものではない。凡て苦痛努力の結果に興味の生活が展開してくるのである。苦痛生活を嘗めなければ興味生活は來ない。苦痛生活を経ずして來る興味はない。あつたとしても、それは安價なるものである。

兒童をしてこの所以を體得せしめるやうに指導しなければならぬ。その原理をいつの程にか體得しうる様に計畫してやらねばならない。興味生活を本體とするからと言つて、常に勞苦の伴はな

いものばかりをなさしめることは、兒童をして止揚する方法ではない。彼等をして平凡に終らしめてはならない。安價な生活に満足せしめてはならない。

(五) 未分化生活の伸展

兒童の生活は本能的衝動的全一的なる未分化生活である。故に學校教育とは言へ大人が考へた如き、一時限に一教科を限つた指導は當を得たものではない。國語の時間には、數へることがあつても、算數であるからと言つて取扱はない。韻文であるから、歌ひたいとする兒童の自發的要求も放棄せしめるやうな器械的な、分科本位の生活は兒童の眞の生活ではない。勿論兒童の生活はいつ迄も本能衝動的全一的なる未分化生活に甘じさせるべきではない。だからといつて、兒童の内部的に要求もしない。従つて興味的生活のない分化生活を強いてはならぬ。そこで、初一・二に於ては、やがて分化される生活を前提としての未分化的生活を伸展せしめるにある。永久に未分化生活としてあるべきことを念願して擴充せしめるのではなく、出來るだけ早く分化生活をば自然に興味あるやうにするために、未分化的取扱をするのである。その方法が綜合教授、綜合的取扱である。

國民學校に於ては、「皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコト」を以て本旨としてゐるのであつて、各教科はこの共通の目的をもつてゐるが、科目々々には、それぞれの特

色があり、この特色を發揮しつつ、國民生活に即した教育をするためにお互に連繫して實踐せねばならぬ。従つてバラバラに各教科が知らぬ顔であることは許されない。出来るだけ教材は連絡し統一する。しかもそれは、各教科教科の特色は特色で生かしながら教材において横に結んで關聯のあるものは一體として取扱ひ、五つの教科は絶えず「皇國民鍊成」を目標としつつ各教科のなかに含まれる。かくして、各科目は教材の上でしつかりしたスクラムを組む。しからば、どんなスクラムを組むかと言ふと、初一の七月の場合をとつてみる。

國語では、七月の教材として、「タナバタ」の韻文があり、算數に於ては「七夕祭」がある。更に、初一の九月の教材をみると、國語では「オ月サマ」「自然の觀察」でも、「お月様」音楽でも「オツキサマ」圖畫では「オツキミノゴテソウ」となつてをり、同じ時期に、同じ教材を與へる。このやうにして、綜合をはかると共に、結局の最高目的は、「皇國の道」へ歸一させるのである。これがいゆる統合である。

かくの如くして未分化生活を充實させることによつて次に來るべき分化生活はより一層徹底されてゆく。

(六) 想像經驗的生活の潤澤

初一・二の兒童は全く架空的である。神話寓話、假設話や、昔噺科學的作話等人類未到の世界に遊び、何萬年昔を現在として疑わず、人間の限界以外のものの活動も人間の活動と同様に考へ、何の根據なき事を物語り、行動し、書寫し製作する等想像架空の生活を敢てするものである。この生活は、將來の生活に尤も重要な基礎を爲すものであるが故に指導に際しては充分な注意を拂はなければならぬ。初一・二の學年ではこの想像が一番旺盛である。従つて所謂お話も一層要求する様になつてくる。話すこと、畫くこと、綴ること、讀むこと、製作することによつて彼等の想像的生活を満足せしめなければならぬ。然るに、この想像經驗は、指導に要領を得なければ、ともすると所謂空想性をのみ助長することとなる。彼等の架空生活は直接經驗の上に漸次甦へらしめなければならぬ。想像經驗をして之に類似の直接經驗に適用してその實證的生活を爲さしめなければならぬ。その實證的生活によつて彼等の想像經驗は漸次價值想像に向つてゆくものである。直接經驗は事實に即してのものである。事實に即しての經驗こそ所謂生命に即したもので體驗とも言ふべきものであり、この事實に即した體驗をもつとき、その直接經驗を中核として、それに即して活躍する想像經驗として眞に價值のある尊いものである。理數科方面に於ても、直觀、實驗、實測製作、表現を中心とすべきである。實事實物の教育生活をなさしめねばならぬ。從來の教育は概念

教育に終つてゐた。口先のみで、彼是と言つたところで知識にはならない。理論を教へるのではない。實行へ導くのである。身につけさせねばならぬ。かうした體得の上に立つ想像經驗、間接經驗こそ自分の生活を、よりよく止揚する重要なものである。この貴い間接經驗をして旺盛ならしめるものは、矢張り直接經驗以前に於ける架空生活が旺盛であればそれだけ直接經驗の上に寄與するところが大である。直接經驗以前に旺盛なる架空的生活を爲さしめずして、直接經驗の後に貴い想像生活を希求することは困難である。想像生活と體驗生活とは相互依存的のものであつて何れも輕視することは出来ない、初一・二に於ては、架空經驗を旺盛にすると同時に一方に於ては概念生活に終らしめずして凡て實事實物に就て直接經驗の生活に生きさせるやうに努めなければならぬ。

(七) 家庭的生活の發展

兒童の生活は、學校へくるまでは、極めて暖い家庭に於て父母に慈まれ兄弟に親まれて極めて自然的な生活をなしてきたものである。家庭の生活は、家庭の指導方針によつて各々異なる。その差も甚しい。一概にどうと言つて決めてしまうことは出来ない。しかし、大體に於て初一・二へ入學するまでは、その學習の範圍も極めて狭い。

その生活の殆んどは「遊び」の一言でつきるであらう。それも一人遊んだり兄弟と遊んだり、友

達と遊んだり、極めて少數のものとの遊びであつたのだ。従つて秩序を重んずるとか規則に従はねばならぬと言ふことはない。時間に制限せられ場所に制限せられ他人の事を自己の行動の中に顧慮せなければならぬと言ふことは極めて勤かつたのである。然るに學校へくると、教師があり、自分とよく似よつた身心の持主のものではあるが、四十人、五十人も同一の規程のもとにある場所と、ある時間と、ある方法が限られた學習生活をしなければならぬ。

更に、家庭に於ては、その生活が放從で直觀、作業、交際にその生活が倦怠的であり消極的であり不徹底であつたものが入學して多數のもの活動の様子を見ることによつて自覺して奮然更新の生活を爲すと言ふやうなことも出来る。しかし、何れにしても、あまり急激な變化と言ふことは兒童の身心を疲勞せしめて教育上不結果を來たすのである。しかも、兒童には、何日までも家庭的の温情生活を感じせしめることが教育の目標であらねばならない。何れの方面から見ても、家庭生活の連續發展と言ふことをぬきにすることは出来ない。ことに初一・二に於ては、この方面の徹底に留意し家庭とあまりに間隔のない様施設經營しなければならぬ。國民學校に於て「家庭及社會トノ聯絡ヲ緊密ニシ兒童ノ教育ヲ全カラシムルヲカムルコト」とあるのは、實に如上の意味からであらう。初一・二に於て特に家庭の延長としての經營に留意すべきであるが、そのみが唯一の目的

ではない。學級集團生活の一つの大なる目的は、児童をして社會生活を爲さしめるにある。學級生活から社會生活をぬきにするると全く生命がなくなる。児童は、家庭生活だけではその人格を完成することは出来ない。換言するならば家庭だけでは充分に社會生活をする素地はつくれない。せひとも學級生活といふ社會生活を通らなければならない。そこに児童一人對教師一人の教育にはあきたらぬ所以が存する。入學當初から社會生活の初歩は生活せしめられてゆく。只注意すべきことは何處迄も、彼自身には、重荷であつてはならぬ。窮屈を感じしめてはならぬことである。自ら喜んでその生活を要求するやうに指導してゆかねばならぬ。自分の生活を安全ならしめるためにはせひとも社會生活の原理によつて行かねばならぬものであることを、いつのまにか體得して、それを要望するやうに指導せなければならぬ。社會的な原理が、自然的に圓滑的に實現して其處に自分に幸福をもたらす時、自分の社會生活の本能は、喜んで發生してくるものである。

初一・二を擔任してみれば分ることであるが、勝手に社會生活を無視する様な行動をするものではない。あまりに社會生活の原理を單に形式方面ばかりを整へようとするときに起る弊害であつて彼等の内面に向つて、不知不識の間に社會生活原理を扶植してゆけば、歡喜して社會生活の萌芽は發生してくるのである。一面に於ては家庭生活の長所を徹底せしめると共に、漸次社會生活の長所

を導入して生活せしめることにつとむべきである。

(八) 個性的生活の徹底

何れの學年を問はず、個性重視の教育を行はねばならぬことは言ふまでもない。従來の教育は、とかく成績の悪いものを厄介がつて全く顧みない。それどころではなく、毛嫌をして遂に落第をさせるといふやうな指導方法であつた。児童は、顔の異なる如くその素質も異つてゐるのは當然である。これを次郎も太郎も同じ程度の素質を有してゐると言ふことは甚だ考へ違ひである。その自分の考へ違ひを棚にあげて成績が悪いからと言つて邪魔物扱ひにすることは全く人道を無視したやり方である。教育愛などと言ふことは藥にしたくとも無いやうな、やり方である。素質の高低のあるのは止むを得ない事である、だから、甲は甲とし、乙は乙として現在の素質を基準として、學習法を築いてゆかねばならぬ。

しかるに、初一・二に於ては、未だ學習にも慣れてゐないし、之を助成する教師も、児童の學習状態の觀察が緻密でないために、この生命が機微にふれることが出来ない。つい／＼取残される場合がある。邪魔物扱ひにする積りは無くとも見落し勝ちである。まして、劣等生は、自然淘汰の原則によつて此の中から自然に葬られるものである等と考へるに至つては、より多くの劣等生を製造

してゆくであらう。本學年に於ては、たとへ一齊的に取扱ふ場合があるとしても、數回繰り返して個別指導をすることである。

國民學校に於て「兒童心身ノ發達ニ留意シ男女ノ特性・個性・環境等ヲ顧慮シテ適切ナル教育ヲ施スコト」と示してゐるのである。

(九) 道場的生活の法悦

學校は、皇國の道に則つて國民の基礎的鍊成をすることである。つまり、皇國の道を修鍊させるのであるが、特に國體に對する強い信念が中核とならねばならない。その教育では、知識と實踐、精神と身體とを一にして知識技能を身につける、知識だけに走らず情操を醇化し身體を健全にするのである。從來の教育に於ては、行へば、よいと言うことは知つておりながら行はない。心はよく鍊成されてゐるが、身體がこれに伴はないといつた弊害があつたので、國民學校では、知識技能の修得を通じて國民的人格を育成する、しかもそれは教授と、直接に情意を教育し實踐を通じて國民的人格を育成するところの訓練と、身體を養護し鍛鍊して國民的人格を育成する養護との三つが一つとなつて、所謂國民學校の大方針たる「心身ヲ一體トシテ教育シ教授・訓練・養護ノ分離ヲ避クルコト」の教育を實踐せねばならぬ。

而して、こゝに言ふ皇國民たるに不可欠な資質は何であるか、換言するならば、皇國の道を實踐する資質の基礎鍊成は何であるかと考へると

- 一、國民精神を體認し國體に對する確固たる信念を有し皇國の使命に對する自覺をもつこと
- 二、日進の科學に對し一通りの認識を持ち、生活を數理的、科學的に處理し創造しもつて國運の進展に貢獻すること。

三、潤達剛健な心身と献身奉公の實踐力を有すること。

四、高雅な情操と藝術的、技能的な表現力をもち、國民生活を充實する力を持つこと。

五、産業の國防的意義を明らかにし、勤勞を愛好し職業報國の實踐力をもつこと。
であつて、國民學校は、この五つの資質を鍊成することであり、一の項は、國民科、二の項は、理數科、三の項は、體鍊科、四の項は、藝能科、五の項は實業科となる。

初一・二學級經營の實踐に當つては、この精神をしつかりと把握しておかねばならない。そして受持の兒童に接することだ。國民學校教育は「愛と行」の教育であるともいひうる。社會の根本精神たる共存共榮も、公正秩序も、愛の源泉から湧き出るものである。愛によつて生れた止むに止まぬ共存共榮愛によつて公正が生れ、これが眞の社會をして正しく發展せしめるのである。それが

ためには初一・二の學級をして家庭的たらしめ、教師が父母になりきることである。從來の教育は、生活を生活せしめる教育ではなくて、文化材をのみ傳達することに汲々としてゐた。時間の始まる合圖が鳴ると、澁々乍ら教科書を携えて職員室から教室に赴き、終りのサイレンと共に脱兎の如く職員室へ歸る。定められたる時間割によつて、與へられたる教材を授けることに汲々としてゐる。これでは、暖い空氣はうまれない。次代の國民を背負つて立つ、温い人間、よき皇民はうまれない。

初一・二の擔任の先生は、己れは先生だぞと言ふ肩書はせずして母親であるとの心構えを持たねばならぬ。始終兒童と共に生活して學校に彼等の足跡のあるときは共に遊び共に語り共に作業すること。始終教師の方から話しかけてやるべきだ。言葉優しく巧妙に彼等の心理を捉えて眞實に物語つてやるがよい。怒るよりも賞めてやるがよい。教師の一言は彼等の生命の躍動の上に如何なる價値のあるものであるかは、誰でも首肯するところであらう。

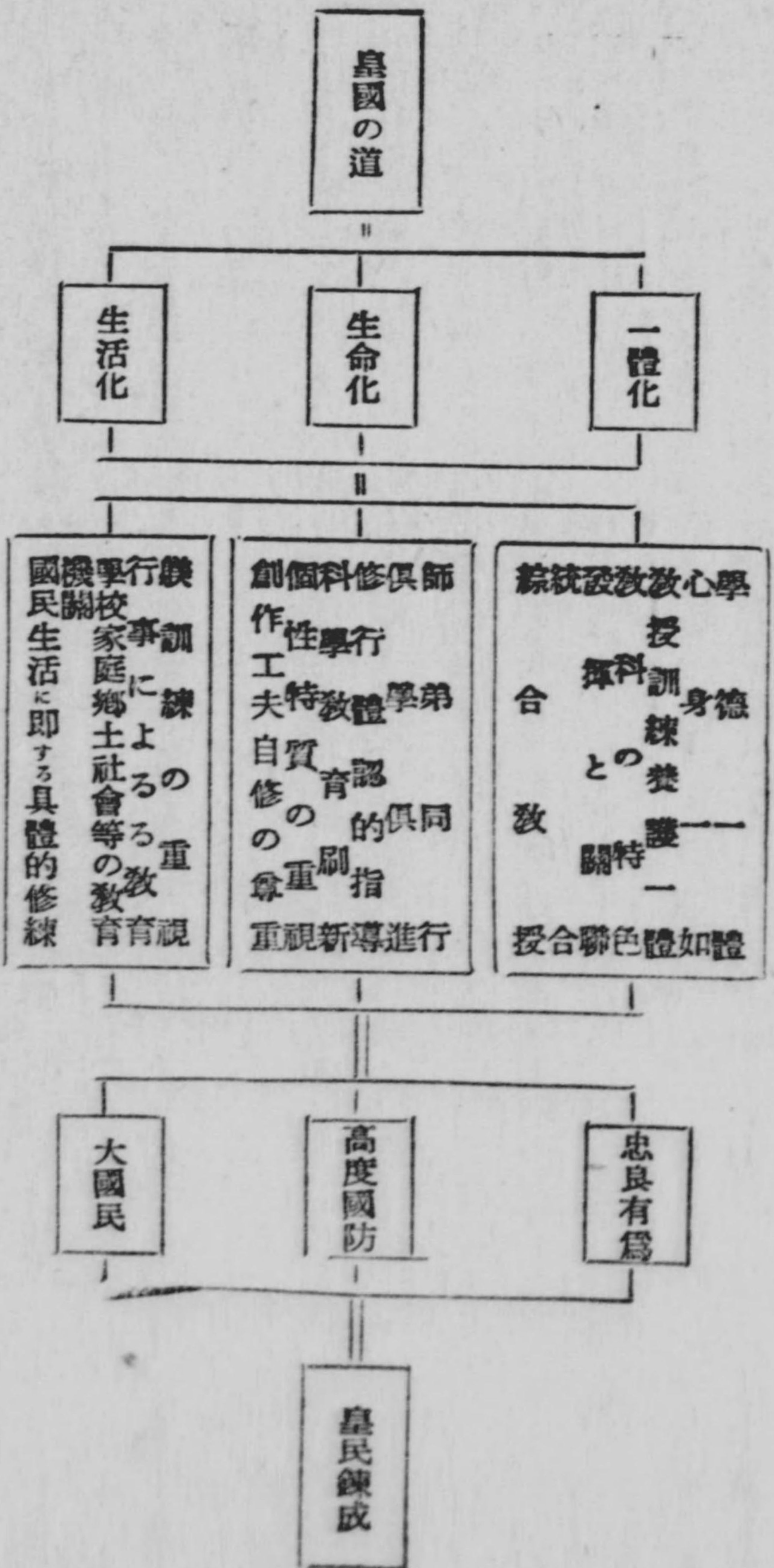
要するに、初一・二擔任の教師は、常に陽氣な感情の持主であつてこの太陽の光によつて凡ての兒童の閉された胸を開くだけの力を持つていて、それを天真爛漫に表現するがよい。

第四節 皇民鍊成の初一・二學級經營方針

- (一) 初一・二學級經營の全般に亘つて皇民の道に歸一せしめ、その修鍊を重視し、皇民鍊成の基礎を確實にする。
- (二) 國民生活に必須なる普通の知識技能を體得せしめ情操を醇化し健全なる身體の育成に力むる
- (三) 我國文化の特質を明かならしむると共に東亞及世界の大勢につきて知らしめ皇國の地位と使命の自覺に導き大國民としての資質の長養に努むる。
- (四) 特に初等科第一學年は綜合的教授により全一的生活を營ませる。
- (五) 國民學校精神に即して、心身を一體として教育し、教授、訓練、養護の分離を避くる。
- (六) 具體的實際的なる取扱をする。
- (七) 各教科並科目は其の特色を發揮せしむると共に相互の關聯を緊密ならしめ之を皇民鍊成の一途に歸せしめる。
- (八) 儀式、行事を重視し、之を教科と併せ一體として學級經營の効果を擧げる。
- (九) 兒童心身の發達に留意し、男女の特性・個性・環境に應じたる教育を行ふ。

(十) 家庭及社會との關聯、兒童の興味喚起、自習の習得養成を重視する。

第五節 皇民鍊成の初一・二學級經營構圖



第七節 皇民鍊成の初一・二學級經營體系

(一) 初一學級經營體系

(1) 第一學期……學校生活の出發期

(1) 學校生活に希望となつかしさをもたせるやうにとめること。

- 1、入學の第一印象に注意し、兒童心理に適合した環境整理をしておくこと。
- 2、教材の選擇に留意して、兒童の期待に合致するやうに指導すること。
- 3、兒童の日常生活をくわしく眺めて、生活に即しつゝ教育してゆくこと。
- 4、疑問を中心として指導し、之が解決を徹底的にすること。

(2) 生活の變轉をなめらかにすること。

- 1、學校生活を家庭化することにとめること。
- 2、學校を家庭生活の延長とすること。
- 3、教師は慈母として常に溫味を以て指導すること。
- 4、假にも幻滅の悲哀を感じしめることなく生活の展開をはかること。

(三) 團體的學校生活の修練をなすこと。

- 1、放縱的利己主義では社會的生活の不可能なることに逢着させ自覺させること。
- 2、性癖の矯正に努めること。
- 3、學級精神を堅く守らせること。
- 4、學校の方針にそふやうに性向を馴致すること。

(二) 第二學期……顯著なる充實伸展期

(一) 學級意識の涵養をはかること。

- 1、學級としての自分を認識せしめる。
- 2、學級一致の行動をとらせること。
- 3、自分の行爲を、學級精神に結びつけて反省をなさしめること。

(二) 遊戯的學習から作業的學習への歩武をとらしめること。

- 1、遊戯的學習に力一ぱいの眞剣味を持たしめる。
- 2、作業學習の興味を追求せしめる。

(三) 鍊成せしめること。

- 1、鍊成の必要を知らしめ、一意専心學習に没頭させる。
- 2、練習・應用・活用方面の學習的努力をする。
- 3、實踐行を中心とすること。
- 4、消極的養護から積極的鍛鍊的訓練への工夫を重ねること。

(三) 第三學期……初一教育の完成期

(一) 成長の自覺を指導すること。

- 1、努力による成長發展の效果を自知せしめる。
- 2、自覺内容を深化すること。
- 3、自覺の上に立つ學校生活を營むことに努力すること。

(二) 學習活動の擴大深化を圖ること。

- 1、低度の自學自習、自律の要求をなし、その達成に努めさせること。
- 2、實驗實測から工夫創作への活路を開き、學習態度を深化し進化させること。
- 3、學習の收得を確實ならしめ、その習熟發達に意を注ぐこと。

(二) 初二の學級經營體系

(一) 初一經營の基礎の上に

初二學級經營方針は、基礎たる初一學級經營方針をひきつゞき踏襲し、兒童をして弛緩させないやうに緊張の度を加へるべきである。そして未分化時代から、分化時代への移行を、スムーズにすべきである。即ち、興味的遊びの世界から、意識的な努力を目標とする學習へと導くことである。

(二) 個の伸展を

個性指導を十分に徹底せしめて、その充實伸展をはからしめなければならない。個性の能力を充分に進展せしめると共に學級全體の能力をも向上せしめることに努める。

(三) 學習教材の擴充

學習教材を擴充せしめ、より多方的に、固定しない學習をさせるやうにする。一定の教材を一定の方法によつて畫一的に授けるのではなくて、各兒の生活に即して、その環境に即して、教材を擴充して行くやうにしたい。

初二時代の兒童は、自分の生活を包む郷土といふものに對して、漸く意識的な識別をもつてくるものであるから、これを學習教材として活用するやうにせねばならぬ。

(四) 環境の整理

學級の向上發展、學級經營の實を擧げるためには、先づ學級環境の整理が必要である。然して常にその新鮮なことを期するのが最も大切である。環境が停頓すれば、學級生活を停頓してしまふ。兒童に對して常に新鮮潑刺たる學習生活をなさしめるためには環境の整理が大切である。環境には物的環境と内的環境とがある。教師自身も内的環境の一つであるから、教育理想の停頓を招くこと

のないやう、常に生命の新生を期するやう努める。

(五) 個性の發揮

學級の向上發展をはかるには、各自の個性をあくまで伸張せしめ、發揮せしめて行くことが肝要である。算數の得意なものには、大いに自作問題を發表せしめ、補充問題を多く與へてその解決を速やかならしめ、學級全體に刺戟を與へしめるやうにする。圖畫に天分をもつ兒童にはその作品を發表せしめて、これによつて學級全體の刺戟とする。國語・工作・習字等に於ても同様各自の個性を發揮して、學級全體のレベルを高めるやうにはかる。

(六) 批判力の培養

初二にもなると、高學年兒童の使つてゐるやうな卑猥な流行語や流行歌を無意識にうけとるものであるから、消極的に、之を防ぐよりも、むしろ積極的にその惡影響に對する正しき批判力をもち訓練を行つて行くやうにすることが大切である。

(七) 自治的訓練

すべての生活態度を自發的ならしめ、學習や訓練を自學的自治的に指導するやう心がけて、自治的訓練へとめざす。

(八) 生活に即して

- 1、児童の學級に於ける生活のみでなく、家庭や社會に於ける生活をも一全體として民族的場に於ける生活にまで掘り下げ、それから學級生活を構成する。
- 2、この場に於て生活することによつて、知識技能を收得させる。そして、これを合理化して認識にまで高め、更にその認識によつて生活させ、現實の生活を、よりよく價值的にさせる。
- 即ち、生活↓認識↓生活 このプロセスをとる。
- 3、児童の學習を、この生活に基礎づけ、學習生活と全體生活との聯關を緊密ならしめる。
- 4、生活の内容となるものは、民族の文化財であり、この文化財を生活せしめることによつて、民族文化を傳承し、創造し、民族共同社會の成員化を圖ると共に、民族文化を永遠に發達させ、民族的生命を永遠に進展させんとする。
- 5、教育を單に主知的に考へることなく、全體的生命的に考へて、一切の教育營爲をして、生動躍動させ、以て生成發展の民族精神を鍛鍊するに寄與するやうにせねばならぬ。

(九) 學級理想の樹立

學級經營の向上發展は、學級に高い理想をもたせ、各自にこれを體認せしめることによつて發揮



されるものである。故に児童をして高い學級理想を追求せしめ、發刺たる活動によつて學級生活の充實をはかり、學級經營の向上發展を期せねばならぬ。

第七節 初一・二の級風論

學級とは集團的生活形態を有する一種の共同人格體である。そこには群集心理と別個な集團統一心理が活動するのである。これが即ち級風である。この級風こそ児童の人格構成上に感化し、影響することが大である。

特に、初一・二の學級生活の感化は児童永遠の基礎的人格を重んぶるものである。で、常に學級を児童の樂園とし、愛の雰圍氣に生活せしめたい。一學級は一家庭であり、教師は児童の父であると同時に母であり、而して又級友は仲よき兄弟であり、姉妹である。之等が融合一體となつて、學級の軌道をまつしぐらに突進する時、理想的な學級は建設される。一個の自分は、孤獨の自分ではなく、眞に學級としての一員であり、確固たる學級を組織する大切なる一細胞であり、一分子である。

級風確立の方途として

- スナホニ(性格)……………純真明朗なる性格……………
- ゲンキニ(身體)……………元氣潑刺たる身體……………
- シンケンニ(學習)……………努力的學習……………

一
體
|| 至誠 ||

よき兒童
よき町村民
よき日本人

第八節 初一・二學級擔任者の使命

(一) 「ホンダイサム」「ワタナベマサヲ」「スズキハナコ」「ハヤシハルエ」さんま、めざして、學校生活に入門したばかりの兒童である。家庭から學校へ、自由放縱から規律的拘束へ、個人生活から社會生活へ、自己から團體へと、非常なる生活の激變であり、更新である。この生活の革新した兒童には、如何にも深刻な印銘を與へたことであらう。そこには如何に大きな希望と、如何に大なる不安に戰いたことであらう。この兒童こそ、描かれざるキャンパスであり、永年温室に守られた室咲きの花である。之等の兒童を指導し、その生命を成長させ「ホンダイサム」「ワタナベマサヲ」「スズキハナコ」「ハヤシハルエ」のやうな人物を育成することこそ、初一・二學級擔任者として、最も力を要すべき點であり、使命である。それがためには、どこまでも兒童のよりよき伴侶者であり、常によりよき指導者であらねばならぬ。そして遊戯化した學習により、學校を愉快な生活の場たらしめ、ある時は嚴父として、或る時は慈父として、不斷の熱と光と愛によつて行きたい。かくして培養された時、室咲きの花は其の大いさを増し、層一層の美と力強さを發揮し、無限の發展性をかもしうるであらう。

(二) 園丁として
花園に美しい花を咲かせ健全な實を結ばせ様とするのが園丁の職務に相違ないのであるが、園丁はどうして花を咲かせることが出來、どうして實を結ばせることが出來るのか？ 忠實な園丁であればある程、たゞ懇切に耕し、念入りに種を下し、周到に除草をし、適切に肥料を施し、水をあたへることより外に何もなし得ないのである。どう考へても樹木を育てたり、草花を咲かせたりする力は園丁にはないと考へざるを得ないのである。ところが忠實な園丁が、心からの栽培に對して大自然は美花をあたへ、良果をめぐむのである。初一・二の學級經營も、この園丁の仕事と同じである。それ故に、學級擔任者は、忠實なる園丁、助手になりきることである。それだけの愛・熱・努力をもたねばならぬ。

(三) 愛のまなこ

兒童達の缺點をのみさがし求めたり、それをのみ矯正することにあくせくとしないで、學級兒童

の一人一人がもつ善良さ、さては特意な方面から児童を明るく、力強く指導して行きたい。

「カズ」のお勘定の上手な子——木登りの上手な子

「ヨミカタ」の得意な子——ランニングの早い子

字を澤山に知つてゐる子——弱い者に涙を知る子

自然の觀察に熱心な子——相撲の強い子

かうした強い子、優しい子、りかうな子、それ等を決して知的差別の上にならべた特別の椅子につけることなく、同じ愛のまなざしで育て、ゆきたい。

自分の得意を認められ、これを賞讃されて自信と祈りともち、はしやぎ切つた児童の一人一人、それこそ輝きと強さをもつた皇國の民であらう。

(四) 魂のさゝやき

私達は、美しい花を見て魂の躍動を感じ、秋の紅葉を見て自然美の内に生きる。人の眼を見て人の魂にふれ、人の動作を見て親しき共感に生きる。

雞を見て雞を愛し、小鳥にさゝやいて小鳥を愛する。芋を植えて芋に感謝し、土を耕やして土の力をさとする。それが、初一・二學級經營の態度である。共存共榮は、村自治體の標語である。眞の

村人をつくり、眞の國民をつくる、衆に生きる事、衆を愛すること、衆を導き助ける生活への教育である。花を愛する児童こそ、花に魂が生きてあらう。土を愛する児童こそ土に魂を送るであらう。土を愛し、作物を愛し、動物を愛する。

魂の實をたく教育、魂と魂のさゝやく教育こそ、幼きものの魂に、愛の發芽をさせるであらう。

(五) 児童とともに

學級擔任者としての私の生活は、児童を通じて生きるのが本質的であり、児童をよりよく活かすつゝ私自身が活きるのが、私の正しい生き方であらう。私は出来るだけ細心に計畫した事項を、児童を通じて着々と展開させたい。私の學級児童の成績の不良、品性の劣は、誰の罪でもなくて私自身罪である。他からはそれに對して、どうにも批判の出来ない場合でも、私は私の責任を逃避したくはない。又他に轉換するほど無責任でありたくはない。私は児童と共に、児童を通じて生きるといふ純眞さと、教へる愛とが必要だと考へ、努力苦闘する。そのために不斷の反省をして行く。即ち児童を通じて反省し、児童を通じて生きるところに、私として忠實なる園丁となりうる事が出来るのである。

(六) よき皇民を

國民學校は、全體として皇國の道の修練に歸一させるものであつて、初一・二學級經營の最高の目的が、これ以外の何物でもないことも亦自明の理である。

従つて、學級兒童の悉くをして、この道に進ましめ、よき皇國の御民たらしめねばならぬ。

けれども、この「皇國の道」は、その同じ内容を、色々の言葉であらはすことが出来る。つまり「皇國の道」は、これを「忠義の道」といつてもよく、「忠君愛國の道」といつてもよく、「國體明徴の道」といつてもよく、「臣道實踐の道」といつてもよい。つまり、言葉が違ふだけで、内容は同じことである。

要するに、初一・二學級經營のすべてをあげて「皇國の道」に歸一せしめ、よき皇民を鍊成するやうに努力精進せねばならぬ。

第二章 初一・二道場性の教室經營細案

第一節 初一・二道場性の教室經營論

教室の整備裝飾が兒童の好むまゝに不統一であつたり雜然さを現し、遊戯室が物置のやうになつてはならない。又雜然と成績のみで埋もるのも一種の實踐であるが全體的立場に立つ皇民道場としての教室の精神的歸一が一方に偏することとなる。道場性の教室經營とは、むづかしい初等一・二年に向つて禪的な冷厳さを望むのではないが低學年らしく明るく清楚に而も教育的配慮のもとに文化生活領域を豊富にし、實踐的、意欲的、行爲的な統一表現を志さねばならない。

「皇民精神の鍊成をはかり日本精神の顯現につとめる。」

「皇民體位の向上をはかり健康養護につとめる。」

「皇國民社會生活の精神を體認させ興亞建設者としての心構へを自然に培養する。」
しかして、この度の國民學校の精神によれば、特に総合的教授の低學年に於ける道場は、教室のみに限られるのではない。即ち、學校全體が道場であり、生活の場であることを忘れてはならない。

學校全體を錬成の場として考へていくことは勿論である。

第二節 初一・二教室經營への念願

教室は、その學年に最も相應しい生活實現の場所であり道場である。教室は單なる知識技能の傳達場所ではない。児童生活の生活實現上の尊い研究室であり、鑑賞室であり、修養室である。

だから、教室は道場であると言ひたい。従つて道場性の教室は、児童の生命の躍動する教室でなければならぬ。そのためには、

- 一、児童のために解放せられたところの教室であるやうにと望む。
- 二、児童の生活姿態に即した教室であるやうにと祈る。
- 三、児童の生活と共に發展し、活動して行く教室であるやうにと願ふ。

以上の立場から將來に約束される教室は、生命活動の教室でなければならぬのである。しかし、教室の構成は、児童の生命實在の學習を進展せしめる生活環境のよりよき整備である。今其の具體的な價値を列挙すると、一、學習を活動的ならしめる。二、學習方法を多樣的ならしめる。三、學習の興味を喚起し、更にそれを持續する。四、學習の必要性を喚起する。五、學習の理解を

容易ならしめる。六、學習の理解を早める。七、學習に於ける想像と推理を正確ならしめる。

教育は活きた事實であり、初一・二児童は日に月に成長してやまない生命の體驗者であり、靈肉一元の生命の實在者である。かゝる生命の發展に寄與するものは全く教室の構成である。

第三節 初一・二教室經營構圖

身體検査結果表(身長・體重・胸圍・坐高のグラフ化)	入學前と入學後學期別に於ける増加率全國及び學級平均と自己の體位
異常兒の矯正表 (自己矯正法の認識)	腺病質及虛弱兒：榮養食・肝油補給 寄生蟲：驅除藥の服用 疾病箇所：脊椎彎曲、耳疾眼疾其他
體力テスト表	五十メートル疾走タイム 立巾跳
清潔検査表	服裝檢閲……髮・爪・容姿 机内整頓 口腔検査
出席統計表	理由反省……病狀、病原 今後の衛生法
室内衛生の注意	通風、換氣、清潔、採光 空席の適用

道場性の教室經營

家庭化
生活陶冶
環境整理

〔衛生ボクスター〕
 (具體的衛生思想の普及)
 郷土病マラリヤの豫防法
 歯牙衛生表
 體力向上法

金魚鉢……金魚の飼育……水替へ、給餌

一日の作法圖
 〔起床から就寢迄の挨拶
 禮儀作法〕

植物の鉢植
 〔土への感謝
 生命成長の發展〕

偉人の肖像畫
 〔偉人に對する思慕の念
 無言の感化〕

日本精神具現の繪
 〔國體尊嚴
 日本精神の培養〕

藝術的繪畫……
 〔美的觀念の養成〕

級訓掲示……
 〔學級協定標語〕

(三) シンケンニ
 (基礎的鍊成へ)
 學習教材の具體物
 國民科的のもの
 理科的のもの
 數科的のもの
 體能的のもの
 藝術的のもの

第四節 初一・二教室經營の條件

- (一) 教室の設備は、よく研究してから着手すること。
- (二) 設備は使用度數と教育の重要性から吟味して頻數の大なるものから設備してかゝるのが最も妥當である。
- (三) 教室の設備は如何なる教師でも使用し得るところの一般的普遍的なものでなければならぬ。
- (四) 設備品はすべて堅牢を第一の着眼として破損の虞の尠いものを選択すること。
- (五) 教室に於ける校具教具の中には一寸した教師の不注意から危険を招くものであるから、念には念を入れて危険の伴はないやうにせねばならない。
- (六) 教室設備の最初の計畫はなるべく大きく、廣く着眼し、漸次に設備を擴充し得る餘裕を作つて置くことが肝要である。
- (七) 設備を行ふ場合には、其の設備に對する内容的な研究を行ひ、自から設計し、自から其の設備に對して全責任をもつだけの決意を有することが必要である。
- (八) 設備に對して自分が心血を注げば注ぐほど、其の設備に對して愛着が湧くものである。設備を愛することは、その設備にしたしみ、その設備を活用し、更に破損すれば修繕するところの態度である。初一・二教師は、その初一・二教室の構成に對して愛を注がなければならぬ。

第五節 道場としての初一・二教室の經營細案

(一) 皇國民精神の鍊成

- (一) 御尊影の奉掲——式日・祝祭日・慶事日等の時……講堂
(御尊影を拜し聖壽萬歲・皇運無窮・祈念する皇民精神の鍊成)
- (二) 國旗の掲出——國旗に對する感謝は祖國に對する感謝である。今だその尊嚴性に無自覺なものの多い初一・二兒童には敬虔嚴肅な心を養ふ。

(三) 宮城の御寫眞奉掲

(四) 皇太神宮の御寫眞奉掲

(五) 時局理解揭示板

(六) 偉人の肖像揭示

(二) 生活文化の建設

(一) 初一・二の教科を中心としたる學習具構成

1、初一・二國民科的方面的學習具

(1) 初一・二兒童に與へた雜誌設備

○コドモノクニ

○子供の友

○幼年畫報

○國民學校一年生

○國民學校二年生

○國民一年生

○國民二年生

○幼年の友

○コドモアサヒ

(2) 初一・二の兒童に與へたい課外讀物設備(最近の文部省推薦圖書たる子供讀物をあげる)

○ハタラク動物

○ワンワン物語

○オソラハヒロイ

○オトモダチ

○一年ツブ

リカタ讀本

○ゆりかごエホン

○ヒトリデヨメルカハイイオウク

○ヒロブニイサ

ン ○ミエチヤンナユチヤン

○エサガシ・アイウエオ

○カタカナエホン・○三匹

ノクマ

○カタカナエホン・オサルサン

○海ノノリモノ

○オヒサマトオツキサマ

○ヒカウキ

○カハノタビ

○金太郎

○ドウブツノチエ(上、下)

○兒童繪本

桃太郎

(8) 初一・二兒童に與へたい「ヨミカタ」學習具設備

○片假名五十音圖

○平假名五十音圖

○平假名カード

○片假名濁音半濁音

○平假名濁音半濁音

○幼兒カルタ

○唱歌カルタ

○イロハカルタ

○初一漢字

表 ○初二漢字表

(4) 初一・二地理・國史方面的學習具設備

○郷土の模型

○年代繪圖

○郷土地圖

○日本地圖

○日本歴史地圖

○日本

及世界の偉人の肖像 ○地球儀 ○郷土の名所繪葉書 ○郷土の産物の蒐集 ○磁石

これ等の環境に接觸させて、これ等の環境から教育すると共に「自然の觀察」と相俟つて、地理・國史の基礎を作つておく。初一・二の時代から地理・國史の基礎を作つておくことが大切である。

2、初一・二理數科方面學習具

(1) 初一・二「カズノホン」方面學習具設備

- オハジキ ○風車 ○團扇 ○輪投 ○積木 ○棒 ○千代紙 ○葉書
- 色紙 ○毎月の七曜表 ○かるた ○色板 ○お雛様 ○三十糶の物指
- 一米尺 ○十米卷尺 ○金屬性リットル枡 ○百瓦秤 ○十疋上皿秤 ○各種幾何形體
- 計算カード ○計算練習表 ○算盤 ○直觀方便物||小石毬・計數器
- 數圖表 ○數字表 ○暗算練習板 ○記數表 ○名數單位表 ○模型貨幣
- 時計

(2) 初一・二「自然の觀察」方面學習具

- 寒暖計 ○方位圖 ○模型類(電車・古時計・汽車・自動車・飛行機・眼鏡・ピンセ

ット等) ○玩具類(トランプ・カルタ・スゴロク・羽子板・落下傘・凧・空瓶・木片・箱庭道具・まじごと道具・縄跳用縄)

3、初一・二藝能科方面學習具

(1) 初一・二圖畫工作方面の學習用具

- クレヨン ○色紙 ○クレパス ○畫用紙 ○繪具 ○寫生用標本 ○色チヨーク ○圖案各種 ○廣告用ポスター ○羅紗紙 ○きびがら ○手エテープ
- 篠竹 ○針金 ○ボール紙 ○木片 ○板 ○竹の片 ○糸 ○粘土
- 工作臺 ○工作用粘土板 ○鋸 ○金槌 ○釘 ○針金切 ○鋏 ○平透刀 ○リノリウム ○糊鍋 ○糊皿 ○布切

(2) 初一・二音樂方面の學習用具

- ピアノ ○オルガン ○蓄音器 ○レコード ○レコードサツク ○指揮棒
- メトロノーム ○音階圖 ○口形圖 ○シロホン ○音感教育用具 ○ハーモニカ

4、其 他

第二章 初一・二禮場性の教室經營細案

- (1) 學校放送聴取設備
- (2) 美術的、幼兒の可愛い、寫眞等を掲示して美的環境をつくと共に明るい初一・二の雰圍氣を醸成する。
- (3) 學藝發表（話し方、劇、遊戲、朗讀等素材に眞面目に行はせ、兒童表現意慾を充足せしめる。）（誕生會）（行事による各種場合に行ふ。）
- (4) 黑板類（正面黑板、背面黑板、小黑板等）を備へつける。（一教室に三枚以上は設備して活用したい。）
- (5) 教室用戸棚（教室の隅は學習上の空所利用として、大いに活用しなければならぬ問題である。）
- (6) 陳列棚（學習に使用せる標本實物模型、器械等を徹底的に觀察させる爲置く棚である。従來、この設備がないために其の時間に一寸遠方から見せた許りで仕末するために指導が不徹底になる場合が尠くない。）
- (7) 發表板（兒童相互に研究事項を發表し、或は疑問を掲示する等兒童が自由に使用し相互に研究をなし得るために設ける。發表事項は社會の出來事、珍奇な事項教科の研究發表、創作、繪等である。）

作、繪等である。）

- (8) 行事豫定板（毎月の行事豫定を掲示し、兒童をして學習上の自覺を與へる。）
- (9) 花瓶（一教室に三箇又は四箇を設備し、四季折々の新鮮な花草を挿し、美的訓練をした。花瓶があつても、花がさしこんでなければ無意味である。）
- (10) 鏡（たへず鏡を見させて容姿を矯正ならしめると共にこれによつて情操の陶冶を行ふ。初一・二の頃は習字の時間に墨をつけて平氣でいたり、鼻汁を出して何とも思はなかつたり襟を亂して自覺しなかつたりする事は珍らしくない、いつとはなしに自己を知るの機會を造る上に必要である。その様な事の生じたる時等指摘して叱るよりも、鏡に寫さしめて自ら正さしめるがよい。鏡の高さは、兒童の身長から考察されなければならない。）

(三) 皇國民體位向上の設備

- (一) 机・腰掛（身體検査の結果によつて定める。）
- (二) 姿勢圖（正しい姿勢圖を掲げておいて矯正な姿勢を指導する。身體と腰掛、距離、脊柱の正しさ、兩手は膝の上に等の訓練）
- (三) 採光通風設備（換氣・窓・カーテン等の利用に考慮する。）

(四) 温度に關する設備(特に寒期は保温に注意すると共に空氣が乾燥しないやうにする。)

(五) 其の他の用具設備

○砂場設備 ○手洗器 ○箱庭 ○石鹼 ○ウガヒ藥 ○タン壺 ○ストーブ

(六) 圖表類

○身體檢査結果表 ○異常兒の矯正表 ○體力テスト表 ○清潔檢査表 ○出席統計表

如何なる學年の教室でも、充分に整備されることが必要であるが、初一・二の教室は、わけても兒童の心理或は生活姿態から、學習形態から眺めて、充分行きとよいた經營をせなければならぬ。尙、教室に備へつけた用具の正しき使用法と、その後仕末の訓練をせねばならぬ。この訓練が正しく行はれぬ限り、教室は雜然として、教室の道場性を喪失するであらう。

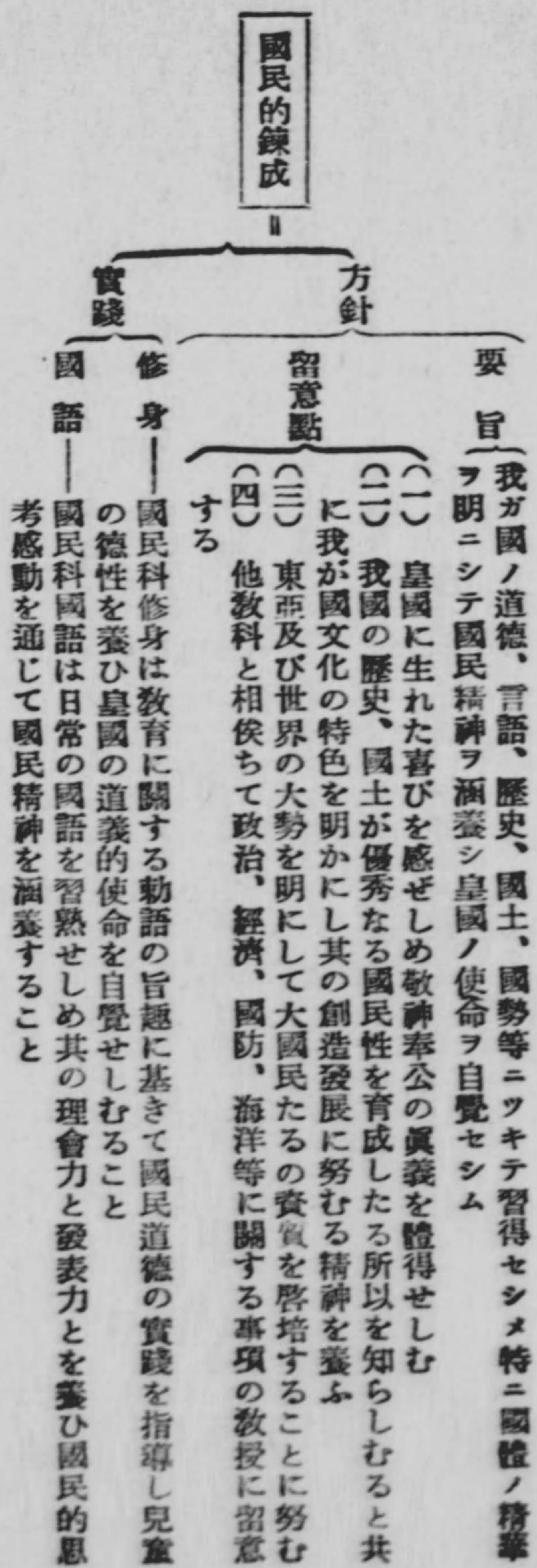
第三章 初一・二教科經營實踐細案

第一節 初一・二教科經營方針

- (一) 総合的な教授を實踐すること。
- (二) 初等第二學年の分科生活に進むにあつても尙初一兒童の特質に即して遊戯化された學習、教育的な遊戯をなさしめることによつて、自然的な過程的な方法として、出來うる限り総合的教授をとること。
- (三) 直觀を重視すること(郷土の自然現象の直觀は、智的類化の基礎であるところの概念的思惟や反省力の足りないこの時期の兒童に對しては一切を直觀化すること。)
- (四) 作業的取扱を重視すること(具體的體驗的なる學習をすること。)
- (五) 個別指導につとめること(個性を發揮させ、潑刺たる創造的活動をさせること。)
- (六) 環境の整理と利用につとめること。
- (七) 反覆練習をなさしめること。

第二節 初一・二教科經營實踐

(一) 國民科修身の使命



(一) 國民科修身實踐方針

(一) 國民科修身の使命

皇國の道とは即ち教育に關する勅語に仰せられてある「斯ノ道」である。從て國民科の要旨に鑑みて、その最も基本となるべき修身の教授が、つねに教育に關する勅語の旨趣に基いて行はるべきことは、改めて言ふまでもない。國民道德の大本は教育に關する勅語の中に明示し給ふところであつて、そこに國民は不易なる國體と、古今に一貫し中外に施して悖らざる皇國の道とをうかがひ知ることが出来る。

それ故に修身教授は兒童をして皇國の道を實踐しうるやう鍊成すると言ふことである。それは斷じて單なる抽象的理念としてのみ働くものであつてはならない。時と場所とに應じて充實した内容をもつことのできる具體的行爲たらねばならぬ。國民道德は決して概念的道德ではない。國民道德の概要を會得せしめ、斯の道を修鍊せしめることは、同時に皇國をして發展的ならしめることである。そして皇國民の徳性は、單なる道德的知識の總和や綜合ではなく、一層深いところに根據を有するものである。この點が修身教授に際して留意されなければならないのである。修身教授は即ち兒童の道德的意欲の發動をその生活の實際に即して促すべきである。生活實際に即して斯の道を修鍊せしめねばならない。

(二) 初一・二國民科修身實踐上の着眼點

- 1、天皇を中心とし奉り、億兆一心、臣道實踐のまことを致すことができるやう導いてゆくこと。
- 2、躰けられて行く兒童の生活記録を、兒童用書の「ヨイコドモ」は示してゐるのである。「サイケイレイ」に整然たるところを見せる兒童があれば、また「アラシノ日」に敢へて學校への道を急ぐ兒童もゐる。「カミノ舟」に工夫創造の精神を涵養しやがての大発見、大發明をなす素地に培ふやうな兒童も、この時期に於いてありうること。
- 3、「ヨイコドモ」の求めるものは、兒童の日々の實踐行爲のうち生きて働くものでなければならぬ。そこに國民科修身の根本方針がある。
- 4、説話とか誦讀とか作業とか訓辭とか各種の教授方法が考慮せられるにしても、如何なる場合に在つても兒童の有する生活體驗とかたく結びつけて行かなければならぬ。
- 5、如何にすれば眞に道徳的生命ある實踐をなさしめ得るかを明確に自覺して、各教科目の教育と一體となり、更に家庭教育と學校教育とが一體となつて形體だけの實踐ではなく、眞の純粹強力な自律的實踐へまでの指導の徹底をはからねばならぬ。
- 6、皇國民的徳性の涵養について。家庭學校社會が一體となつて傳統的な行を通して祖先尊嚴の精神涵養、平易な禮法神佛奉仕の行により禮祭の精神並に宗教心の涵養、從來輕視された例話をよ

り感動的、印象的に行ふことによつて皇國民的徳性の涵養をはかる。

- 7、道徳的生命ある實踐の指導。初一・二に於ては形から入り、良習慣の構成をする。初一・二の學年に應じて自覺的に指導してゆく。

(三) 初一・二國民科修身と他教科他教目との關係

初一・二では躰といふやうなものから指導し始めて、言語訓練をなす國語と緊密に關係させ、國史・地理教材となりゆくものをも次第に含ませて行かねばならぬ。この各教科目の聯絡、關係に深く思ひを致すことが大切なのである。

(四) 初一・二國民科修身實踐抄

若くしてけだかき 陛下の馬上の勇姿、大きい眼鏡が秋の日にちら／＼と光る情景、兒童達の學校生活のすべては、こゝに統一される。教室の正面にかゝげられた金びかの尊像である。

兒童達は来る日来る日の朝々を、一齊に立ちつくして不動の姿勢をとる。かはるがはるの代表が指名によつてすゝみ出る。そして 陛下の尊像を正視しつゝ靜かに誓ひの一言を奉る。

「天子様、今日も日本一の兒童となつてよくお勉強を致します」

言葉が終ると、一齊に最敬禮が行はれる。これこそ學級に於ける日毎の尊い儀式である。皇室への思慕、尊敬、感激、それを理くつなき信仰にまで育てあげねばならぬ。小さい時代に作

りあげられた信念、信仰はまことに動かぬ鐵塔である。何としても小さい時代がこよなく大事なきである。廣くひろげる望みではなく、深く掘りさげる願である。よき心、善き信念、善き信仰、それをせんだんの二葉時代に於てあせらずせかず培ふことである。

とりわけ、皇室に對する信仰への教育は、初一・二に於て培はねばならぬ。朝々の誓ひから、敬禮から……さうして繰り返すならはしから、形から、心に明るくも尊いかたまりを作つてゆかねばならぬ。

(二) 國民科國語實踐方針

(一) 國民科國語の使命

- 日常生活に使用する國語の意味であつて、それには話言葉としての音聲言語と、文字に書きあらはす文字語との両面がある。
- 「日常」といふのは「特殊の」又は「専門的」乃至は「高尚なる」國語に對し、國民學校の教育の限度を示したものである。
- 「日常ノ」といつたからとて、單に我々が日常の話言葉に用ひる程度の「口語」に限るわけではなく、文語及び或程度の古典語も含まれる。
- 理會力と發表力
理會力——讀むこと、聽くことによる理會力
發表力——話すこと、書くこと、綴ること發表力
讀み方・綴り方・書き方・話し方

○國民的思考感動

○我々は言語によつて、思考し感動して、思想を構成するのである。思想と言語が紙の表裏の如く一體不可分であるといふのはこゝにある。これも國語についていへば、我々日本人は國語によつて考へ、感じ、さうして思想する。我々の思考なり感動なり思想なりは、どこまでも國民共有の——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。かくてこそ、我々は日本人特有の考へ方、感じ方をするのである。

○無窮に生々發展すべき皇國の理想に基いて體現する我が國民の精神であつて、いはゞあらゆるものを包攝する博大な精神である。

○義勇奉公を中核として活動するのは勿論であるが、又優にやさしい「物のあはれ」もこれであり、外來文化を攝取して之を自家藥籠中のものとし、やがては独自の文化を展開創造して行く精神もこれである。

○國民精神

(三) 初一・二國民科國語實踐上の着眼點

- 1、卷一の編纂精神
 - 第一部——兒童の内部からもり上つてくる言葉をとりあげてそれを修鍊する。
 - 第二部——上から兒童に與へる言語、即ち「オハヨウゴザイマス」とか「センセイサヤウナラ」とか、さういふ躰の言葉を與へて、言葉を通して、兒童を誘つて行かうといふ意圖がある。
 - 第三部——普通の叙述の文體を、舌切雀や、桃太郎等の兒童がよくしつてゐる童話を通して、自然に教へこもるとする。

2、卷二・三・四の編纂精神——「ヨミカタ」に用意された要素を十分に發展せしめること。

3、教材體系

- (一) 兒童の生活に即した遊びの中に、兒童の理解の出来る範圍内に於いて、先づ我が國體の尊嚴に氣づかせる。「日本ノシルシ」「富士山」「二重橋」「菊の花」「きんしくんしやう」
- (二) 國民的感動といふ方面から、古くから民間に言ひつたへられてゐる童謡。「ねんねんころりよ」「ここはどここの細道だ。」
- (三) 敬神崇祖の念を養ふ。「オミヤノ石ダシ」「お祭」「神だな」「お墓まるり」「ゆめ」「机」「川」
- (四) 國防觀念を養成することに資する。「チチチタタ」「氣をつけ右へならへ」「兵タイゴッコ」「兄さんの入營」「子馬」「らつかさん」「日本は海の國」「海へ」「軍艦」「海軍のいさん」
- (五) 東亞新秩序の建設のために、海外發展の精神を自覺させる。「ラジオの言葉」「西はタヤケ」「金の牛」「滿洲の冬」「支那のこども」

4、「コトバノケイコ」は、初一・二の兒童の國語の作業を重視するために編纂されたのである。即ち、兒童の生活語の發音訓練であるとか、標準語の訓練であるとか、文字語彙の習得であるとか、あるひは、話し方や書き方の修練をさせるためのものである。

5、「コトバノケイコ」の内容としては、「話シ方」へ發展させる部面、ことばづかひに注意を與へる部面、語法に關する部面、あるひは「綴り方」へつながらる部面、それから「書き方」を修練する部面といった五つの部になつてゐる。

6、「話シ方」へ發展するところでは、兒童の生活を省みる緒があたへられ、そこから子どもらしい話材なり、話題なりが、湧き出すやうにしてあること。

7、「ことばづかひ」といふところでは、言ひまちがひやすい言葉について、それを正し、またかき誤りやすい言葉について、注意を促し、あるひは敬語を、子どもなりにおぼえさせたり、語彙を豊かにさせたりして、しらすしらすのうちに、ことばづかひが磨かれていくといふ風になつてゐる。

8、語法のところでは、この期の兒童にのみこめるやうな、ごくやさしいものを示し、しかも國語を學ぶ上には、ぜひ知つてゐなければならぬといふものが少しづつ示してある。これは、文法的な知識を與へるといふのではなく、いくたびか練習をすることによつて、語法が自然に身につくやうに作業させる。

9、「綴り方」へつながらる部面では「ヨミカタ」の教材に即して、ものゝ見方や考へ方を取扱ひ、時には「ヨミカタ」の長文を、要約させて記述させたり、敘述のかたちを、對話のかたちに改め

させたり、單純化された短文を、児童生活内にとり入れて、ひろげさせてみたり、こゝでは、文字による表現といふ仕事の基礎をねること。

10、「書き方」では、細字の手本を示してあるが、それによつて児童は文字の畫とか、筆順とかをおぼえ観察や聽字等専ら細字の練習をさせて書字脂力を養ふやうに細織されてゐる。

11、「コトバノケイコ」は、児童が「ヨミカタ」を理解するにあたつて、その手がかりとなり、これにすがつて働くことによつて、児童が、おのづから國語の道を實踐することになるのであつて教師の側からいへばそれがとりもなほさず讀方指導の擴充となる。

12、「コトバノケイコ」は副次的な存在ではなくして、働きの上からいへば大きな役割をもつてゐるといはねばならない。つまり「コトバノケイコ」は「ヨミカタ」と児童生活といふ二つの中間にあつて、その橋渡しの役を演じてゐることにならう。即ち「ヨミカタ」にあらはれた言葉、文字、感動、理念といつたものが「コトバノケイコ」といふ橋を渡つてきて、いつのまにか、児童の生活内に甦かへり心の糧となるわけである。またその逆に児童の生活内容が「コトバノケイコ」を通していつて「ヨミカタ」のかたちに定着され、具現され、具象化されていつて次第に醇正なる國語に近づいていくやうになるのである。

13、「コトバノケイコ」は、大切な國語の練習書であるが、このために児童の學習負擔を重くするといふことは全くない。時間數からいつても、また勞作からいつても過重になることはない。地方により、學校により、あるひは児童によつて、いろ／＼に深くも淺くも活用できるやうに仕組まれてゐる。重點的な構成をとり、時には暗示的に組織された所以はこゝに意圖が存するからである。

14、「書き方」は文字を明確端正に書く訓練をなすための科目の小分節で用具は主として硬筆を使用せしめること。

15、「綴り方」は、それが児童の表現力の涵養といふ點を主眼にしてゐるのは論を俟たないが、同時に「綴り方」を通して児童の生活指導を行ふこと。

16、方言は「話し方」の指導においても原則としてはいけない。方言がなければ「綴り方」が書けないといふのは標準語では本當の「綴り方」が書けないのと同じである。

17、教授法の複雑困難化を避けて文を純正強力ならしめ、その代り教材に對する研究を深めて自信と迫力を支持するやうに努めること。

18、アクセントの標準化に努めると共に文章に範る思想感情を讀み表はす工夫をなし、重要な詞

章は朗誦暗誦させること。

(三) 初一・二國民科國語實踐抄

1、小さい兒童の讀書生活を見入る時、彼等は國語としての材料より、むしろ讀書として材料を好んでゐる事がうなづかれる。少しむづかしい材料、一寸手ごたへのある讀物、つまりは困難と抵抗との伴ふ教材を少し厭も迎しないで、安々と讀みこなせる材料、骨の折れない讀物を、兩手をあげて要求する。こゝにも努力本位でなく、興味本位の彼等の心情が、明るい日向にとさらされるのだ。彼等はずつと居たいから讀むのである。讀んでこれこれの利得があるからなどと、けし一粒ほども思つて居ないのだ。現在生業の満足なるほゞえみ、それでもう彼等は充分なのである。生活の向上とか、發展とか、覺醒などと言ふ白帆は、まだ滿々と心にはられてはゐない。あるがまゝに、樂しき時代、その肯定に生きる彼等ではある。

2、彼等の讀みはきわめて淺い。言葉のうちちらついでゐる陰影とか、ひろげられてゐる風景とかをちよい／＼佇んで味ははんとする様な心のゆとりは少しもないその先は、その先はと、彼等は先にばかり心をひかれてゐる。味ひたいといふよりも知りたいことが彼等の欲求である。した

がつて淺くとも廣く讀みたいのである。

3、彼等は、多分の讀書慾をもつてゐる。入學當時の生木のもえるやうな時代が過ぎて、片假名の一通りでもマスターすると、彼等の讀書慾はどん／＼どん／＼、すばらしく燃え立てる。そのまづかに燃え立てる火の中に、師はかわき切つた枯木をつぐ、時には生木もなげくべる。然し一旦すばらしく燃えついた焚火だ。枯木でも生木でも、何でも、もつてこい。さう焔は、焔に私語いて、更の一段と心氣をまし、更に一層の煙を立つ。讀書慾の旺盛は、この期の喜ばしき現はれである。

4、喜ばしくも燃え上る焚火、然し焚火のあとには餘り尊いものが残つてゐない。彼等は先へ先へと筋を追ふ。あとは決して振りむかない。従つて讀みとつた意味は、きつと檻の狸のねげ顔である。あぜのあひるの足どりである。はつきりした物、しつかりした物を彼等はつかまない。オム返しか、前後の混亂かが彼等の答の常例である。

5、次に彼等は隨分と勝手な讀方をする。自分のほんとは狭い考へや、經驗で、讀みゆく。文をどんだんかたづけしてゆく。文とびつたりしない。

6、最後に彼等は文を起縁として、色々な空想の花をさかせる。まことにそれは、突飛な形と、奇

抜な色をした花である。然し、これは今讀んだ文章の莖、文章の葉の上に必然に咲き出た花ではない。彼等が自分の脱線的、架空的、奔放的の心から、無暗やたらともつてきて取りつけた造り花である。しかし、教師は決して、この造り花をやたらとむしりつつてはならない。この時代の現はれを一面に認めつゝ、一面にあやしげな造り花を、美しい自然の花へとつかへて行く様に、永い日の指導をくりかへすべきである。

7、兒童達は祭の日に、祭の文を讀み、祭の童謡を歌ひ、祭の畫を書くことを喜ぶ。初一・二國民科國語の教材は、さうした生活に最も近いものとなつてゐるから、理解が最も早いであらう。

8、初一・二の「ツヅリ方」それは生れ出たばかりの可愛いひよこである。お話によつて教多い言葉を覚え、うつすことによつて表現上の文字を知り、聲をかくことによつて單純な表現形式を悟つた彼等は、あせらずせかず、グラフと前方を見通してゐる教師の指導によつて、おのづと温まつてきた玉子の一つである。機が熟すれば、ひよこは、ひよこ自身の力で殻をつき破つて、明るい外光の中に、先づ生れ出たよるこびの一聲をあげる。まことに幾月の幾日の明記出来ない「ツヅリカタ」のかどやかしい生誕である。

ひよこは、ピョピョなきながら、それから、それから連發である。風をあげたことがとびだ

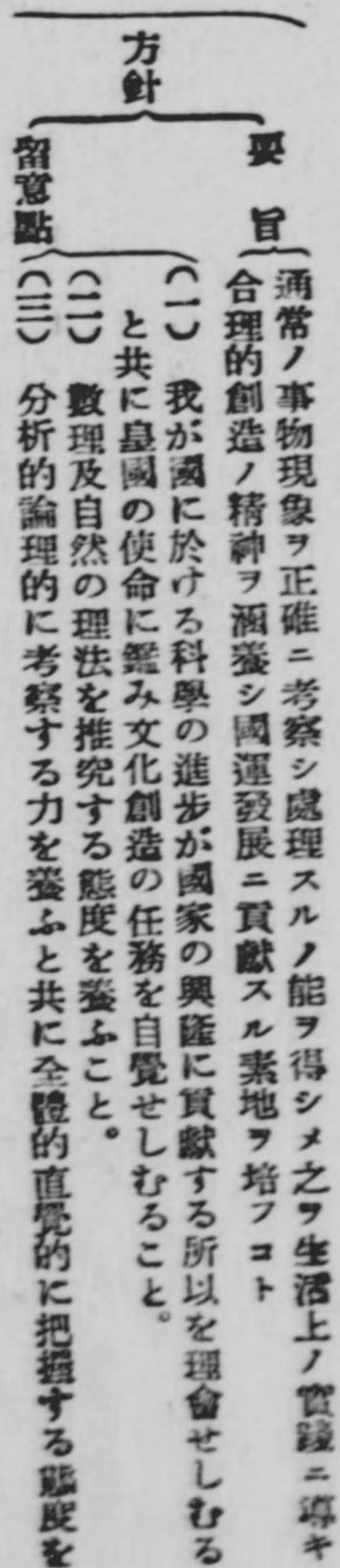
す。本を讀んだことが顔を出す。お使ひに行つたタイトルがひよつくり出てきたかと思ふと、たちまちそれが消えて、飛行船がとんできた風景とかはる。まつたく、それからめまぐるしい移動撮影である。

かざりけない心…… ありのままなる姿……

その尊さを尊むべきである。尊んでその心を、その姿を永遠に育てゆくべきである。

自分の見たこと——したこと——そして自分の聞いたこと——感じたこと——それから自分の思つたこと——考へたこと、それを思ひ出して、(一)自分の生活をもとにして、(二)つゝみかくさず正直に、(三)ありのままに、(四)こまかく、(五)たくさんにかゝしめることである。

(二) 理教科經營體系



科學的鍊成

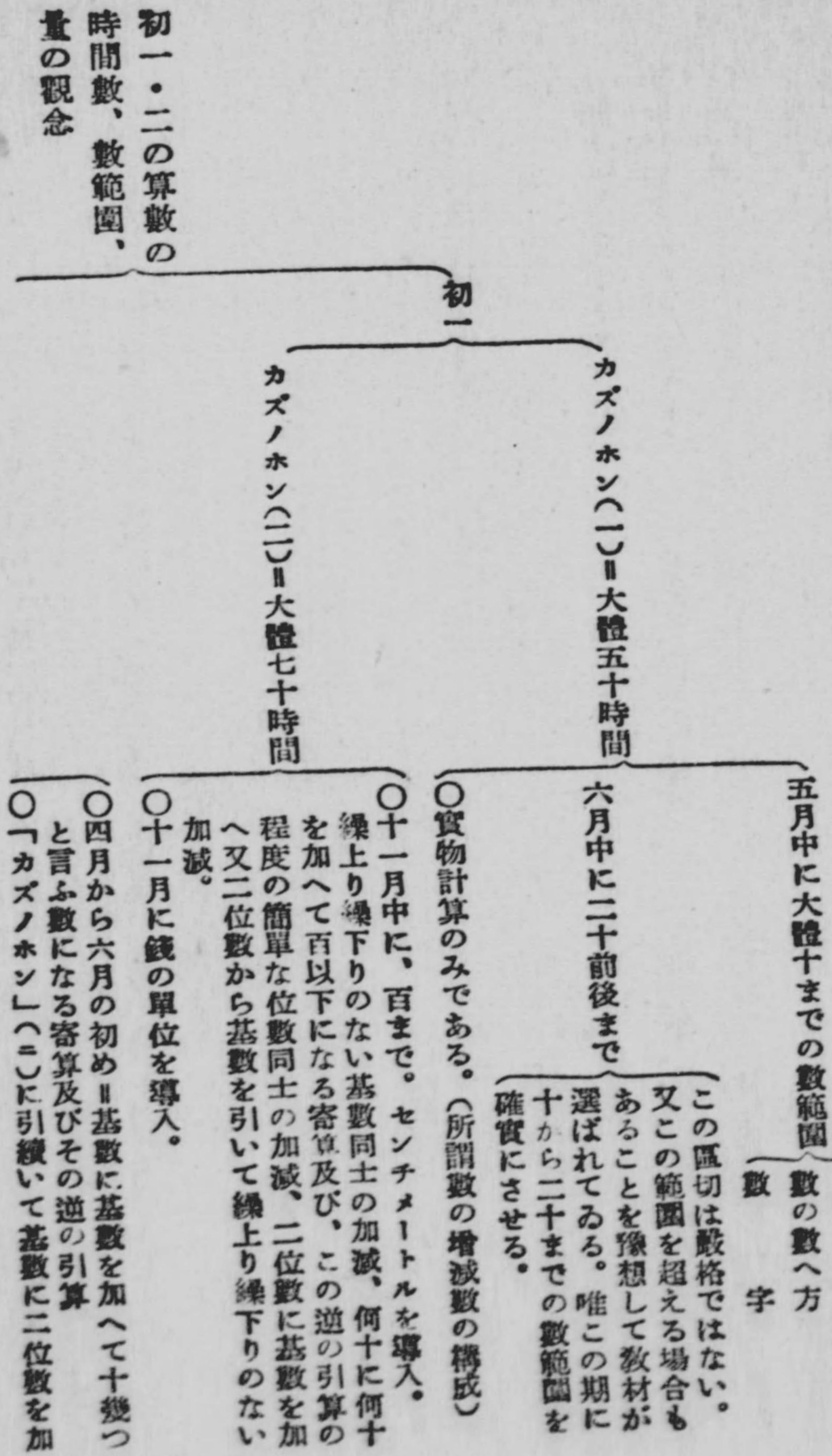
- 實
- 重んずること。
- (四) 觀察實驗を重んじ實測・調査・作圖・工作等の作業によりて理會を確實ならしめ發見工夫の態度を養ふに力むること。
 - (五) 國防が科學の進歩に負ふ所大なる所以を知らしめ國防に關する常識を養ふこと。
- 理
- 算數——理數科算數は數量形に關し國民生活に必要な普通の知識を得しめ數理的處理に習熟せしめ數理思想を涵養すること。
- 科學——理數科理科は自然界の事物現象並に自然の理法と其の應用に關し國民生活に強要なる普通の知識を得しめ科學的處理の方法を會得せしめ科學的精神を涵養すること。

(三) 初一・二理數科算數實踐方針

(一) 理數科算數の使命

理數科算數の使命は、皇國民たるべき兒童に數理を發見せしめ體認させ、更に創造せんとする心的態度、換言すると數理思想を涵養するところにその独自の使命がある。之は要するに皇國の道の修鍊としての理數科算數の使命は合理創造の精神の一面たる數理思想を涵養し、國運の發展に貢獻するの素地に培ひ以て皇國民の基礎的鍊成をなすことである。

(二) 初一・二理數科算數の實踐上の着眼點



初二

カズノホン(三) 大體六十時間

へて繰上りのない寄算及びその道の引算。繰上り繰下りのない二位数同士の加減、繰上り繰下りのある二位数と基数との加減。九月には、デシリツトル。

カズノホン(四) 大體六十時間

- 十月までに千まで
- 十月に圓の單位を導入
- 繰上り繰下りある二位数の加減
- 千までの數範圍の簡單な加減
- 掛算九九(一月から三月までは殆ど掛算九九の指導)
- 十一月にはメートルを導入

2、初一・二理數科算數實踐上の着眼點

(イ) 計算の指導。 實物に即した指導を重視して、それによつて計算の意義を具體的に確實に把握させ、堅實に能力の向上を計り、實際に役立たぬやうな形式主義を排すること。だから計算の程度を高めやうとせないうで、實際に即して觀念としてなく身につかぬ。これは所謂計算練習を輕視するのではない。實物に即して計算の意義を明確に把握させ、その能力を練成させる。

(ロ) 圖形、空間教材。 材料は豊富になつてゐるが所謂幾何學には拘泥せず、自然物・自然現象の中から兒童の能力に適するやうに自由に材料を選び、日本人の本來の優れた空間認識の素質を伸して行くこと。

(ハ) 量觀念について。 直觀に訴へたり、指測・歩測・コップの目測等の實地の處理を通して、量の觀念を堅實に養成して行き「單位」の實質的な意義を極く自然に把握しうるやうに留意すること。

(ニ) 圖表、統計。 圖表や統計表の指導は、單に直接的な技術練習だけを目的とすることなくもつと包括的に兒童の觀察、思考、處理の諸能力の陶冶をねらひ理數科の目的達成に資する。更には國家活動、國民生活の諸相への認識を深め國民的覺悟を促さしめる。しかし、圖表、統計の取扱ひは初歩的段階から漸進的に丁寧に、なるべく豊富にとり入れておくこと。

(ホ) 金錢。 幼い兒童に勝手に買物をさせたり、日用品の値段に必要以上の關心をもたせたりして小市民的消費經濟意識を餘り強く印象づけないこと。金錢の指導をするにしても「親の言ひつけでお使ひにゆく」場面とか「買物ゴッコ」をするとか言つた教科書に精神に徹すること(結語) 形式に墮し實地に即さない知識の注入をさけ、自然物及び自然現象及びその季節的變化との聯關を重視し、直觀・推理・企畫・工夫・發明・發見・實際化等の諸能力の健全な發達を

目的として、児童心身の發達の現實に即しつゝ、廣く國民生活の全領域より選んである教材を生かすやうに心がけるべきである。

(三) 初一・二理數科算數と他教科他科目との連絡

外形・内面、いづれの方面から言つても非常に緊密であつて、理科は勿論のこと、藝能科の圖畫工作や國民科の諸科目とも不斷の連絡があるから、有機的にすゝめることが大切である。

(四) 初一・二理數科算數の實踐抄

やさしいものから 　　むづかしいものへ

簡單なものから 　　複雑なものへ

浅い思考から 　　深い思考へ

さうした整然とした配當と系統……それが國民學校の「カズノホン」である。少くとも算數に於ては、飛躍はゆるされない。一が充分のみこめてこそ二の存在がわかつてくるのだ。この意味から系統を追つて進むことが、極めて大事である。算數はピラミッドを築きベベルの塔を打ち立てると同様である。歩一步の仕事である。理解から理解を呼ぶ足場としての系統を尊ばねばならぬ。そして教科書を眞に児童のものとして生かすことだ。

思ふに教科書は、棟上げのすんだ家屋に等しいものである。新木の柱が立つてゐる。教師はこの新築の室にすべての造作をしなければならぬ。壁を作ること、屋根を作ること、屋根をふくこと天井をはること、畳をひくこと教師の仕事はいくらでも有る。かくして寸分隙のない家を立て、そ柱とはりにかためられた教科書は惶として輝いてくるのだ。

教科書はもとより一つの方向と過程とを示した骨組みにすぎない。これに肉をつけ、生氣をふきこむのは一人一人の教師のつとめである。教師は、教科書をそのまま児童に與へることなく、これを兒童化し、興味化し、生活化し、具體化して子供の前に提供せねばならぬ。

新装した「カズノホン」が、そこに晴れ晴れしく生誕するであらう。

事實は、あらゆる知識の母胎である。すべての生きたものはここから生れてくる。具體はあらゆる概念への港である。すべての尊いものはここから積み出されてくる。直観はあらゆる統一への故郷である。すべての光あるものはこゝから芽ばへてくる。

新装の「カズノホン」も又、この事實、この具體、この直観を礎として建てらるべき上層建築に外ならない。換言するならば「カズノホン」は、子供の現實生活の中に科學的態度の芽を認め、こ

れを具體的直觀的な光と水とによつて、すく／＼と育てあげてゆくことだ。

生活の事實から科學を生む、そこからは眞の科學力が育つてゆく。そのためには、次のやうなことに注意せねばならぬ。

- (一) 兒童の生活はすべて全體的である。従つて數的生活に於ても加減乗除がばら／＼に存在するのではなく、相關聯して兒童の生活に現れてゐる。
- (二) 兒童の生活は遊戯である。従つて「カズノホン」の指導に當つても、この遊技の精神は生かされなければならぬ。
- (三) 「カズノホン」の遊戯化と共に、遊戯の數學化も考へなければならぬ。彼等は季節の風へのりきつて嬉々乎として遊んでゐる。そこに數多の數學的題材がはみ出してゐる。
- (四) 初一・二は算數を遊ばせつゝ、算數を理解させてゆくことだ。理解には事實がある。次に形式だ。さらに、その次に系統だ。兒童に數學を遊ばせると、ともすると、具體や、直觀や、生活にのみ専念するあまり、その系統化、抽象化を忘れやうとする。兒童の頭が散漫になる。「カズノホン」の一路には、系統・抽象の數々が、惶々としてうちたてられてゆかなければならぬ。

30

初一・二理科理科實踐方針

(一) 初一・二理科理科の使命

兒童に自然を觀察させるのが、その使命である。それには、自然に親しみ、自然から直接に學ぶことが最も大切なのであつて、私達をとりまく自然界が立派な教科書と考へることである。本を通して自然の色々の事柄を覚えさせて、單なる物識りを作つたところで、生き生きと働らく科學的な知識や技能を持つた國民を作ることには出來ないのである。先づ自然の物にぶつかつてその物を正しく見たり、正しく考へたり、或は適當に取扱つて行く能力をつくらなければならぬのである。

(二) 初一・二理科理科實踐上の着眼點

- 1 科學的處理 科學的處理としては、蒐集、採集、飼育、栽培、觀測、調査、實驗、測定、記録、統計、模型の設計製作、機械器具の分解、組立、取扱ひ、運轉等を行ふこと。
- 2 初一・二に於ては方法的に見て低い興味も、これを教育的に利用すること。即ち、兒童の積極的な活動を指導して、その所産である發見工夫を認めてやり、それをほめてやることによつて價



值的興味に進ませること。心こゝにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞えないのであるから教育の効果を増大するのには、どうしても児童の推進力である興味に十分な注意を拂つて、その喚起につとめること。

3 「自然の観察」の自然とは、理敷科の教育となる児童の生活環境をなす一切の事物現象を指すから人工物でも玩具等は、これを自然と見做すのである。

4 學校をして、すべてに豊かな自然の理科的な環境たらしめ、その環境を出来るだけ利用することを考へること。

5 自然の観察において、理智の方面を中心としながら自然の美しい姿は素直に美しいと感ずる情意の方面を踏みにじらないで、知情意一體のもとにすゝめてゆくこと。

6 観察をさせるとは、手をこまねいて唯見てゐることではなく、自然の中に入つて自然と共に遊ぶこと、又児童が自然に對して話しかけるやうにさせること。

7 「自然の観察」に於て「笛」を作るとか、又「らくかさん」を作るのは、それによつて、工夫創造の態度を養ひ、技能を磨くためである。

8 理窟でなしに、經驗を通して考へるやうに導いて行き、児童が工夫して作ることを奨励する

9 初一・二理敷科教授上の注意

(1) 教室外で直接自然に接するやうにすること (2) 土に親しむ心や木を愛し、生物を愛

する心を養ふこと (3) 土に對する親しみ、生物愛育の楽しみを感じさせると共に繼續

観察の出発点とすること (4) 共同して作業することを訓練すること

(三) 初一・二理敷科理科と他科目との連絡

初一・二の自然観察は、論理的にその究極を詮じつめると、科學的發展の方向を有してゐるが、その基礎に於ては、道德的發展の傾向をもつもの、藝術的發展の傾向をもつものと、互に相通するものである。

そこで、初一・二の「自然観察」の指導にあつては、理敷科教育本來の精神に目標をおくことは勿論のこと、出来るだけ關聯的取扱をすることである。圖畫、工作、算數の如きは、「自然観察」の間に多分に包含される筈である。自然物の數量的觀察は、屢々算數の教材となり、自然の美を圖畫に表現し、工作の素材とする機會も多い。例へば、初二の「自然の観察」に於て「三」「らくかさん」がある。之等は、紙と絲で落下傘を作つて、投げあげては、うまく擴がつておちるやうに色々工夫させるのであるが、工作との關聯が多い。又、初一の「自然の観察」「五、春の野」では、

春の野へ行つた兒童が、とんでゐる「テフテフ」を敷へたり咲いてゐる「スマイレ」の花を敷へたりして算數へ發展する。自然に對する兒童の生活を、單に理科的方面からのみ眺めることによつて指導することは、この時代の兒童に不適當である。兒童の生活を全體的に觀ることにより、全體的立場から指導することによつてこそ、自然に對する正しい指導が出来、將來發展すべき科學的心性もこの多方面の陶冶によつて、確立した基礎工事が出来、かくてこそ、始めて搖ぎない意蘊のある人間建築の目的が達成せられる。

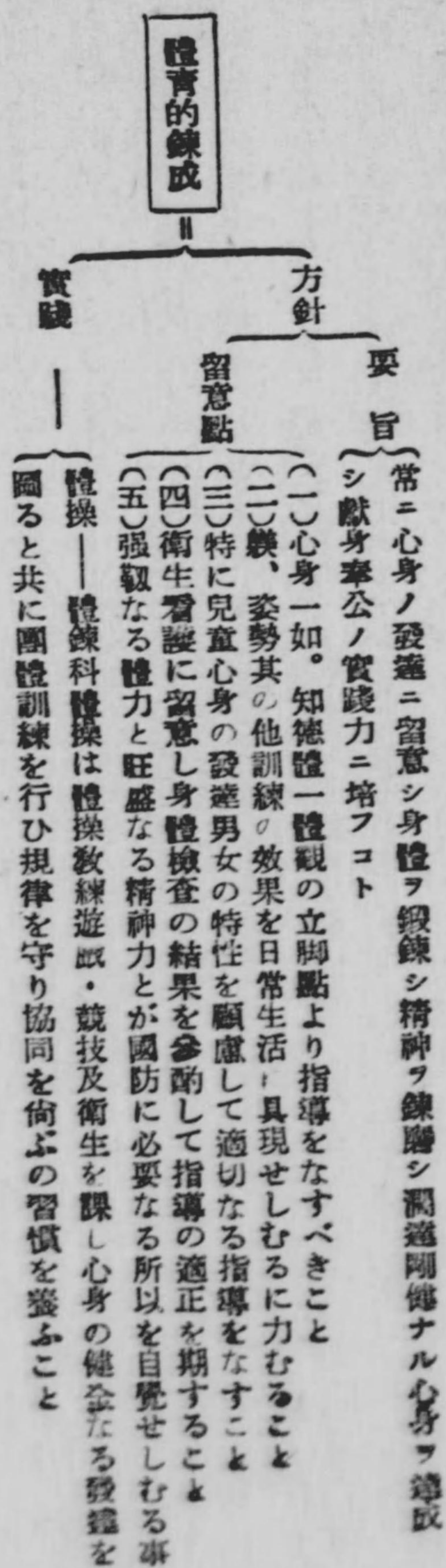
(四) 初一・二理科理科實踐抄

或人は兒童の收得してゐる語彙を類別し、動物、植物、天文等自然に關する語彙が特に豊富であることから眺めて、或人は兒童の營む遊戯を直觀することによつて、或人は兒童に現れる本能から論じて、如何に彼等と自然が密接不離の關係にあるかをといてゐる。とまれ、初一・二の兒童は、その生活環境たる自然界に對して非常に深い交渉をもつてゐるのである。

兒童は、暇があれば、土を弄り、草を摘み、或は水遊に、氷あそび、雪あそび、植物栽培、動物飼育と敷へたれば際限がないが、この時代の兒童の生活の大部分を占めてゐる遊戯、その又遊戯

の對象が多く何であるかを觀察する場合、兒童から自然を奪ふことは、彼等に最大の苦痛を與へることになるであらう。

(三) 體鍊經營體系



(一) 體鍊科體操の使命

體鍊科體操の使命は、身體的修練を通じ皇國民たるべき兒童を皇國民にまで鍊成する實踐であり日本の發展的使命を具現すべき國民としての精神身體の全的鍊成である。即ち、心身一體の修練を通じて心身の健全なる發達を期するにある。心身はもとから一體であつて分離しがたいものである

が、思考の便宜上、暫く心身方面から體操の目的を検討すると、身體的方面に於ては、身體各部の均齊にして調和的なる發達を促し、健康を増進して強壯ならしめ、動作を機敏耐久的にし、姿勢を端正ならしむるにある。精神的方面に於ては、身體の修鍊を通して快活剛毅な氣風を育成し、又團體訓練によつて規律を守り、協同を學ぶの習慣を養ふ。

(二) 初一・二體鍊科實踐上の着眼點

- 1 初一・二に於ては、遊戯及び簡易なる全身運動を主とすること。
- 2 體操は、全身の筋組織を平等に活動せしめることによつて、身體を調和的に修鍊し、特に正しい姿勢を育成する意圖の下に考へられてゐるから、身體を圓滿な發達に導くやうにすること。
- 3 體操の教授に於ては、凡ての動作を伸び伸びと大きく徹底して行はせること。即ち伸ばす場合には十分に伸ばし屈げる場合には十分に屈げ、轉ばす場合には十分に轉ばせなければならぬ。
- 4 端正なる姿勢の習慣に導くために、體操の際には終始正しい姿勢を以て運動させる必要がある。
- 5 體操の教授に當り器械を使用することは運動の鍛鍊的效果を高める上から言つても、體操に變化を興へ興味を増す上から考へても極めて大切であるから、器械使用の運動に十分時間を割きその効果を遺憾なく發揮させること。

6 遊戯及競技指導の際には、特に規約の勵行を強調し、苟くも之を無視し或は蹂躪するが如き一切の反則行爲を默視してはならぬ。即ち、正々堂々と遊戯し競技し、かくして特に快活なる心情公明なる態度を養ふやう指導すること。

7 衛生は知識として之を授くるのみにては、兒童の健康生活の向上には直接役立つものではない。兒童の働として日常生活の上に於て實踐に移させること。

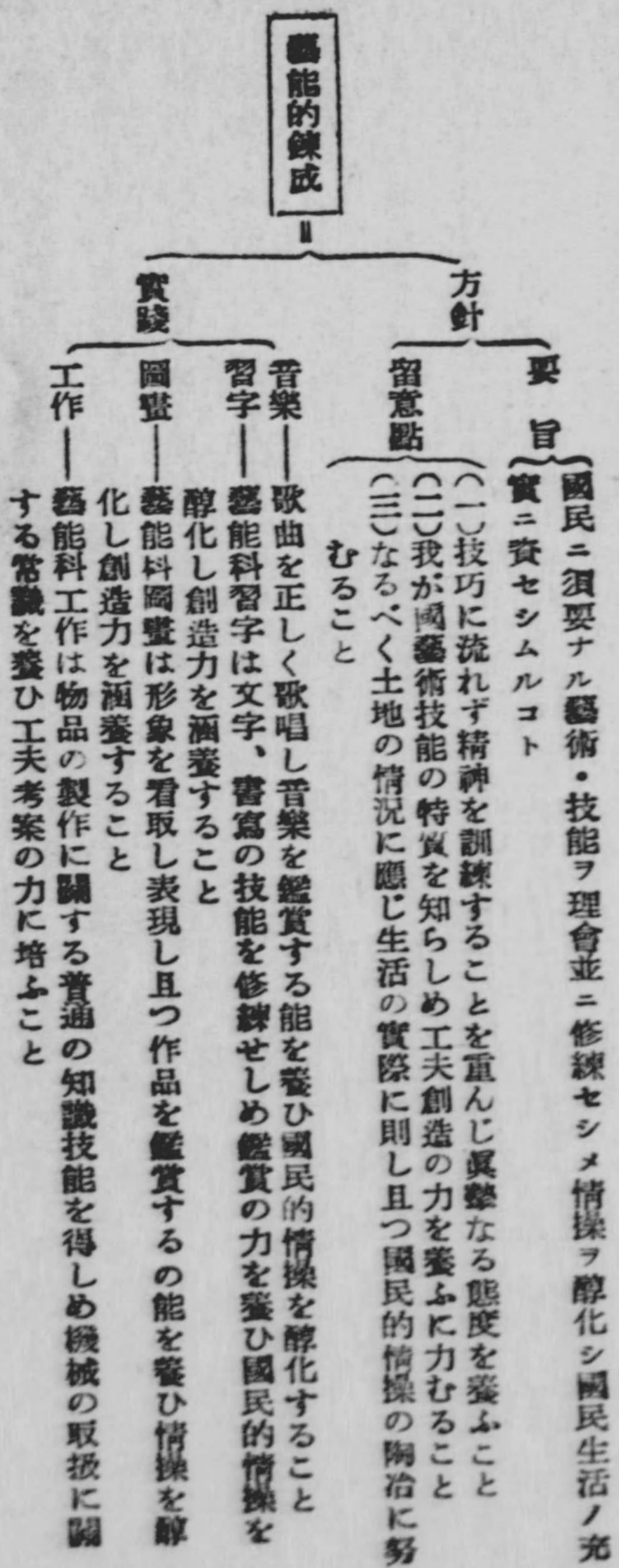
8 能力鍊成材料の重視。強壯なる體力を養成擴充し多方面的作業能力を獲得しこれを十分發揮し得る頑健なる身體能力を鍊成すべく選ばれた教材で、その教材の特質目的から體力氣力を鍛鍊向上せしむべき最も優れた材料である。國防的見地、民族の發展的立場から徹底反復練習によつて指導の十全を期すべきである。

9 形より能力の向上を。運動の指導は、その運動の目的發現を強調され、其處に投術を重視し合理的に力の修鍊を積む時、能力の進歩と共に最後に形は完成される。能力の進歩は形の完成であり技術即心術にして形の輕視ではない。

10 肚腰鍊成の實踐。世界新秩序建設に處する我が國の使命を自覺し善處しうる日本人としての生活態度を確立せねばならぬのである。

(三) 初一・二級練科と他教科科目との聯關
 藝能科音樂、國民科と關聯するところが多い。即ち、國民科的精神内容、藝能科的情操と有機的聯關をはかる。

(四) 藝能科經營體系



初一・二藝能科音樂實踐方針

(一) 藝能科音樂の使命

音樂は、國民精神の作興、人間情操の陶冶といふことに、直接端的に且つ深甚微妙の效果をもち、かつては政教の要諦であり、現代時局に鑑みても、重大なる意義があるのだ。恰もこの時、藝能科音樂は、歌曲を正しく歌ふことを修練せしめ、音樂の鑑賞について指導し、國民的情操を醇化し進んでは國民精神を涵養し國民生活に、うるほひあらしめんとするのである。かくの如く兒童の音樂的素質を啓發して高雅なる趣味を養ふことは、結局日本に優秀なる國民音樂が創造されるの地盤となるのである。

まことに、藝能科音樂は、國樂創造の素地に培ふ文化史的大使命を帯びるのである。

(二) 初一・二藝能科音樂實踐上の着眼點

- 國語教科書の韻文教材から多く採用されてゐるから之等と聯絡すること
- 兒童の心理や生活に即することに留意し、兒童の遊戯、童話、童謡、民謡等から比較的多く材料がとられてゐる
- 内容形式ともに、思ひきつてやさしく且つ短小な形式とせられてゐるか

1、教材選擇の方針

ら歌詞の全貌を全一的に把握させて、一つの歌詞を數時、數單元に分割教授をしないこと

2、教材排列の方針

- 兒童の歌唱意欲の啓培と、歌ふことによる喜びと満足を與へさせること
- 聽唱法によると共に、視唱教授の準備として、歌唱に即して樂譜を授ける
- 記憶力旺盛で和音感覺を養ふに最適の時期であるから、聽音訓練に力を注いで、その基礎を修練すると共に、律動感覺の修練を重んずる

目的—教則の中に音の高低・強弱・音色・律動・和音等に對し、鋭敏なる聽覺の育成に力める

方法—音高の記憶・律動の知覺・音色の認識・強弱の判別・和音の識別等をさせる

3、和音訓練について

注意

- 和音訓練と歌唱教育とが遊離し峻別されぬやうに兩者の聯絡融合をはかること
- 和音訓練に對して積極的熱意を缺いてはならぬ。又和音訓練を過大に評價して、これを音樂教育の中心眼目と考へたり、過多の時間と精力とをこれに傾け、肝腎の唱誦の教育を等閑に附してはならぬ。道は自ら中正にある。中正とはこれ等過不足の兩端を戒め聽覺訓練實施の意義を明徴にして、之に正當の部署を與へ、以て

音樂教育の全體としての進歩に大なる貢獻をなさしめるやう努力すること

4、聽音及び發音の練習 發音練習とは無理のない自然の發聲によつて正しい發音をさせるやうにする。また聽音練習とは音の高低・強弱・音色・律動・和音等に對し鋭敏な聽覺の育成に力める即ち耳に訴へた音を判別し批判し、意識し、樂器や歌で再現し、記憶させるまでに體驗させるつまり私達の日常生活環境につねに起る色々な音を教育的立場から吟味検討させるのも一方法であり、勿論音に對する感受性、その辨別、知覺、認識、記憶等の能力については個人的差異があるが、問題は音に對し出来るだけ耳を傾けさせて注意させるやうに仕むけること。

(三) 初一・二藝能科音樂と他教科科目との聯絡

初一・二藝能科音樂は、國民科と關聯する部面が多い。例へば、初一、四月の修身教材は「ガクカウ」であり、國語も「ガクカウ」であり、音樂も「ガクカウ」である。又國語で「ヒノマルノハク」をやれば、音樂でも「ヒノマル」である。初二五月の國語教材で「九、軍かん」があれば、音樂でも「ぐんかん」がある。一體歌唱は、歌詞即ち國語を取扱ふのである。それ故之等は、悉く國民科各科目と相俟つて十分その教育的價值を收める。又「正シイ發音」と言ふ基礎練習は、耳の訓練と

共に、直ちに國語科目の基礎練習となる。

更に、耳を通じて感ずる「律動」は音楽にも遊戯にも亦體操科とも關聯して、その教育的効果を擧げなければならない。従つて遊戯・體操その他團體的行動に用ゐられる音楽は、教育的に意義あり價値あるものでなければならない。

初一・二藝能科習字實踐方針

(一) 藝能科習字の使命

藝能科習字は文字を端麗に書寫する技能を修練せしめると共に、鑑賞について指導し、國民的情操を醇化し、進んでは國民精神を涵養し、國民生活を豊潤ならしめることが使命である。特に東洋書道、古來の傳統を尊重して、練筆と共に練心を重んじ、技巧の修練と共に澄心靜慮の精神訓練を旨とする建前をとり、且つ力めて生活の實際に適合するやうにせねばならぬ。

(二) 初一・二藝能科實踐上の着眼點

1、初一・二の主眼

○書寫態度の基礎を確立することにおく。従つて煩瑣にして窮屈な用筆や結體の規範を強制し

て、兒童の手を萎縮せしめる如きことは絶対に避け、運筆を自由濶達に大きく遅くすることに志すこと

○大字をしつかり練る大字練習の方針をとること

2、初一・二の鑑賞

○手習ひは先づ眼習ひよりと言はれる如く、見る眼の修練は習字に於いて重要視すること

○初一・二の鑑賞は格別兒童の心理に適應し、且つ手近い所から始めるべきである。即ち手本の文字、掛圖の文字、教師の範書、兒童の讀書などを教材となすこと

3、その他、實踐上の注意

(1) 下敷を用ひて練習させる所の、摹書による習字はやゝもすると結體本位に流れて用筆の修練に適せず、特に精神訓練を主とする習字としては寧ろ邪道に屬するから餘り之を用ひないこと

(2) 習字が國語からわかれて藝能科に位置した故を以て、直ちに所謂藝術書道へ轉換したものと考へ、純藝術的な所謂書家の書道を、そのまゝ習字教育に擬せんとするならば、それは普通教育としての、又國民の基礎的鍊成としての習字教育の精神と一致せぬものがあり深く

反省を要するのである

初一・二藝能科圖畫實踐方針

(一) 藝能科圖畫の使命

藝能科圖畫は、形象の看取表現並びに、作品鑑賞の能を養ひ情操を醇化し創造力を涵養する。情操陶冶について注意せなければならぬことは、圖畫教育に於ける藝術主義と實用主義との久しい對立である。兩者の主張には夫々理由があるが、前者の流弊としては、やゝもすると純粹美術的に流れて國民生活と遊離するところがあり、後者の餘弊としては、ややもすると卑近低俗な功利主義に墮して、情操陶冶に於いて缺くるところがあつたのである。藝能科圖畫は、この兩端を止揚して、實際主義の要求と美的情操の陶冶とが即融する美用一致のところを狙ひ、造形美の創造が、恰かも産業國防に貢献するが如き所に一路を求め、要は皇民鍊成の一途に歸することである。かくの如きものこそ、實に我が國藝能の光輝ある傳統でもあるのである。

(二) 初一・二藝能科圖畫實踐上の着眼點

1、主客兩觀を統一して、兒童の心性に即せしめることが、皇國民鍊成に適するやうになる教材

を選定すること

從來、主觀主義と客觀主義との對立があつた。後者は古い臨畫本位の教育に極まり、前者は近く所謂自由畫運動に極まる。共に夫々の理由と功蹟とを誇る所があり、特に所謂自由畫運動が斯界に生面を打開した功業を忘れてはならない。従つてその滲潤纏綿容易に抜くべからざる惰性を今日に於いても殘してゐる。今こゝに自由畫運動の功罪は論じないが、要するにこれが基調をなした個人主義、自由主義の教育思想は現代に於いて揚棄さるべき第一のものであることに疑ひはない。當來の圖畫は決して抽象的な個人の人間性の完成を目的とするのではなく、歴史的具體的な皇民の國民性を鍊成するのである。従つて單なる自然發生的な心性の自由奔逸に委すべきではなく、そこに客觀的なもの規範的なものに因る限界が附されねばならないのである。

2、日本畫興の問題について

國民學校の教則の中に「吾が國文化の特質を明らかならしめ」とか「吾が國傳統の技法を尊重すべし」といひ、反復この點に關説してゐるのである。併し、要は時期及び方法の問題であり、且つ日本畫復興を肯定することが、直ちに所謂西洋畫を否定する意味にはならず、又日本畫的材料及び技法に局限することにはならない。さればこそ教則は、直ちに引き續いて「東西の儀式に拘泥する

ことなく「廣く之を指導の上に活用して兒童の性能を伸長すべきことを強調するのである。要するに我が國傳統の造形文化について、自覺的矜持と自主的態度とを失はぬ限りに於いて、西洋の様式も支那の様式も廣く之を教育の上に活用して以て新日本文化創造の素地に培ふべきこと。

3、教材排列の方針

(1) 兒童の思想感情を擴充深化すると共に描現に向ふ本然の意欲を愈々促進し、その表現を自由に存分に大膽不敵に暢達せしめることを主眼とし、特に兒童の遊戯性に即して、力めて豊富に描かしめ、描くことの悦びと満足とを満喫せしむるに力むる。

(2) 描くことと造ることとが渾然未分化の状態にあるから、工作と圖畫とを綜合する。その排列は、圖畫的なるものと、工作的なるものとを概ね交互的に按配して、教材の量及び時間の均等を期すると共に、單なる兩者の羅列でなく、相互の有機的關聯と展開とを考慮する。

4、鑑賞教材について

(1) 兒童の鑑賞心理發達の段階に即すること

(2) 日本傳統の美術を本體として適宜東洋及び西洋の美術を配し、要は國民的情操の醇化に導くこと

(三) 藝術的價值優秀なること

(四) 我が國美術史上、外來美術攝取及び獨自創造の過程並びに態度を明らかにし、創造力涵養に適するもの

(五) 圖畫教科書の教材系統に合致し、又藝能科及び國民科教材と關聯あるもの

(六) なるべく能術史的意義を考慮して各時代及び各様各派の代表的なものをとること

5、色彩及び形體の教材について

色彩及び形體の基礎的知識は産業的、國防的觀點からは勿論、日常生活の要求よりするも、亦圖畫教育の合理的發展のためにも必要である。

(一) 色彩教育系統案を確立したこと

(二) 教科書各巻に標準色が示されてゐる―初一―色彩。初二―十五色

(三) 色彩教授用掛圖が制定せられた

(四) クレイヨン繪具の色彩の規格統一が計られた

(五) 色の名稱が統一せられた

(六) クレイヨンの色數―初一・二は十一色

(新教科書の企畫)

6、圖圖教材の表現形式は力めて多様性を期し新に繪巻物式、紙芝居式等の連續表現をとると共に

に、質感、重量感等の表現をも考慮して、共同製作に關する教材、時局的、奉仕的教材特に國防に關する教材について考慮すること。

7、描畫材料については、クレイヨンの傳統を踏襲すると共に、力めて廣く各種の材料により兒童の描畫生活の多彩豐富なるやうに期すること。

8、鑑賞用掛圖、色彩用掛圖の外に別に説明用掛圖があるから、これによつて形體、圖法、構圖法、陰影法等々により説明をすること。

(三) 初一・二藝能科圖畫と他教科目との連絡

藝能科工作・習字と連絡するは勿論、國民科、理數科との有機的關聯をはかること

(四) 初一・二藝能科圖畫實踐抄

兒童の作品は、靜かに眺め入つただけでは鑑賞も理解も起らない。描きあげられた作品、それの中に、兒童としみじみ語りあつてこそ、兒童の繪はきら／＼と生き、兒童の生活はびか／＼と光つて來るのだ。けだし兒童の描くものゝ特徴が、その「印象的な所」「主觀的な所」「個性的な所」にあると思はれるから、作品を見ただけでは、作品の價値を掴むことは到底出來ない。兒童の作品は、兒童の感情である。思想である。絶えず動く生活である。絶えず伸びる生命である。作品は描

くとも、其處に兒童のすべてがある。見ただけではわからない筈である。見る、語る、それこそ初一・二の作品に對して取るべき尊き態度である。

兒童たちは、本能的に描きたがる。描くことそれ自身が楽しいのだ。思ふ様、描かせ、楽しませることだ。兒童の自由な精神活動を充分に發揮させて、自由な境地に彼等を遊ばせつゝ、其處に内なる感激と、表現しやうとする意志とを育ててゆくべきである。兒童の心に二葉になつてゐる美、その美を描き現はさうとしてゐる欲望、それを活かすことである。そして、兒童の作品を見、兒童を語りつゝ見る——語るの一足先に、知ると言ふ世界を望むべきである。兒童の繪は、兒童の生活を兒童の姿である。まことに風の如くに動き易い兒童の生活は、生命は、空手をもつては中々掴むことは不可能である。兒童の作品は幸ひにも、その掴みがたい生命へと、丈夫な一本橋をかけ渡してくれる。「作品を通して生活を知り」「作品を語つて個性を知る」作品はよく兒童の獨自へのひろがりを教へてくれる。兒童の色彩傾向は作品にふれ／＼ば觸れるほどはつきりしてくるのである。

初一・二藝能科工作實踐方針

(一) 藝能科工作の使命

藝能科工作は、特に構成的工作力、機械的構作力及び機械に關する常識を養ひ、實踐的性格を養成する。然して精確綿密な技法、堅牢強靱なる製作、持久的完成の態度、共同製作の訓練、學習過程の重視、利用厚生の着眼等を考慮すべきは勿論、材料技法の日進月歩の現狀に即應して、隨時にこれを指導の上に活用するの用意において萬遺憾なきやうにせねばならぬ。工作教育に於て、藝術と技術との調和、美と機能との一如といふ所を尊重すべきは勿論であるが、從來のあるもののやうに、徒らに手先の器用さによる繊弱な小品を作ることをして能事とする所謂「細工」といふやうな考へ方から脱却せねばならぬ。又、勤勞精神の養成といふことは尊重すべきであるが、唯これのみを唯一無二と考へてはならぬ。時代の要求に鑑み、科學的精神、態度及び技術を強調せねばならぬ。

(二) 初一・二藝能科工作實踐上の着眼點

- 1、材料と季節の考慮、心理的配列と論理的排列の調和をはかること。
- 2、思想作を主として、寫實的、圖案的表現を加味すること。材料は紙と粘土と、黍稈が主である。
- 3、物に對して、種々工夫研究して、供給確保の方法を考慮すること。即ち、比較的教育的價値

ある地方的代用材料の發見工夫を以て之を補ふとか、材料の蒐集、購入等に關しては時機を失せざるやうに、細心の工夫をめぐらすとか、特に資源愛護の立場からも廢物利用につき一層活眼を開くとか、材料節約について、更に一段の研究を積むとか、百方策を講じてこの困難を克服し、窮して通ずるの一路を打開すること。

(三) 初一・二藝能科工作と他教科他科目との聯絡

藝能科圖畫、理數科理科との關聯する部面が多い。

(四) 初一・二藝能科工作の實踐抄

鏡と輝やく青葉の中に育つた微風が、そよそよ、しのび足で小草のわきの下をくすぐつて通る。小花の横顔に口付けして過ぎる。そして夢と流れる小川にかるやかな私語をくりかへす。小川は幾千幾萬の小波のつらなりだ。きらきら雲母の輝きだ。

晩春、初夏の光りと色のもつれあつた情景——感じ易く、動き易い兒童の心は何の理窟も説明もなく、この憧憬としてしかも水々しい情景を、もりあがつた肌に感じるのである。

彼等の生活はぶんぶんと匂ふ草原の花摘から、相撲から、微風のすべつて通る川べりへと明るくも、そはく移りかはつてくる。

心よい水遊び、舟だ。舟だ。すいすい走つて行く可愛い舟だ。
 工作としての季節の玩具が、そこに生誕する。「オフネ」が流れる。「ダンカン」も浮ぶ。「スイヘイサン」ものつてゐる。「オサカナ」も泳いでゐる。

紙をきる。はりつける。「筆立」「電車」「軍艦」「風車」とそのトントンパンのせか／＼だ。
 兒童の手にはほのかな汗がにじんでゐる。カアアをゆるする微風が、心よくそれをかき消してゆく。
 一室にひろげられた工作の教育。それは、なんと明るく生き生きしてゐることよ。

工作は、工夫と考案と創作と努力とが、一かたまりになつた汗の教育だ。総合的教育の實踐である。
 わけても初一・二の工作は、理數科、藝能科を一體とした典型的活動である。靜でなく動又動の
 教育勞作が一杯芽をふく、人格への教育である。しかも、初一・二の工作は

——模倣的律的なるものを排し、自由的遊技中心の工作へ。

——職人でなく、どこまでも創作人としての自己發展の喜びに満ちた工作へ。

——科學的正確さより、藝術的良心がちりちりひらめいてゐる工作へ。

かくして、光りある工作を、惜みなく、初一・二の兒童達の素手に渡さなければならぬ。

結果より、過程を

教材より生活を

模倣より、創作を

技巧より構成を

さうした工作を。兒童の喜びと美への心が一ぱいみちこぼれてゐるやうな工作を。

初一・総合教授實踐案

一、総合教授實踐の根底

國民學校令に於て、「初等科第一學年ニ於テ全部又ハ一部ノ教科及科目ニツキ総合教授ヲナスコトヲ得、前項ニヨリ総合教授ヲ實施セントスル場合ニハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ」とあり、ともかく認可があれば、総合教授を行ふことが出来るのである。総合教授は、方法として充分研究されたものは、その効果も著しいであらうが、一知半解の模倣に陥つた場合は、兒童が幼少なだけに其の弊は恐ろしいわけで、充分なる用意の下に具體的な案を備へて、地方長官の許可を得實踐することが大切である。尙教科については「全部又は一部の教科を」と言ふのであるから、四教科を皆総合的に取扱ふのもよく、又その中の或教科又は或教科目を総合的に教授するのよいわけである。

教育は、その對象たる兒童の發達に即して指導を進めることが原則であつて、初一の兒童は、その心意發達の程度に於て未分化的統一の姿にあるから、この期の兒童を指導するには、全一的未分

化的なところから導き、その心意が発達して次第に分化する様にすれば、漸次分化的指導に進むべきである。即ち主體的生活の末分化に應ずるに客體的教材の未分化を以てし、その一致した境地に於て指導を進めようとするものである。

幼い子供は情緒と行動とが一體の状態にあるから、具體的な生活に即し情緒の動きに基いて指導し、その行動を導くことによつて心意の発達を促すことが指導上の要點となる。かくして未分化的全一的な生活態度をとつてゐる間にもだん／＼分化的な萌芽は伸び、對象に對する態度が定まる様になつてくる。そして科學の本質をつかむため、之に對する一定の態度が出来た時、もうその兒童は分化的な生活態度の出来た兒童であつて、この時代に進むと夫々分化した材料を用ひ、次第に分化して行く過程を系統的に導くべきである。この場合は材料の上に於ても夫々分れたものによつて系統的な指導を行ふ必要があるから、教科の別を設けて指導するのである。かゝる故に、初一に於ては、未分化的な姿に基き綜合的な教授を行ふことが、最も兒童の生活状態に合致するわけである

二、綜合教授の實踐過程

幼い兒童の生活には、先づ物が興へられ、相手が興えられ、行動が導かれ、生活の場が作られなければならない。物は遊びの對象であると共に、行動の對象であり、物や友達が行動の中に一體と

なることによつて生活の場が作られるのである。

學習作用といへば、文字や數量等抽象的な記號形式を用ひる部面が多いけれども、幼い子供の學習に於ては先づこうした形式的な記號よりも、物それ自身、行動それ自身を指導することに力を注ぐべきで、教科書について文字を教へるより先に文字を學ぶまでの段階が指導されなければならぬ。即ち、實事實物について文字を教へるより先に文字を學ぶまでの段階が指導されなければならぬ。物を理解せんとする時代の子供は、一つ一つの名稱を覚えたり一つ一つの形態や機能を觀察したりして自分の生活との關聯を深めて行くのである。

こうして精神を太らせ生活内容を豊かにしておけば、次に來る文字・文章の指導が容易に進み、その力を高めることが出来るのである。

次に幼い子供の指導上重視すべきことは、感覺器官を修練すると言ふことである。目を働かせ色彩、形状、美醜について直接的な生活を通して教へ、言語とその内容とを豊かにし、耳を訓練して音に對する感覺力を高め、皮膚感覺を修練することは後日の身心發達上誠に大切なことである。然しながら知を授けて悪いと言ふのではない。概念化した抽象的に知識を急いで興へることはさげねばならぬが、兒童がその心意の活動に應じて知的な要求をもつ様になると、その需めに應じて知を

授けなければならぬ。

好奇的發達的な心意に基く諸要求は、兒童の進歩する根本力となるものであるから、求める力の強さに應じて知を興へることに心掛くべきである。

ところが社會に於ける兒童生活の實相は全くこの逆を行くものが多い。實生活を指導する充分なる言語力・行動力もない者に急いで概念を授け、文字を教へようとしたり、物に直接しての體驗を豊にしないで、教詞のみを早く教へようとしたりして却つて基礎の弱い子供に育て上げる場合が少くない。

これに加へて學校教育も亦記號や抽象に急であつて、知識を注ぎこむことをやかましく考へ過ぎるため、基礎のしつかりした強い力を養ふことが出来ない感がある。

(一) 綜合教授の重要部面

1. 表現活動

幼い兒童は暫くも靜止してゐないもので、常に何か活動しないではゐられないのである。身體を活させ動て運動するが、唱ふか、玩具を弄ぶか、繪を描くか、紙を切るか兎も角暫くもじつとしてゐるものではない。而してこの活動は自己の心身を働かせ自己を表現する働きであると共に、この

表現を通して友達との交渉を深め學習し理解して行くのである。

従つて、初一の兒童に對しては先づ活動そのものを指導し、表現的な活働力を伸して、學習力を高めるやうに工夫せねばならぬ。表現活動にも色々あるが、初一の子供の最も好んで行ひ且つそれが身心の發達に缺くことの出来ないものは、運動競技である。遊びを指導し、合理的・衛生的な運動を行はせ、友達と仲よく交る様導くことは、學校生活の始に於ける指導としては大切なことである。幼い兒童の運動は律動的であることが望ましく、音楽と聯絡した律動遊戯等は特に有意義である。次に子供の好むもので教育上意義のあるものは、お話である。お話は言葉を正しく用ひる力、他人の言葉を正しく理解する力を養ふと共に、その内容によつて思考・想像の力に培ひ、國民精神を養つて國民陶冶の目的を達することが出来る。而も言葉は文字より先にあるもので、文字の學習に進む前に於て充分話の指導をして、話し方及び聞き方を教へ、言語の教育を行ふのがよい。又文字の學習に進んでも文字と並行して正しい言葉の指導に力を入れるべきである。

次に初一の表現活動として大切なものは諸種の製作活動である。粘土をひねり、紙を切り、いろいろの材料を用ひて思ひ／＼の物を製作し、時間を忘れ、空腹を忘れて専念するところに子供らしい工夫創造の力が伸びて行くのである。特に材料を用ひ器具を使ふことによつて、目と手を修鍊し

形態・色彩・大小・硬軟・精粗等についての感覺を修練することが出来るのである。

2、收得活動

旺盛な發達過程にある兒童は、その身心を活動させて不斷に外界を理解しようとしてつとめるものでよくものをきく、好んで物を観る、なるべく物に觸れてみようとする傾向が強い。

従つて初一の指導に於ては、この旺盛な發達意欲に立脚して兒童の學習力を高めることに力を注がねばならぬ。

先づ兒童は實事實物を観たがるものであるから、なるべく多くの事物事象を觀せ、實事實物についての正確な認識と理解とを導く様にし、實際に即した質問に答へたり、物の觀方を指導したりして物事をよく観る態度を養ふのがよい。

又幼兒は何でも父母に尋ねたがるものであるが、初一になると、相當複雑な物事に興味を覺え、むづかしい質問をする様になるが、この間に對して面倒がるやうなことなく教へてやることによつて兒童の學習態度が養はれて行くのである。

又兒童の心理として、大人のしてゐることや、年上の子供のしてゐることがしたく、大きい人達の學習してゐることを早く學びたいと念願するもので、學習に對する慾求は幼い時から相當に強い

ものである。この學習慾に立脚して教へると文字を読むことも書くことも大した困難でなく、極めて自然に習ひ覺えられるのである。それ故に兒童の生活環境が文字や文章に親しみ得る様に作られたなれば、友達の力により、又教師や父母の力によつて、だん／＼文字力が進んでくる様になる。又物を數へるとか比べるとか測るとかの仕事も、遊びの發展した状態から次第に進んで行くもので、數量指導の部面も相當廣く開けて行くのである。

従つて初一の指導に於ては、兒童の發達に即しその慾求に立脚して指導を進めて行くことによつて、子供らしい遊びから學校の兒童らしい學習活動へ導くことが出来るのである。

(二) 實踐上の注意點

一、綜合教授は、學年的な發展形態であり、兒童の教育過程に於ける方法的原理であつて、目的原理ではない。

二、綜合は兒童の發達が未分化的統一の状況から分化の段階へ進むものであることを豫想しての未分化的融合であるから、兒童の心意が已に分化的活動に適するものは、之を漸次系統的な方向に導いて行くべきである。

三、一學級の兒童の中にも色々の兒童があるから、特に分化した働きの兒童に對しては綜合教授の

中に分化的系統的な指導を加へて行かねばならぬ。

四、技術的な指導に關しては、文化して行く根本から専門的な技術指導が行はれることが望ましいのであつて、たとひ程度は低くても、その指導の本質は純粹でなければならぬのである。

五、綜合教授と題材

生きた兒童の魂をよく活々と育てやうとする初一の教育に於て兒童生活の全體的な關聯形態を尊重しその具體性に留意して指導すべきは言ふまでもない。而してその具體性を尊重し、或る土地の或る子供の生活を中心とするためには、どうしても題材は一樣なものであつてはならない。一題材の内容が只その要素として考へられるよりもその題材が成立つために相互に關聯的に生ずる部面として考へるのが大切であり、それが自然であると思ふ。要するに未分化時代の學習に於ては題材選定が大切である。

次には、綜合教授を思ひつきでなく價值のある秩序あるものたらしめるためには體系的な指導細案が必要である。指導細案の内容としては、(一)學期別。(二)月別。(三)週別。(四)題材と教科書との關聯

(五)指導要項を記述しその方法を明かにする

六、綜合教授と教師の態度

教育道の行者として、教師の活動感化を重んずる初一教育が兒童の生活を重視して自發的創作的な遊戯生活を本體として彼等の具體的全一的生活を未分化的、綜合的に指導することの必要は論ずるまでもないが、それがためにやゝもすると、又他の反面に缺陷弊害を生じやすいことを忘れてはならない。

兒童の自發活動、創作を重んずる餘り、彼等の能力を過大視し彼等に過重の負擔を荷すやうなことがないとも言へない。この點充分留意し初一兒童の心理に堪がみ能力に基いて適當な指導をなし教師の活躍すべき部面は充分活躍し教ふべき事項は教へて教育的効果をあげなくてはならない而して教師は又、教育活動の原動力となり力強き教育道の行者となつて導き進んで行かねばならない。あたかも家に於ける家長の如く愛と偉力の中心となり學級は又一つの共同社會である。一家の父母が我が子の伸び行くすがたを喜ぶが如くあくまでも親子をもつて兒童を育て行かねばならない。兒童と教師は一致團結し、そこに感化が行はねばならない。殊に初一兒童の心理は模倣性強く自分の先生の言動は兒童の生活につよく反影するものである。こゝに教育者の人格といふことが重要なる問題となるのであつて、明朗快活眞に子供と融け合つた生活の出来る人であらねばならぬ

い、かつあるやうにと努めることである。

とくに教師と児童が共に生かし生かされつゝ伸し伸されて行く美しい明るい同行の姿が見られる

第四章 初一・二級の生活錬成細案

第一節 戯の教育論

一、遊びによる方法

戯の上に遊戯が大なる價值を有してゐることについて考へてみる。

(一)遊戯は彼等の止むに止まれぬ本能的要求によつて自發的に起る活動である。道德の本質も自發的な處に意義をもつものである。遊戯によつて自發性が強く養はれて居れば、これだけ道德の上にもその本質をよりよく生かしうるものである。

(二)遊戯の本質は全く巧利を離れたものである。天真爛漫、歡、喜法悦に満ちた活動である。道德の本質もこの點を高潮すべきものである。道德を一つの苦惱とのみ見ることはこの學年の兒童の道德生活を指導する基調ではない。何處までも巧利を離れた快活な心情を陶冶することではなげればならない。されば遊戯を徹底させることは、やがて道德的自然指導をなすこととなる。

(三)遊戯は、極めて原始的の表現なるが故に全く何等の拘束を受けないものである。自分の欲求の

一切以外何者も認めない。されば彼等の個性そのままの表現である。道德の本質も個性に即する以外何物もない。個性に即して自分の信ずる處を表現すべきものであるから、遊戯の活動は、この意味に於て不知不識に原始的道德とも言ふべきものを表現してゐるものと言つてよい。尙又、自然による道德生活の基調を涵養してゐるものである。

(四)遊戯には模倣と言ふことが殆んどない。常に創作が基調となつてゐる。その環境に應じて生命が活動してゐる。道德の本質も同様でなければならぬ。時、處、人に應じて活動されねばならぬ(五)遊戯は、一つの平和活動であり、歡喜活動であり、慰安活動である。その中にいる／＼の躰が自然の内に行はれる。この自然の平和歡喜慰安の内に養はれる心性こそ實に尊いものであつて、人の眞の生活力となつて永久性確實性を帯びてゐる。これが陶冶心性をあげると、「協調心」「自律心」「正義心」「同情心」「互助心」「忍耐心」「勇敢心」「節制心」「廉恥心」「統御心」「公共心」等である。之等一々養はれる機會等は、省略する。遊戯は、かくの如く自然の内はその心性を陶冶することの甚だ多いものである。されば、この時代の兒童の道德的指導の上に遊戯による方法を重視すべきことは謂ふまでもない。これによつて兒童の人格を道德的に導入しなければならぬ。單に知的概念などによつて道德的に導かうとするが如きは却つて兒童を道德的か

ら逃がすより外ないものである。之が指導については、わざとらしい點を加へてはならぬ。遊びの生活の中に自然に道德的事項が織り込まれる様にしなければならぬ。たゞ悪い傾向の顯れてきたとき之を適當に轉移させて行くことにとめればよいのである。遊びの中の生活に顯れた善行は賞讃してやるがよい。しかし、反對に悪い急行の顯れた場合に訓戒してはならない。注意すべきことは、あまりにその遊戯に耽溺することはよくない。適當に制限を置く必要がある。遊戯は興味中心の仕事であるが故に、結果に相當の考慮をおく作業に對しては興味を持たぬ様な性格をつくることは考物である。氣まゝになつたり、輕卒になつたり、怠惰ものになつたり、墮落したりする競争心が習慣づけられたりしてはならぬ故に、充分注意すべきである。

二、作業化による方法

作業は遊戯の一段進展したるものであつて、結果に對してある要求をもつものである。しかし同じ作業と言つてもこの時代の作業は、眞の作業の本質に立つべきものではない。遊戯が中心であつて、それが稍作業化されたに過ぎないものであつてよい。故に結果に對しても非常な期待をもつと言ふやうなことは必要ではない。學年國の手入、校庭の美化作業、小鳥の飼育を始め數量生活の作業化、工作生活等の作業等、「爲すことによつて學ばしめる」のである。作業によつて忍耐、勤勉、

觀察、清潔、同情、共同、責任、義務、相互扶助、自信等の諸徳が體驗される。之が指導としてはできるだけ彼等をして、苦痛拘束を感じしめず楽しんで作業することのできる程度のもを課すべきである。常に過程を尊重してやり尙結果についても相當の獎勵を與へるがよい。結果の失敗については何處までも同情の眼を以て視、共にその原因を探究してやつて、決して之をせめ立てて萎縮せしめるやうなことがあつてはならぬ。過程中の道徳的行爲については之を取り立て、賞揚してやるがよい。あまり道徳的訓練をその目標として之が成果を急いでならぬ。

作業の内に自然に啓培される道徳生活を自然に發展せしめることを目標としたいのである。

三、會合による方法

この時代の兒童の會合は、何と言つても遊びの會合である。合理的生活時代の兒童の會合とは、その姿に於て異なるものである。けれ共その中に啓培される道徳生活は實に貫いたものがある。各種儀式は勿論、遠足、運動會の如き體育を目的としたもの、學藝會音樂會等の學習を目的としたもの、中にも貫いた道徳生活のあることを知り之が指導を怠らぬ様にせなければならぬ。

四、行事による方法

この時代に於ては特に、行事的の生活が多い。この行事的の生活は誠に道徳生活と關係の深いものである。或はむしろ道徳生活指導そのものと言つてもよい。しかし、この時代の生活はよしそれにして遊びの生活であるが故に全一的の指導によつて、道徳生活が濃厚に含まれるものであると言ふ見解に立つのが妥當である。

第二節 「猿の教育」觀點

一、自然的道徳生活の導き

この時代の兒童は全く自然の生活をしてゐる。欲しければ食ひ、遊びたければ遊ぶ。他人に迷惑をかけるか否か等は考への中にない。その行爲が如何なる結果を招來するか等も一向に考へない。只、其時の止むに止まれぬことを、方法手段を撰ばずして満足せしむればよいのである。

全く衝動的に本能の欲求にかられて、思慮分別なしに行動する。行爲が善であるか悪であるかと言ふ價值判断もしなければ、それが行爲の方法にどんな方法があるか、その中の何れを探るべきか等は一向考究しない。殆んど動物が本能の欲求にかられて衝動的に動いてゐると差がない。

勿論、この時代の兒童の生活が、その様な動物と餘りに差のない生活であると言ふことは、動物と同様に、永久にかゝる生活で終るものであると言ふことは別問題である。動物は永久に動物生

活として何等の伸展がない。現状維持とでも言ふべきものである。

しかし、人間は伸展的擴充的の生活者である。この現實としての動物生活は、一つの過程としてものにすぎない。何れは一秒一分一時と刻々伸展しつゝあるもの擴充されつゝあるものである。動物が靜的の生活者であるに比し兒童は同じく動物的自然的生活をしてゐるものであつて、全く動的の生活者である。

動的な生活としての自然生活の現實は一つの過程としてのものである。動的過程とすれば、その過程は飽くまで尊重しなければならぬ。その過程を輕視して次の過程に移ることは出来ない。全くぬきにすることは出来ない。この過程をぬきにするとき、或は經濟的成功の場合があるかも知れぬ。しかし急造は失敗に終り易い。

この衝動的な生活、本能的な生活、自然的生活を指導し、漸次よき道德的習慣をつけ善惡の價值判斷をなし、各種の方法を考究し、最善のものをとり、漸次他人を考慮の中におき、結果についても考慮するやうに芽生えしめねばならぬ。

それは現實生活を他處にしてできるものではない。現實生活そのものゝ充實伸展であるべきである。そのものの成長であるべきであると言ふことは、たとへ教育以前と同一の行爲をしたとしても

教育以前の行爲は善惡の意識なく實現したに止まるが教育以後に於て前者と同一の行爲をなしたりとしても、その行爲は善惡の意識によつて爲したるとすれば、後者は前者に比して一段の進展である。又同一の行動が以前は一つの方法即衝動的方法であつたものが、教育以後には幾つもの方法の中からその一つを撰んだ選擇的方法であつたものならば、たとへ同一の行動であつても、後者は前者に比して一段の伸展である。

現實生活を殺すべきものではなく、現實生活をなるべく價值判斷的に選擇的に自主的になしうるやうに芽生えしめ成長せしめ品性づけしめることである。

二、自他未分の境地にまで

自分と他人との利害關係を意識し、なほ他人を無視するものは、それは所謂利己主義とか個人主義とか考へてもよい譯である。しかし、この時代の兒童の意識内には、他人と自分との差を知らない。全く自他未分の自然的全一的生活である。無自覺的自他未分の全一的生活を見て往々大人のとつてゐる様な個人主義利己主義が兒童の生活である等と考へることは大なる誤りである。この無自覺的自他未分の生活こそ、この時代として尊いものであり將來自覺的自他未分の生活への基調として尊いものである。

この自他未分の生活は、他人と生活をなし各種の複雑なる生活を續けてゐる間に、いつの間にか他人を意識することとなり自分も意識することとなり、他人と自分との關係を考慮することとなる何等の自他分裂を見なかつたものが自他に相分れてくる。この自他分裂の生活は、いつまでもそうした生活で終るべきものではない。人間の本性に立ち歸るためのものであるが故に、この自他分別の生活は擴充伸展するに従ひ、自他の區劃が除かれてくる。遂には自他未分のものとなる。それは入學當時の無自覺的の自他未分の生活とは異つて自覺的の生活である。

無自覺的自他未分の生活をして自他分化の生活に向はしめるのは學校生活が唯一の場所である。

初一・二學級經營に於ては、その點に十分の顧慮を拂はなければならぬ。學級が、單に文字を教へ、計算をなさしめるのみにあると考へてはならぬ。それだけならば金のあるものは、家庭教師を自宅に雇い入れて教育をするならば尤も徹底する筈である。しかし教育全體の意義から見て家庭教師によつて、或は家庭教育によつて教育の徹底が圖れないものであることを充分に知らねばならぬ。特に躰の目標は、現實の生活、無自覺的自他未分の生活から自他分化の生活に伸展し進んで自覺的自他未分の生活に導き個人として、家庭人として、社會人として、國家人として、世界人として完全なる生活者として成長せしむる處にあらねばならぬ。

三、教師に服従するを出發點として

道德の本質から言へば自己の立てたる規範に服従するもの、進んでは何等の考慮なしに活動したる事それが規範に合一する如き行爲でなければならぬ。しかしこの時代の生活は、未だ發達程度の低いものである。だから生活力として内在する規範は完全と言ふことは出来ない。従つて、生活上規範となるものは、自分以外に他の應援を求める必要がある。その應援は、児童自身の要求に應ずべきものであつて、教師から強制すべきものではない。児童自身が自らの規範では満足出来ないで教師に相談を求めたとき始めて教師は應援すべきである。教師の應援は、教師が發動的でなく、児童の發動である。教師は受動的である。されば児童自身から言へば自己以外の教師のもつ規範に從うのではない。教師のもつ道德的規範は、児童のもつべき道德的規範の代表である。児童自身が自分にかゝる規範が内在していなければならぬものと強制されるものではなく、児童自身が自分にかゝる規範が内在してゐるものを信するものである。

児童は常に自分の内に規範を求めんと努力して、それ以上幼稚なる點不備の點を信敬する教師に求めて活動するのであるが故に、漸次成長し漸次不備なる點が少くなるにつれて規範を内に求めて質及量が増加して來る。教師の規範に服従せるものが、やがて自分の規範そのものに敬虔の態度を

以て服従するに至るものである。初一・二の訓練指導の態度は、かゝるものでなければならぬ。成長の程度低きが故に、教師の規範に絶対せしめるものではなくて、自分の止まれぬ要求として、自分に満足出來ず、不安の結果教師に相談するとき始めて教師はその求めに應ずるものでなければならぬ。勿論兒童に對して教師の發動は兒童の本性を觸發して、自分のもつ規範で満足すべきや、いなや、所謂自我の分裂と統一とをなさしむべきである。その結果について指導すべきである。

服従を第一におくことそれが訓練の眞髓であると言ふ意味に於て、この學年に於てはかゝる意味のものでなければならぬ。従つて教師は、兒童の信と敬とに充分であるものでなければならぬ。初一・二の兒童の生活は、たゞのべてきたやうに自然的生活者である。これを俄かに小道德生活者として小市民として創り立てすぎて居りはしなかつたか。換言すれば自然生活に即して漸次發展さすべき筈の生活を、全く自然性を撲滅して別に強制主義によつて他の生活を入れ替へて教師の勝手なる權威に盲従せしめていたのではあるまいか。兒童の生活そのものを漸次成長せしめる方面を忘却してはゐなかつたか。教師の規範に服従せしめるとは、自發自展の兒童をして力を内に認めてその發展のために教師に相談する。その相談によつて提供されたる規範に服従することを出發點とすべきであることにその根本をおかねばならぬ。

四、道徳的に環境を整理すること

この時代の兒童は自然的生活者である。自分の生活を系統的に組織的に自分の中によつて計畫し、之を自分の意識的努力によつて實踐し之を自分の力によつて批判し、以て自分の成長を自覺的に圖る等は到底困難なことである。

環境の中に受動的に原始的生活をなし、それが一方に於ては不知不識の間に習慣づけられ、一方に於ては自我の芽生えと環境の刺戟暗示觸發により自覺的に啓培されてゆく、だから一方に於ては自發自展性を中核に成長發展を念願すると共に環境を整美して、出來るだけよき影響をうけしめることが必要である。

五、本能生活の醇化

兒童の自然的生活は何處迄も本能による生活である。本能的欲求によつて衝動的に活動するものである。されば、躰の一面は、本能的生活の指導であると言つてよい。これが指導について考へると次のやうである。

(一) 善用法 天分の本能をそのまま又はそれを基調として成長せしめるにある。例へば蒐集本能を故意に發動させて庭の草抜きをなさしめ、その分量によつて優越感を起さしめる如きである。

(二) 消滅法 天分の本能は、全部表現されるものとは限らない。就中環境によつてその表現又は成長が左右されることが尠くない。だから、環境の整理と言ふことがこの時代の訓育としては極めて大切である。消滅法は、環境整理によつて不用な本能をなるべく發現せしめない方法である例へば自己保存の一としての喧嘩は現在に於ては不必要なものであるが故に上學年兒童の生活を道徳的ならしめて喧嘩をなさしめず、以て喧嘩を見ることによつて發生する争鬭本能を未然に防ぐ如きである。或は教室その他の整頓を立派にして兒童の破壊本能を防ぐ如きである。

(三) 轉移法 兒童の本能には、之を他の方面へ導くことによつて價値を轉換せしめることが出来るものが尠くない。例へば破壊本能を利用して整頓の練習をするとか、争鬭本能を利用して善行競争をなさしめるが如きである。

(四) 賞罰法 本能は自分の止むに止まれない動力であるが、これも次第に自分の力によつてある程度までその發現に對して制御が出来るものである。しかし、初一・二の時代の生活はいまだ自然生活の域を脱し得ないから自分の規範によつて自覺的に本能を統制すると言ふやうなことは難しい。

父母教師長上の人々の賞讃に對しては満足をし叱責に對しては不満を起すものである。その満、

不満は、彼等の生活を左右する上に預つて力のあるものである。されば、賞讃されたることは再び之を爲さんとし、叱責されたることは再び之をなすことを中止する。即本能の發現に對して他人の賞罰を根據として或は表現し或は中止するものである。

六、觸發と暗示

初一・二の兒童、所謂自然生活時代の彼等に對しては理頓で以て指導するのは困難である。教師の規範を押し賣りするのは勿論彼等を殺すことであるし、兒童の規範はその程度が低い。この場合に彼等の規範をして成長せしめる上には、彼等の本性を觸發して彼等の本性に覺醒を能へなければならぬ。教師父母兄弟朋友の一言一行及級友校友の一言一行は自然に彼等の本性を觸發してこの成長を暗示するものである。兒童の側から言へば、夫等の人々から命令さるゝでもなく、又法律によつて束縛されるでもなく、又模倣するでもなく、只暗示を受けて本性が觸發され、それが機縁となつて、他のものの援助をからず自發的に自力によつて自己に即した方法で自分を實現するものである。

されば、兒童は、他人の模倣でもなければ、他人の援助をうけたものでもないだけ、自分を信ずるの念強く自分の尊敬を自覺する。そして、實行力の増進をはかることである。

なほ、暗示となるものは、單に人のみに限らない「山川よく偉人を産む」とか「居は氣を移す」とか山川の状態、全體附近の有様、住居室内の構造整美が兒童の本性に對して覺醒を與へることは言ふまでもない。

第三節 躰 と 級 風

初一・二學級經營の根幹をなすものは、訓練である。即ち躰である。躰なくしては、どうしても善良な級風を醸成し、望ましい學級を建設することは出来ない。

實に善良な級風は、初一・二兒童の品性陶冶の温床である。この級風に育ちつゝ、彼等の行動態度、言動、風格が醸成されるのである。望ましい級風の確立に精進する躰の教育即ち訓練こそは、學級經營の基底でなければならぬ。

・國民學校に於ては、躰の訓練を重視してゐるのである。躰は、形のみに論せず形の中に含まれる精神を重んじ、日本古來よりの傳統で、皇國の道を行往坐臥の中に即して行はれねばならぬものである。

初一・二躰の指導

(一)、兒童の自律自治を尊重して、自覺に基く躰の指導に努めること。

(二)、學級の社會化を圖り、協同の精神、公共心の養成に努め、ひいては犠牲的精神、社會奉仕の觀念を強調して、善良なる級風を樹立すること。

(三)、質實剛健、勤勉力行の習慣を養ひ、困苦缺乏に耐ふる修練に努めて、堅忍持久の精神を養ふ

(四)、禮儀を重んじ、隣保相扶の實をあげ、親切・愛敬の精神を以て銃後後援の強化持續に努める

(五)、時局の重大性に鑑み、益々敬神崇祖の念を深め、特に團體觀念の養成に勵むこと。

(六)、教師は絶えず時局の推移を洞察して、時局に對處すると共に、自分の修養に専心して、幼兒の躰の中心的源動力となること。

初一・二躰の方針

(一)、家庭との連絡により良習慣の養成を期する。

家庭生活から學校生活へ移る第一歩であるから、學級、學校生活の有意的、計劃的な躰の中に、個別的、自然的な家庭生活の情愛をこめて、あくまで兒童の生活事實に即して躰を行ふ。

(二)、本能、衝動に基く行爲の純化を圖る。

初一・二兒童の生活は自然的なる遊戯の生活である。従つて其の生活は本能的であり、衝動的で

ある。これを純化し訓練するところに遊戯の生活訓練化即ち全生活に亘る躰がある。

(三)、社會的、團體的生活への基礎的躰の萌芽を培ふ。

この時代の兒童は未だ自我の自覺が十分でないから、何事も自己中心的に行爲して、それが自己及び社會に、如何なる影響を及ぼすかと言ふことには關心をもたない。それであるから學級とか、學校とかいふ社會に於て、自分がそれを構成する一員であることを明確にし、その自分が社會と矛盾しないやうに努めるだけでなく、更にその社會の發展に貢獻するやうに躰ける。

(四)、自發的なる躰への進路を與へる。

初一・二兒童は、父母や師長の優越を認めて、これを愛慕し、崇敬するばかりでなく、よくその命に服従するものである。従つて躰も權威者の言を最善のものとして受け入れる他律的躰から漸次暗示や讚辭等による自發的躰への進路を辿らせなければならぬ。

(五)、環境の整理によつて躰の實績を高める。

初一・二の兒童は著しく模倣性を富んでゐる。従つて環境は常に周到に整理されてゐる。ことが肝要である環境の整理のためには家庭と緊密に連絡を保つことが肝要である。

(六)、國民的生活訓練への躰を重視する。

この初一・二から時局的訓練の基礎的陶冶を行ひ、我が皇室を尊敬し奉る信念を培ふ。

(七)、躰の源泉を教師の活模範に求める。

初一・二兒童の躰は教師の活模範によつてその大半の効果を收めることが出来る。躰は先づ先生自から、先づその實踐道に立たなければならぬ。

躰の實踐

一、一日の躰鍊成

(一)、家を出るまでの實踐要項

- 1、起床(服の着方、靴のはき方一人で旨く正しく)
- 2、洗面(ブラッシの使ひ方、顔の洗ひ方、拭き方)
- 3、東方遙拜、深呼吸
- 4、神佛禮拜
- 5、朝食(感謝しつゝ、よくかんで「頂きます」頂き方(態度の躰)終れば「御馳走様」と手を合して)
- 6、鞆の用意(忘れものがないやうに、學習用具を整理して)
- 7、出發(ハンカチ、鼻紙忘れずに、ランドセルをしつかり背負ひ、帽子を正しくかぶる「行つてまゐります」とはつきり。)

- 8、道の歩き方（右側を通る。道草をせぬやうに。菓子等をたべながら歩かない。友達と横列を作つたり等して他人の通行を邪魔しない。道路で遊ばない。友達や知人には挨拶をする。踏切は、左右をよく見て通る。持物に注意し、正しい姿勢で歩くこと）
- 9、言語動作の躰（言葉を正しく丁寧に終りまではつきり言ふ。敬語を使ふことを忘れない。物事は正確に敏速に）
- 10、身體服裝の躰（衣服履物について小言を言はない。自分の持物には必ず名前をつける。衣服は絶えず洗濯を怠らぬ。ボタンの取れたのや破れは直ちに修理する。ホックボタンは正しくはめ、帯は正しく結ぶ。紙ハンケチを持ち、徽章を忘れずにつける。手拭は必ず自分のものを用ひる。爪は何時も短く切り手足は何時も清潔に保つ。鼻汁は何時もよくかむ。出来るだけ毎日入浴して身體をよく洗ふ。）
- 11、登校（校門の出入には奉安殿に向つて正しく最敬禮。靴の入れ方、上靴との區別。帽子は帽子かけに。机中へ本のしまひ方。外で元氣に遊ぶ。教室の出入には、敬禮して入室。廊下を走らないこと）
- 12、朝會（口を閉ぢて、姿勢正しく。謹んで透拜黙禮。朝の御挨拶。校長先生のお話をしつかり

- きくこと。校歌は元氣に歌ひます。退場は、正常歩でマーチにあはせて元氣に出ます）
- 13、學習訓練（お家での勉強をしつかり發表します。教室ではしんげんに研究します。復習を必ず忘れないやうにしてくる。指名された時、はつきり答へる。手のあげ方をしつかり。坐つた姿勢、書寫の姿勢、本讀む時の注意）
- 14、休憩時間（外へ出て元氣にあそびなさい。太陽の直射の下であそびなさい。上着をぬぐ時は始末よくたぐんでおく。ハンカチで汗をふく。痰や唾は必ず痰壺へ。人の運動の邪魔をしないこと。危険な遊びをしないこと）
- 15、歸校（整理して、忘れものもないやうに「先生さやうなら」「みなさん、さやうなら」
- 16、歸途（登校と同じ）
- 17、歸宅（「たゞ今」服裝の着替をする。始末の仕方。學習用具の整理、時間割をくむ。忘れものもないやうにすること）
- 18、遊び（危険なことはないやうに。みんな仲よく元氣で。夕食時には、さつさと歸ること。夕食態度（前の通り））
- 19、就寝（「お休みなさい」着物のたぐみ方。口中をきれいにしつよくねむる。用便に行つてか

らねること)

二、躰の實踐

(一) 服裝に關する躰。次のやうにして躰の點檢を行ふ。

○月曜日|| 服裝に關する躰の點檢

○火曜日|| 身體清潔に關する躰の點檢

○水曜日|| 所持品に關する躰の點檢

○木曜日|| 學用品に關する躰の點檢

○金曜日|| 學級仕事分擔に關する躰の點檢

○土曜日|| 整理頓の點檢

これ等躰の點檢は毎週記録して、其の結果の反省を行ひ、學級の躰の向上の資とする。

(二) 學習の態度と躰

1、自分のことが自分で出来るばかりではなく、進んで友達とも協同して學習してゆかなければならない。

2、友達同志は教へ合ひ、互に個性の助け合ひを行つて、學級文化を高めてゆかなければならぬ

3、何時も自分達の質問を整理して、自發的に學習せねばならぬ。

4、自分達の學習を自分達で協議し、協働して行かねばならぬ。特に學習の自己診斷は必要である

5、學習はつねに聰明な頭、温き心動く手の三つを修練することを忘れてはならぬ。

(三) 學習衛生と躰

1、常に教室の窓を解放する。

2、教室内の温度と湿度とに留意する。

3、學習中は時々、一齊に窓外の青空を見させる。これは極く短時間でよい。

4、教科書と眼との距離を三十糎以上とする。

5、朗讀の姿勢は教科書の中央から下を兩手で持つて、教科書はやゝ前に倒して腕は眞直に伸す、ことにする。

6、板書の文字、學習帖の文字の大きさに留意する。

7 課外讀物の文字の大きさに注意する

8、掃除の時は窓を開放して行ふ。

9、掃除の時は必ずマスクを使用させる。

10、一日に三回は必ずウガヒをさせる。

(四) 週間教育と躰

週間教育は、國民教化運動の基本計畫として定められた週間であるが、之を機會として躰をしてゆかねばならぬ。週間教育は、一事實行の精神から、團體訓育の目的を達成せんとする具體的な訓育であつて、善良なる習慣の養成を以て目的としてゐる。

四月 社會的教養向上生活改善週間

五月 兒童愛護週間、衛生保健週間

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 六月 社會教育向上、生活改善に關する週間 | 七月 完全週間 |
| 八月 完全週間 | 九月 國民鍛鍊週間 |
| 十月 憲法週間、教育週間、生活改善週間 | |
| 十一月 國民精神作興週間、全國職業指導週間、産業週間、體育週間 | |
| 十二月 方面事業同情週間 | |
| 二月 國體觀念明徴に關する週間 | 三月 母の週間 |

(五) 行事による躰

躰は、どこまでも特殊のものである。よき皇民を鍊成するためには、日本的行事によつて日本的な躰を指導してゆかねばならない。躰の機會をあげると次の如くなる。

第四節 躰の鍊成細案

(一) 躰の生活鍊成論

朝會後及びその日の最後の學習を終つた後十五分間、生活反省をする。朝の生活反省では、今日の日程を考へ昨日の反省により、今日いかにそれを實踐するかを三思黙考させる。終禮の際は

今日一日の行動をよく反省して朝の反省を思考し、朝の時、自分の期したやうな一日をすどし得たか、どうかを反覆内省する。そして自分の行動に對し、呵責なき裁斷をくだし批判して己れを戒め自己の生活を向上させる。即ち、自分の生活を反省することにより、自覺を廣め、高めることによつて生活實踐への意思を修練せしめる。つまり、生活深化と生活強化と生活擴大とによつて生活文化を昂揚せんとする。かくすれば、學級相互の兒童は、協力一致して、互に助けあひ、互に信じあひ、互に競争し、戒めあつて切磋琢磨する。生活反省は、學級全體の兒童がその生活全體を露呈する教師も兒童も裸になつてかゝつて行く。そして、より多く、より眞實に生活を内省して行く。

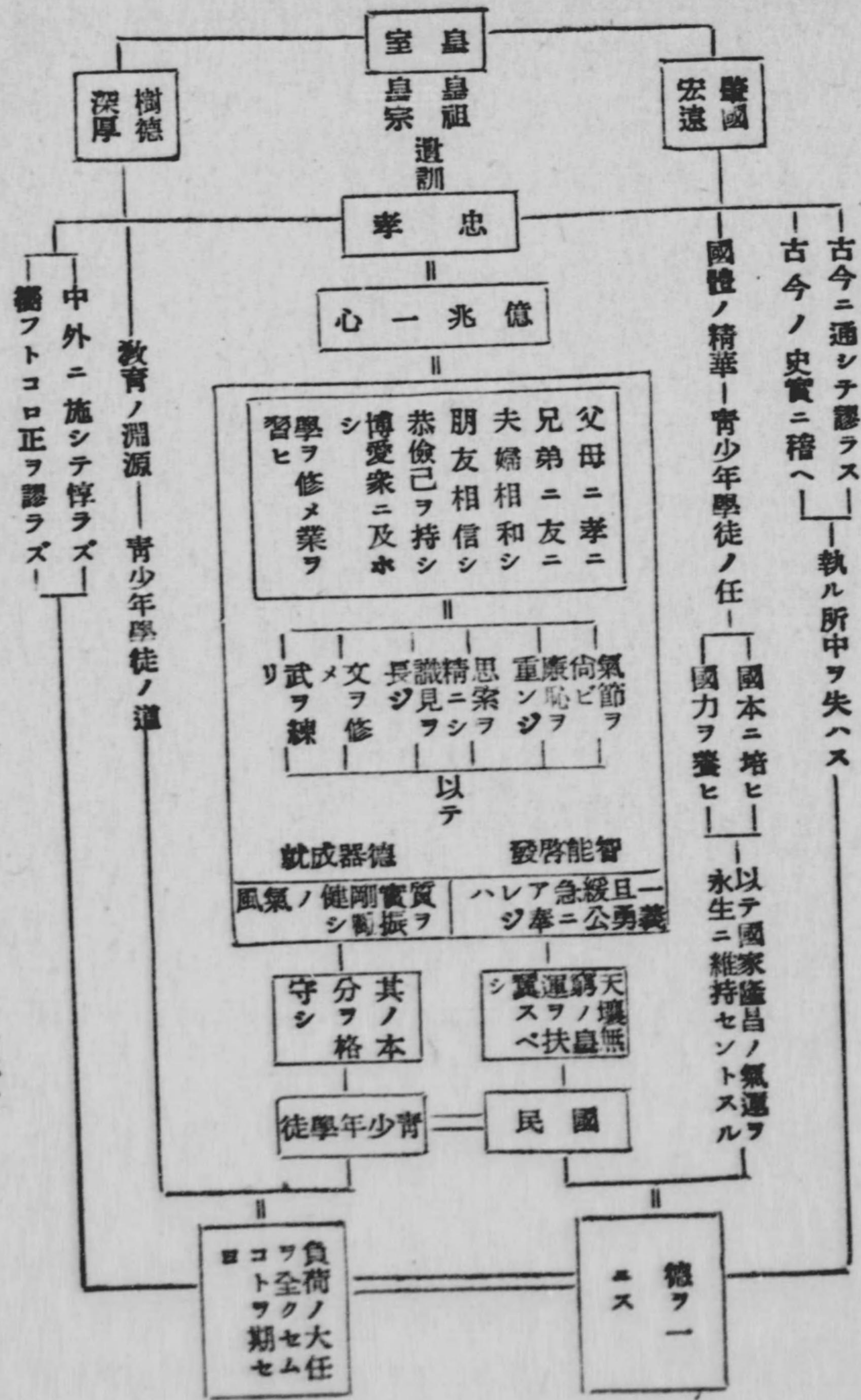
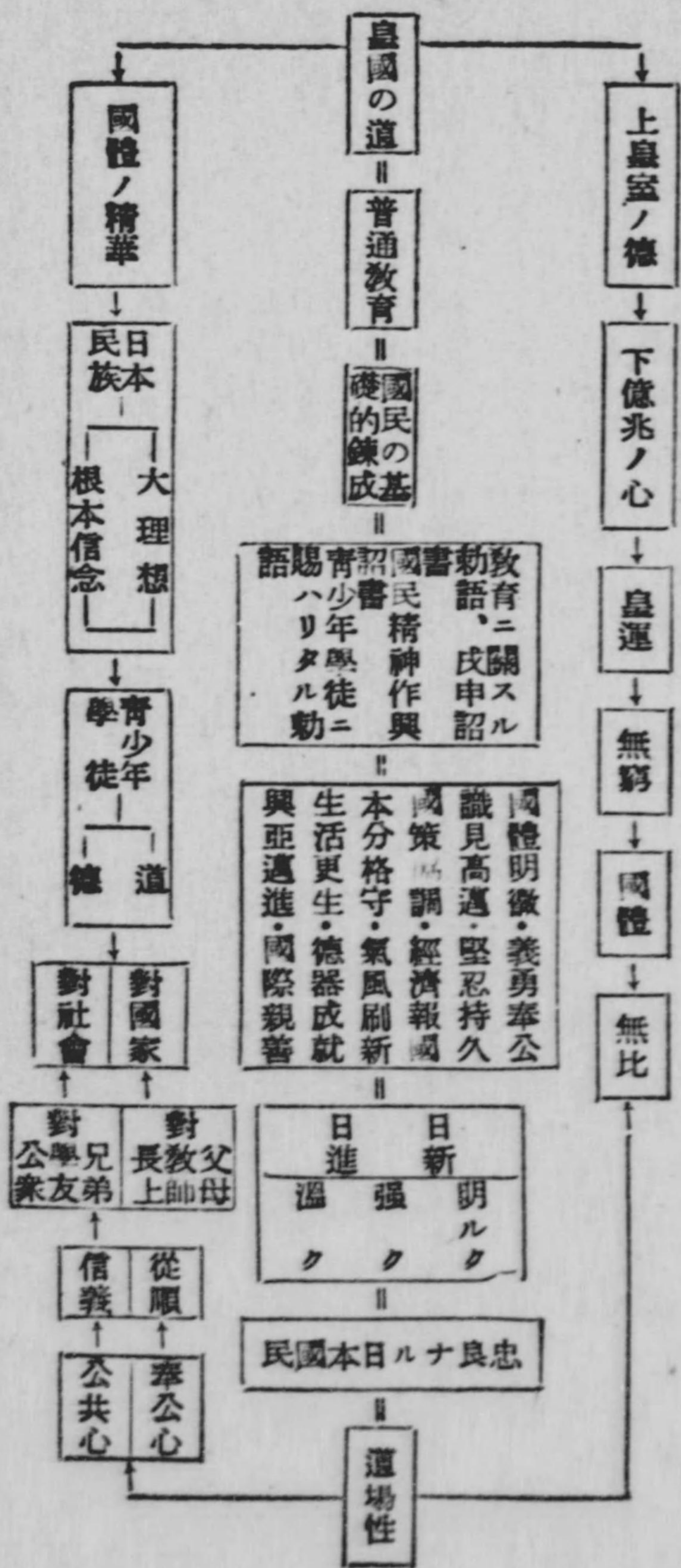
この生活反省は、一面國民學校の「ハナシカタ」訓練にもなる。學習中に於ては、少しも發表の出來ぬ所謂劣等生でも自分の生活のことと言へば、おすく／＼と發表する。從來の教育は、あまりに優等生を對象とした教育であつて、かうした劣等生を救済せんとする教育ではなかつた。

生活反省に於ては、毎日すべての兒童が何等かの發表をする。沈黙したり、教室の片隅で踞躑したりするものは一人もない。これによつて、教師は兒童の生活を認識する。例へば、家庭の様子等も、兒童はあけすけに發表する。更に兒童側から、言へば下意上達である。

「誰々さんが、廊下に落ちてゐたマントを、ひろつてかけられました」

「誰々さんは、感心ですね。「ヨイコドモ」で習ったことを、ちゃんと行つてゐられます」
 生活反省に於ては、教師のドラマによつて、簡単に道徳的判斷を下さずに兒童相互によつて生活事實を内省させることが大切である。

(三) 初一・二級の生活錬成體系



(二) 初一 五月の級の生活練成細案

週	週五第	週六第	事項練成	月日	行事	生活練成要項	教科	科目との關係
	五、一 赤十字デー	五、一 愛國貯金	五、一 赤十字デー		赤十字デー	一、興亞奉公日をしっかりと暮すこと 二、戦時の日本の子供だから強い身体の子供になること(端午の節句生活) 三、朝會のお話をしっかりと聞きませう	國民科 國語 算數 藝能科 圖畫工作	國民科 國語 算數 兵隊ゴッコ カブト
	五、一 興亞奉公日	五、一 愛國貯金	五、一 興亞奉公日		興亞奉公日	一、毎日休まず勉強をぬかさずにやること 二、教室ではお互に手を挙げて発表し合つて調べること 三、わからないところは先生に尋ねること	國民科 國語 算數 藝能科 圖畫工作	國民科 國語 算數 兵隊ゴッコ カブト
	五、一 興亞奉公日	五、一 愛國貯金	五、一 興亞奉公日		興亞奉公日	一、興亞奉公日をしっかりと暮すこと 二、戦時の日本の子供だから強い身体の子供になること(端午の節句生活) 三、朝會のお話をしっかりと聞きませう	國民科 國語 算數 藝能科 圖畫工作	國民科 國語 算數 兵隊ゴッコ カブト
	五、一 興亞奉公日	五、一 愛國貯金	五、一 興亞奉公日		興亞奉公日	一、興亞奉公日をしっかりと暮すこと 二、戦時の日本の子供だから強い身体の子供になること(端午の節句生活) 三、朝會のお話をしっかりと聞きませう	國民科 國語 算數 藝能科 圖畫工作	國民科 國語 算數 兵隊ゴッコ カブト

の月本指
針
(識見高邁)
本學年相應に時局の重大なること皇國の歴史的使命等を知らせ時局生活を適正ならしめるには、先づ思索の態度、知識を擴めるに當りての基礎的學習態度を重視する。

週	週七第	週八第	事項練成	月日	行事	生活練成要項	教科	科目との關係
	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日		青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	四、お仕事を、する時は自分でよく考へてやること 一、「青少年學徒ニ賜リタル勅語」に由來して (一)うそをつかないこと (二)まじめにおしごとをする (三)落着いて考へ深く出す (四)不作法なことをしないこと	國語 修身	四、オトモダチ
	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日		青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	四、お仕事を、する時は自分でよく考へてやること 一、「青少年學徒ニ賜リタル勅語」に由來して (一)うそをつかないこと (二)まじめにおしごとをする (三)落着いて考へ深く出す (四)不作法なことをしないこと	國語 修身	四、オトモダチ
	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日		青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	四、お仕事を、する時は自分でよく考へてやること 一、「青少年學徒ニ賜リタル勅語」に由來して (一)うそをつかないこと (二)まじめにおしごとをする (三)落着いて考へ深く出す (四)不作法なことをしないこと	國語 修身	四、オトモダチ
	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	五、二 青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日		青少年學徒ニ賜リタル勅語下賜記念日	四、お仕事を、する時は自分でよく考へてやること 一、「青少年學徒ニ賜リタル勅語」に由來して (一)うそをつかないこと (二)まじめにおしごとをする (三)落着いて考へ深く出す (四)不作法なことをしないこと	國語 修身	四、オトモダチ

一、本當の元氣があつて、しかも氣立のや藝能科
さしい子になること(人に迷惑をかける
な、無遠慮はいけない)
二、一寸したことになかない子になること
三、學用品を大切にすること
四、少し位苦しくてもおしまひまでやりと
げる

(三) 初一 六月の躰の生活鍊成細案

週		事項	鍊成要項	教科との關係
日	月			
六	一	毎月同前	一、食物に好嫌ひを言はないこと。何でも頂くこと	理科
六	四	四ムシハ豫防デー	二、古いものでも辛抱し不平を言はないこと	
六	一〇	時の記念日	三、學用品は使へるだけ使ふこと	理科
六	一一	入梅	四、いやなことでも辛抱してやる	
六	一五	毎月同前	一、學用品、衣服、所持品の整理をすること	理科
			二、學用品を大切に使うこと(鉛筆・費用紙・練習帖)	
			三、國産品の愛用につとめること	理科
			四、國防資源蒐集 五、銀紙蒐集	

の本指

(經濟報國)

思想戰經濟戰武力戰等と共に皇運扶翼の爲、永遠なる國力發展のためには最重
要なことである。本學年に於ても各自の生活周圍を主體として經濟的に國に報
ゆるべき行爲を訓練する。

週二十第		週一十第	
國報勞勤		張擴産生	
	六、下旬衛生週間 六、二五皇太后陛下御誕生日	六月中旬苗代害虫驅除デー	六、廢物の蒐集をすること
			一、苗代をいためないやうにして、害虫を取ること
			二、果樹園、學年園の草むしりをする
			三、家畜を可愛がり、飼料をあたへること(兎・雞)
			四、藥草採集をすゝんでやませう
			五、お家の仕事を、お手傳ひいたしませう
			一、天皇陛下、御國のために草むしりや、お掃除を一生懸命にすること
			二、勤勞奉仕日の實踐徹底
			(一)作業提示 (二)誓詞
			(三)作業 (四)整理
			(五)反省
			理科
			理科
			理科
			六、春の種まき
			理科
			六、春の種まき

(四) 初一七月の躰の生活鍊成細案

週	月本指	事項	練習要項	教科題目
週三第	（義勇奉公） 「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ズベキ」我々は現時においてしつかり分を守り、文を修め、尙その上にあふべき體を作り、やがて國に捧げられる尊い身となることを自覺させる。	七、一同前 上旬防空訓練 七、七七夕祭 日支事變記念日	一、天皇陛下の御爲に忠義を盡くす、よい日本人となるには、 （一）學校でよく勉強すること—學習訓練 （二）強い體になること—暑中保健訓練 （三）防空訓練をしつかりやること 一、我等のまもり（銃後奉公）についての訓話を（一）兄さんの分まで僕がやる覺悟、がまんづく （二）何のこれしき、戰地を思へば辛抱が出来ること （三）國旗尊重—美しい日の丸の如く。皆心をあはせて、勇ましくお仕事にはげむこと	國民科 修身 アリ
週四第		七、一五同前 七、一國旗制定記念日		國民科 國語

週	月本指	事項	練習要項	教科題目
週五第	減死報國	七、二〇土用入り	一、支那事變、殊勳者のおはなしをきかせること 二、天皇陛下の御爲には、一身を捧げてつくさねばならぬ 三、戰場に、出なくても自分自分の仕事を一生懸命にやることが國に報ゆることであることを話す 四、常に何をす時でも、天皇陛下、御國のためにと覺悟をして、しつかりやつてゆくこと	國民科 修身
週六第	銃後後援	下旬成績物整理 七、三〇明治天皇祭 七、三一授業式	一、出征兵士の見送りは、心をこめてすること 二、勤勞奉仕を眞剣にすること、怠けてはならないこと 三、作業を、しつかり精出して、體を強くすること 四、國防資源の蒐集と、献金に努めること 五、非常訓練を、眞剣にやること	國民科 修身 七、ナツヤスマ 九、ツヨイコ

(五) 初一八月の躰の生活錬成細案

週事項成		月日	行事	錬成行項	教科	教科との關聯
耐 艱 乏 心 身 鍛 鍊		八、上旬	ラヂオ體操會	一、早朝ラヂオ體操會には休まず出席すること	國民科	七、ナツヤスミ
		八、一同	前	二、涼しい中に勉勵すること	修身	
		召集日校庭美化作業		三、暑くても水を飲みすぎ、又食べすぎせないこと	修身	
		召集日校庭美化作業		四、召集日の作業をしつかりやること	國民科	七、ナツヤスミ
				一、召集日は、きりつ正しく(暑さに負けぬ)	修身	
				(集合、整頓、行動についての注意をする)		
				二、汗をかく、體はいつも清潔にしておくやうにすること		

の本指

(堅忍持久)

長期建設の興亞聖業、この困難性(於ては私産は充分覺悟し緊張しなければならぬ)と共に、それに打勝ちうる心を養ひたい。夏季休暇において各自心身を鍛錬せしめる。

週事項成		月日	行事	錬成行項	教科	教科との關聯
				三、勤勞作業は、だらしないので、しつかりやること		
				四、日記は、毎日かゝらずに、記帳するやうに		
				五、水泳は危険のないやうに氣をつけること		

(六) 初一 九月の躰の生活錬成細案

週事項成		月日	行事	錬成行項	教科	教科との關聯
第 一 週		九、一同	前	一、興亞奉公日の實踐徹底	國民科	アリ
活 生 仕 奉		二、十日	關東震災記念日	(一) 神社境内の掃除	國語	
		始 乘 式		(二) 忠魂碑の掃除		
				(三) お家の庭の草むしりを進んでやること		

の本指

(勤勞奉仕)

これは兒童の分に應じた奉公の道である。このうるはしい精神を、實踐行を通して培ひ、作業愛好の精神を涵養なさしめる。

週二第	週三第
九、一三乃木祭	九、一八滿洲事變記念日
九、一五毎月同前	九、二二秋季皇靈祭
<p>二、出征兵の家族のお使ひ、お手傳ひをやること</p> <p>三、荷車の後押し等をしてやること</p> <p>四、おだちんを賣はなくても喜んですること</p>	<p>一、油断大敵 戦場を思ひ最後までやり通すこと</p> <p>二、自分の力試しをしてみる</p> <p>三、かげひなたなくやること、人のみてる前でだけやるのはいけないこと</p> <p>四、汗を流したあとの心持のよいこと</p> <p>(藤樹先生の御徳を慕ひたてまつつて)</p>
國民科 修身	國民科 國語
九、ツヨイコ	アリ

週四第
九、二五藤樹先生記念日
<p>一、中江藤樹先生の幼年時代の話</p> <p>二、はきはきとして、働くこと</p> <p>三、にこ／＼して、お仕事をすること</p> <p>四、人の爲にすることをいやがらないこと</p> <p>だまつて行ふこと</p>
國民科 修身 理數科 理科
九、ツヨイコ

(七) 初一 十月の躰の生活實踐組目

週五第	週	本月の指標	週	週
使 命 自 覺	事 項 成 就	<p>(與亞邁進)</p> <p>與亞邁進の意は單に小なる利慾、利益の満足の爲ではない。實に皇國精神の現れ皇國の歴史的使命の現れであることの自覺をもたせるにある。</p>	月 日	行 事
一〇、一毎月同前	一〇、一毎月同前		月 日	行 事
一〇、四祭	一〇、四祭		月 日	行 事
七運動會	七運動會		月 日	行 事
	練 成 要 項		月 日	行 事
	<p>一、支那事變に關してのお話をさかせること</p> <p>(一) 事變の發端について(わかりやすく)</p> <p>(二) 東亞建設に邁進する日本の覺悟と正しい立場</p> <p>二、銃後の私達のつとめを知らせること</p> <p>(特に運動會と關聯して健康増進をはか</p>		月 日	行 事
	教科との關聯		月 日	行 事
	國民科 修身		月 日	行 事
	十三、オテツダ		月 日	行 事

週 七 第		週 六 第	
取 進 達 潤	愛 博 量 宏	取 進 達 潤	愛 博 量 宏
			一〇、一〇 眼の記念日
		一〇、二〇 報 德 祭	一〇、一三 戊申詔書御下賜記念日
			一〇、一五 同 前
<p>日本一の働きもの二宮金次郎先生の力行をまねる</p> <p>(一)よいことは、自分で進んでやること</p> <p>(二)少しの失敗や、危険を恐れずにやること</p> <p>(三)途中でやめずに、必ずやりとげること</p>		<p>一、弱いものを、いぢめたりせないやうにすること</p> <p>二、人の悪口や、蔭口を言はないやうにすること</p> <p>三、境遇が異つても、わけへだてせないこと</p> <p>四、自分に對してした友達の過はゆるしてやること</p> <p>五、一寸したことで、すぐ喧嘩をしないこと</p>	

週 八 第	
却 減 心 私	却 減 心 私
	一〇、二三 靖國神社祭
	一〇、三〇 教育勅語御下賜記念日
	一〇、三一 世界勤儉日
<p>一、我まゝを言はないこと</p> <p>(よくき働ませう 使へるだけ用具は使ふ)</p> <p>二、損徳を言はないで、努力すること</p> <p>三、友だちと仲よく、親切に助けあふこと</p> <p>四、お國のために、一錢でも貯金をすること(世界貯金日)</p>	

(八) 初一 拾一月の躰の生活實踐組目

週 九 第	週 鍊 項 成	月 日	行 事	鍊 成 要 項	教科との關聯
制 統 序 秩					
			一、同 前	明治節の生活行事を話しかせること	國民科
			二、三 明 治 節 體 育	(一) 明治天皇の御聖徳の数々について	修身
				(二) 儀式の時の作法訓練を指導すること	
				(三) 學用品等は、無駄買ひをせないやうにすること	
					八、キマリヨク

の月本指 標 (國策協調) 現時の國策は皇國の使命を果すための國策であり、これと協調することは、子供相應に國策に順じた生活をなさせる。

週第十第	週第十第
則 遵 法 遵	同 協 律 自
一、一〇 國民精神作興詔書 御下賜記念日 一、一五 同 前	一、二三 新 嘗 祭
(四) 順序正しく、一人勝手をせないやうにすること 長くも御詔書の御諭しを守るやうにすること (一) きめられたことは必ずまもるやうにすること (二) 反省をして常に正しくないことはせないこと (三) いやな事でも大勢のためにきまゝを言はず辛抱すること	一、自分のことは自分でやること (一) 登校前の身仕度 (二) 容姿、入浴 (三) 學用品の始末 (四) 私の仕事 二、お國のために力を合せてきばること (級の隣組制) 三、お互にこまつた時は助けあふこと 一、學用品は使へるだけ使ふやうに工夫すること
國民科 八、キマリヨク 修身	國民科 八、キマリヨク 修身

週第二十第
元 下 旬 獻 殿 祭
二、不用なものは、一切買はないやうにすること 三、無駄使ひをしないで、貯金をすること 四、古いものを利用するやうに努めること (一) 短い鉛筆の使用法 (二) 紙の裏表 (三) 學習帳の使用

(九) 初一 拾二月の躰の生活實踐組目

週三十第	週三十第	の月本指	の月本指
踐 實 道 臣	二、一 同 前	「各其本分ヲ格守シ」とある御言葉は誠に慎重で、學國一致の實をあげることも、つまりは各自がこの分を格守することによつて得られる。本學年兒童の應分の生活を自給させ行ひさせる。	「各其本分ヲ格守シ」とある御言葉は誠に慎重で、學國一致の實をあげることも、つまりは各自がこの分を格守することによつて得られる。本學年兒童の應分の生活を自給させ行ひさせる。
防 火 デ ー 歳末同情週間	一、天皇陛下の臣民である私たちはお國で きめられたことは、喜んでやること (一) 銃後の僕たちのすることについての指導 (二) どんなお仕事も、皆、天皇陛下の御爲であること	一、天皇陛下の臣民である私たちはお國で きめられたことは、喜んでやること (一) 銃後の僕たちのすることについての指導 (二) どんなお仕事も、皆、天皇陛下の御爲であること	國民科 九、ツヨイコ 修身

週五第十第	週四第十第
職分	應分
中旬經濟強調週間	
一二、二三多至	一二、一四義士祭 一二、一五同前
一二、二三皇太子殿下御降誕記念日	
一、私達の今の大きな仕事は勉強してよい子供になることである、このためには	一、よい子供が、学校で行ふことに ついての指導
(一)よく學び、よく遊び	二、よい子供が、家庭で行ふことに ついての指導
(二)親の言ひつけを守る	三、よい子供が、人に向つて氣をつ けることの指導
(三)うそを言はない親切な子供になること	四、よい子供は、天皇陛下の御惠を忘れないこと、これがやがて忠義をつくす立派な人になることを自覺させる
(四)自分で出来ることは、お手傳ひすること	五、生活に無駄を廢し、節約することの指導をする
二、自分のせねばならぬことを自覺させること	

國民科 十三、オナツダ
修身

週六第十第
責任重
終業式 二、二五大正天皇祭
こと
一、使用した道具は、必ず元の場所にかへすこと
二、使用する時は、大切にすること
三、言はれたことは、必ず最後まで行ふやうにすること
四、過を、使したときは、正直に告げること
五、人のものは、みだりに自分のものとしてないこと

(十) 初一 一月の鑓の生活錬成細案

週事項	月日	行	事	錬成要項	教科題目
一、	一四	方	拜	一、新年度の覺悟をもつて、新しくきまり	

本月指 標 (生活更生)
生活の能率増進は、生活の合理化、無駄排除によつて得られることが多い。特に現在の學校生活は、主部分の兒童の更生部面は、學用品及學習の無駄排除にあつて

第一週	第二週
能率増進	合理適正
<ul style="list-style-type: none"> 一、二書初 二、三元始祭 三、五新年宴會 四、八始業式 	<ul style="list-style-type: none"> 一、上旬入營兵歡送 お正月の物しらべ
<ul style="list-style-type: none"> よく出發する 二、今日せなければならぬことは今日行ふこと 三、早寝早起を實行すること、その嚴密なる計畫 四、時刻をまちがはず、時を惜しみてきばること 五、仕事をしかけたら、一心になつてやること 	<ul style="list-style-type: none"> 一、學用品の使ひ方を工夫し節約すること (一) 誰が一番長く使ふか (二) 誰が一番美しく使へるか (三) 誰が一番物をいためないか 二、衣服、帽子、靴、傘等も使ひ方を正しく丁寧に、永くもつやうにすること 三、適當な運動、適度な勉強、適度な仕事をしつゝの反省をさせる 一、戦争とお金との關係について知らせる
國民科 修身	國民科 修身
十五、シンキソ	

第三週	第四週
勤儉貯蓄	生活改善
<ul style="list-style-type: none"> 一、一五同年玉貯金前 	<ul style="list-style-type: none"> 下旬耐寒運動
<ul style="list-style-type: none"> (一) 自分は、どの位貯金をしてゐるか (二) 貯金の大切なことについて話してやる (三) お年玉を貯金すること、貯金の仕方について (四) 一錢でも粗末にしないで貯金すること (五) ぜいたくなものは買はないで貯金すること (六) 貯金箱を作ることの指導をする 	<ul style="list-style-type: none"> 一、不用なものは買はないやうにすること 二、代用品を使ふやうに指導すること 三、物を大事にして、いつまでも使用すること 四、何でも工夫して自分のことは自分ですること 五、仕事が早くて美しく出来るやうにすること
國民科 修身	國民科 修身
	十九、自分ノコトハ自分デ

六、一日の生活プランを決定し實踐させること

(十一) 初一 二月の躰の生活鍊成細案

本月指
の標

(氣分刷新)

質實剛健の氣風は國家隆昌の根本である。強きが上に堅實高尚な趣味を養ひ、又この心を培ふことは大切である。これでこそ満足な發展が出来るのである。

週	鍊成事項	月	日	行	事	鍊成要項	教科との關聯
第五週	質實剛健	二	一	同	前	一、表裏なく、眞實目にやること 二、我慢の出来るよい子供になるやうに (一) 古いものでもよい小綺麗なものをつけること (二) 人に見せびらかしたりせないこと (三) 寒くても辛抱出来る強い心と體の子になること 一、近所の人とは親しくして互に助け合ふこと	教科との關聯
	隣	二	一	二	紀元節 建國祭		

週	保相扶	信義節操	公德
第六週	保相扶	信義節操	公德
	二、一三杉浦重剛先生記念日	二、一七神宮祀年祭 二、二二爆彈三勇士	二、二五天 神祭
	二、近所の人と親しくして互に助け合ふこと 三、近所の人に出合つた時は親しく挨拶すること 四、お世話になつたら、御恩を忘れないこと	一、正しいことをするのに途中でまげないこと 二、悪いことには、さそわれないこと 三、物事は、よく考へて言ふこととする (正しい反省) (正しい躰)	一、自分のことばかり良くするのではない 二、人には極力、親切にすること 三、思ひやり深くあれ(環境の異なるものも)

2、初二級の生活練成細案

(一) 初二 四月の級の生活練成細案

(四月の指標) 【國體明徴】 君國に對する意識を明確にし、行事、教科などを通して國體觀念を鮮明にし、國體觀念の意志を不斷に培つてゆく。

第一週 忠孝一致

【練成要項】

- 一、初等科二年生らしく勉強せよ。 二、自分のことは自分でせよ。
- 三、親のいひつけには正しく従ふこと。 四、奉安殿に對しては正しく敬禮すること。
- 五、御尊影のある新聞雜誌は、見付け次第丁寧に保存しておくこと。
- 六、敬禮最敬禮の仕方を正しく行ふこと。

【教科關聯】

國民科修身 一、二年生 二、サイケイレイ
 國民科國語 四、二重橋

第二週 敬神崇祖

【練成要項】

- 一、神社參拜の作法を正しく指導してゆくこと。 二、佛閣參拜の作法指導
- 三、神佛の加護を受けてゐることを思ひ感謝の禮拜をすること。
- 四、神社佛閣の前を通る時は必ず、禮をするやうにすること。

【教科關聯】

國民科修身 二、サイケイレイ 國民科國語 四、二重橋
 第三週 皇道宣揚

【練成要項】

- 一、國旗を大切にすること。 二、祝祭日には自分の手で國旗を出すこと。
- 三、出征兵隊送迎の時等に、國旗が落ちてゐたら直ちに拾ひあげること。
- 四、天皇陛下のお話を聞くときは、心を正し姿勢を正しく謹んで聞くこと。

【教科關聯】

國民科修身 二、サイケイレイ 國民科國語 四、二重橋
 第四章 初一・二級の生活練成細案

第四週 感謝報恩

【鍊成要項】

- 一、聖恩の有難きことをさとしきかしめる。 二、日本に生れた喜びを悟らしめる。
- 三、朝起きた時、夜寝る時には、必ず遙拜を靖國の英靈に對し黙禱を捧げる。
- 四、自分の身體の今日あるは 陛下のおかげであり 父母のおかげであることを思ひ感謝せしめ、益々強健にするやう努力せしめる。
- 五、人から受けた恩を忘れずに進んで恩に報いるやうに心掛ける。

【教科關聯】

國民科修身 二、サイケイレイ

(二) 初二 五月の躰の生活鍊成細案

(五月の指標) 【識見高邁】 時局に對しての認識を明確ならしめ、不動の信念を以て時局生活をな
さしめるやうな態度を訓練すると共に、國民精神を深め、國體觀念を養ひ、不斷に知識を廣め
思索する態度を養ひ、識見を高めさせる。

第五週 時局認識

【鍊成要項】

- 一、子供新聞、子供雜誌等によつて日本並びに世界の情勢を認識せしめる。
- 二、修身の時間に於ける訓話はなるべく時局に則り、時局に對する認識を深める。
- 三、冗費の節約、精神を緊張、作業に精勵せしめて時局に善處せしめる。

【教科關聯】

國民科修身 三、五月のセツク

國民科國語 九、軍かん

第六週 思索精鍊

【鍊成要項】

- 一、何事をなすにもよく考へて、一步一步行ふこと。
- 二、小さい成功に安心しないで、ぐんぐ伸びる子供になすこと。
- 三、命ぜられた事のみを行ふに止まらず、進んでよく考へること。
- 四、工作、圖畫等の作品は常に獨創的なものを賞揚する。
- 五、よく物を觀察させ、常に問題を持たせるやうにすること。
- 六、自分の生活に對してよく反省、向上の道をたどらせること。

【教科關聯】

國民科修身 四、ゴアイサツ

第七週 言行中正

【鍊成要項】

- 一、教育勅語並びに「青少年學徒に賜はりたる勅語」によつて正しき日本人の道を會得せしめる。
- 二、實行出来ないやうなことは、絶対に言はないこと。
- 三、表裏のある生活はせない。四、過あらば、素直にあやまる。
- 四、過あらば、素直にあやまる。
- 五、不正なことは、斷じて行はない。又人にも行はせないやうに忠告する。

【教科關聯】

國民科修身 四、ゴアイサツ

第八週 質實剛健

【鍊成要項】

- 一、質素儉約を守つて困苦缺乏に耐ふる精神の持主となること。
- 二、何事をなすにも、お國のためと言ふ考へを忘れず眞剣に行ふこと。

- 三、悪いすゝめには従はぬやうに心を強く持たせる。
- 四、何事をなすにも、じみに、まじめに勵むやうに努めしめる。

【教科關聯】

國民科國語 九、軍かん

(三) 初二六月の戦の生活鍊成細案

(六月の指導) 【經濟報國】 時局の認識を深め資源を愛護せしめると共に、學用品を生かして使用せしめ、國防不足資源を蒐集し物品を節約せしめ以て國家に貢獻させる。

第九週 利慾抑制

【鍊成要項】

- 一、他人の持つてゐる新しいもの珍しいもの等を欲しがらない。それより現在自分がもつてゐるものを活かして使用すること。
- 二、自分等は 陛下の御ために勉強し作業するのであつて勝手氣儘な行動をしてはならぬ。
- 三、いらぬ物を、むやみにほしがらぬやうにすること。
- 四、間食をつゝしむ、身體を強健にすること。五、學用品を大切にすること。

六、夜寝る時にも齒をみがくこと。(ムシ齒豫防デー)

【教科關聯】

國民科修身 三、五月ノセツク

第十週 資源愛護

【鍊成要項】

- 一、どんな小さな物でも、それが出來上るまでには、澤山の人の汗と油の働きの賜物であることを忘れず、大切に使用すること。
- 二、自分の持物は、新しいものばかり使用せず古い物で辛抱すること。
- 三、物を大切に使用して、みだりに汚損せないこと。
- 四、どんなに古くなつても、その再生法を考へ、そのものもつ使命を全うさせること。
- 五、衣服等も汚さぬやう、洗つてあるのを着ることが誇である。

【教科關聯】

國民科修身 五、ヤミノ舟

第十一週 生産擴充

【鍊成要項】

- 一、學年園の作物を愛し、立派に育てさせてゆくやうに指導すること。
- 二、果樹園の除草施肥を、一心になつてやること。
- 三、水路へ入つたり、いためたりして、農家に迷惑をかけぬやうにすること。
- 四、家でも、父母の手傳ひをして、生産の擴充をはからしめること。
- 五、兎等を、なるべく家で飼育するやうにすること。

【教科關聯】

理數科理科 八、六月の田植

第十二週 勤勞報國

【鍊成要項】

- 一、作業する時は、骨惜身せず、だまつて一心に働くこと。
- 二、各家で共同の作業を、する時は之を手傳ふこと。
- 三、作業を喜んですること。
- 四、戦線の勇士を偲んで、苦痛にたへしのび頑張ること。
- 五、各自が責任をもつて、定められてゐる場所の作業にきばらせること。
- 六、勤勞することは、日本を益々良くすることである。即ち、日本のため 陛下の御ために御恩がへしをするのでありと考へさせて、仕事に一生懸命になること。

【教科關聯】 理數科理科 八、六月の田植

(四) 初二七月の鉄の生活鍊成細案

(七月の指導) 【義勇奉公】 皇軍の戦果は 大元帥陛下の御稜威によると共に國民の誠忠無比の精神によるものであることを知らしめ、皇軍將兵の忠勇美談に感激せしめ、銚後にあつて、滅死奉公をなさしめると共に、個人主義を排斥し、協同集團の活動を重視する。

第十三週 修文鍊武

【鍊成要項】

- 一、勉強と身體は車の兩輪の如く大切であるから、よい日本人となるには、どちらもおろそかにしてはならないことを知らせる。
- 二、自分のことは、人に言はれるまでに進んでやること。
- 三、毎日、時間を定めて勉強し、運動すること。
- 四、皇軍將兵の苦勞を知るために、大いに忠勇美談を語りあはせる。
- 五、兵隊さんに負けない様に、元氣に運動し勉強すること。
- 六、當番、作業等は、少々苦しくても最後まで頑張らせる。

【教科關聯】 理數科算數 七月の雜題

第十四週 學國一致

【鍊成要項】

- 一、作業にも學習にも、運動にも學級全員が一團となつて能率をあげることに。
- 二、美化作業には、夫々持場は異つてゐても全體の一員であることを自覺して、早く正しく完成するやうにすること。
- 三、友人は互に仲よく勵ましあつて、學級成績の向上をはからしめる。

【教科關聯】 國民科修身 八、荷馬車

第十五週 滅死報國

【鍊成要項】

- 一、我がまゝを避け、將兵の苦痛を偲んで學習に作業に精出させる。
- 二、命ぜられた仕事は、途中で止めることなく、最後までやり通すこと。
- 三、何事にも、すき、きらひを言はせないやうにすること。
- 四、美化作業には少い用具を互にゆづりあつて一心に行ふこと。

五、自分がと言ふ利己的觀念をすて、お國のためにつくすのだといふ心持を忘れさせない。

(一) どんなにつらいことでも、よく辛抱すること。

(二) どんなことがあつても、決して不足を言はないこと。

第十六週 銃後後援

【鍊成要項】

一、出征家族、遺家族に對しては常に感謝せしめ、禮をするやうにし出来るだけお手傳ひするやうにすること。

二、出征兵士に、慰問文、慰文袋を作つて送ること

三、神社に參つて、出征兵士の武運長久を祈願すること。

四、忠魂碑の前を通る時は、必ず敬禮をすること。

五、各自が、その責任の場所を、しつかり守ること。

【教科關聯】

國民科修身 八、荷バシヤ 十、キモンボン

(五) 初二八月の饑の生活鍊成細案

(八月の指標) 【堅忍持久】 大東亞を建設するにも長期を要する。而も、それには幾多の艱難辛苦が伴ふ。次代の國家を背負つて立つべき兒童の任務は重い。この大任な切り抜けるためには暑熱を浸して心身を鍛鍊し、集國作業も最後まで立派になし遂げる様な訓練をする。

耐 艱 耐 乏

【鍊成要項】

一、早寝早起を勵行すること。

二、ラジオ體操會には缺席せないこと。

二、強い身體、強い心の持主となつて、立派な日本の國の子供となるやう心掛ける。

(一) 怠け心や、だらしない心をおさへるだけの強い心をもつこと。

(二) 暑さや、少々の苦しみに耐ふること。 (三) 家のお手傳ひをすること。

【教科關聯】 理數科理科 十一、水遊び

心身鍛鍊

【鍊成要項】

一、日中、外にゐても平氣になれるやう、だん／＼鍛鍊すること。

- 二、朝早く起きて新鮮な空気を胸一ぱいに吸ひこむこと。
- 三、日光に、よくあたり黒く、すこやかに伸びること。
- 四、嬉しい時程氣持ちを落ちつけること。

(一) 腹にしつかり力を入れる。 (二) 力強く歩む。 (三) 真剣にする。

【教科關聯】 理數科理科 十一、水遊び

(六) 初二九月の躰の生活練成細案

(九月の指標) 【勤勞奉仕】 忠勇なる皇軍將士の苦勞を思ひ、これに對して感謝のまごころを捧げると共に、銃後にあつて滅私奉公、勤勞奉仕に従事することは私達の責務であることを自覺せしめる。

第一週 奉仕生活

【練成要項】

- 一、運動場、廊下等に落ちてゐる紙屑は見付け次第拾ふやうにすること。
- 二、人が迷惑するやうな邪魔物は早く取りかたづけすること。(ガラス片、石、竹切、瓶のかけ等)
- 三、自分の家の前の道路は、いつも美しくしておくこと。

四、奉仕する心は、物を感謝する心から起る。何事をするにも先づ感謝する。

【教科關聯】 國民科修身 八、荷ベシヤ

第二週 勤勞作業

【練成要項】

- 一、働くことは身を練り心を鍛へることであることを自覺させる。
(一) 汚い所は自分から進んで美しくすること。 (二) 勤勞作業は心から眞面目にやる。
(三) 作業の後の用具の始末は、丁寧にふこと。
- 二、日本に生れたことに對して感謝し、陛下の御爲に、御國の發展のために喜んで働かせる。
- 三、作業後の用具の始末を正しくするやうに訓練をする。

【教科關聯】 理數科理科

第二週 流汗鍛鍊

【練成要項】

- 一、暑さに負けず、學習に作業に、精一ぱいに努力せしめる。
- 二、新東亞は私達の汗によつて築くのだといふ自信をもつて事にあたらせる。

- 三、晴天の日は屋外に出て元氣よく運動をするやうにすること。
- 四、姿勢は常に正しく保持すること。 五、眞剣に作業すること。
- 五、一生懸命働いた後の心よさを充分に味はしめること。

【教科關聯】 理數科理科

第四週 實踐行動

【鍊成要項】

- 一、よいと思つたことを、直ちに、どん／＼と實行してゆくこと。
- 二、先生や、目上の人が注意された悪い行ひは、再び繰り返へさないやうにすること。
- 三、やりかけた仕事は、必ず最後までやり通すやうにすること。
- 四、何事にも、よく注意し、危険の伴ふやうなことはせぬやうにすること。
- 五、自分一人の行動は、學級全體、學校全體を代表するものと考へること。

【教科關聯】 理數科理科

(七) 初二十月の頃の生活鍊成細案

(十月の指標) 【興亞邁進】 東亞及び世界の指導者とならねばならぬことを自覺せしめ、共に仲よ

く助け合ひ、私心私慾を滅却して皇國の發展のために努力せしめる。

第五週 使命自覺

【鍊成要項】

- 一、皇國に生れたことを感謝して、興亞奉公日の作業に精進せしめる。
- 二、役立つ人になるために、先づ強い心身をきたへることに努めさせる。
- 三、級訓を守つて、何事にも眞剣に努力させる。

【教科關聯】 國民科修身 十一、ウチガミサマ

第六週 宏量博愛

【鍊成要項】

- 一、思ひやりの深い人になること。
- (一) 目の見えぬ人、耳の聞えぬ人、その他不具不幸な人の氣の毒な容貌、言語動作等について嘲り笑ふやうな事はやめること。
- (二) 道に迷つたり、難儀をしてゐる人に對しては、知らぬ人でも親切にしてやる。
- (三) 年下の者をいたわる。 (四) 故なくして犬や鶏を追ひまわさぬこと。

二、動物をいたわること。

三、弱い者をたすけてやること

【教科關聯】 國民科修身 十二、エンソク

第十週 濶達進取

【鍊成要項】

一、よいと思つたことは自ら進んでどん／＼やること。(教室の整頓・用具の整理・下駄の整頓)

二、小さなことに、こだわらないこと。 三、正しいことはどこまでもやること。

四、人の行動はよく見て、良心に尋ね、良いと思へば自分に取り入れ悪いと思へばすてる。

【教科關聯】 國民科修身 十二、エンソク

第八週 私心滅却

【鍊成要項】

一、何事をなすにも、人のために人の喜ぶやうにと考へて行ふこと。

(一) 自分だけよければよいと言ふ考へはすてる。 (二) 友達と遊ぶ時餘り我をはらない。

(三) 他人の人と一緒に讀書する時、自分一人で讀まない。 (四) 作業する時用具は貸しあう

二、食物に好ききらひを言はず、何でもたべるやうに注意する。

(八) 初二 十一月の鍊の生活鍊成細案

(十一月の指標) 「國策協調」國策の重大意義について知らしめ、憲法、秩序、統制の生活を實踐せしめることによつて、小我を捨て、大我につくの精神的態度を養ひ、以て暴運を扶翼せしめる

第九週 秩序統制

【鍊成要項】

一、學校のきまりをよく守つて、よい學校のよい子供になること。

二、ベルと共に早く集り、正しく整列する。 三、教室に居残らないこと。

四、廊下は走らない、腹に力を入れて歩く。 五、學用品は定められたものを使用。

六、下駄箱、井戸端、足洗場では押し合はぬやうにすること。

【教科關聯】 國民科修身 十三、メイヂセツ

第十週 憲法遵則

【鍊成要項】

一、學校や、學級自治會できめられた事は正しく守らせる。

(一) 講堂に入つたら口を閉ぢること (二) 廊下は走らない。

(三) 廊下や教室で遊ばないこと

(四) 學習用具の整頓

二、級長の言ひつけを守ること。

三、成績物は必ず期限までに提出すること。

【教科關聯】

國民科修身 二十二、畑の手入

等十一週 自律協同

【鍊成要項】

- 一、何事をなすにも自ら進んでやること。(小さなことでもよいと思ふことは進んで行ふ。)
- 二、お互ひに助けあつて力になること。(友達が困つてゐる時は助けてやる。友達に迷惑をかけぬ。)
- 三、常に學級の一員たることを忘れず、各々自分の定められた仕事に精勵。
- 四、級の人々と相談して、良いことはどん／＼行ひ、悪いことは止めるやうにする。

第十二週 冗費節約

【鍊成要項】

- 一、むだづかひせぬやうに注意すること。(學用品等は、丁寧に使つて最後までそのものゝ使命を全うさせること。)

- 二、晝食時には、一粒の飯も感謝してこぼさぬやうにする。
- 三、不用品を買はぬやう、貯金を増すやうに努めること。

(九) 初二 十二月の躰の生活鍊成細案

(十二月の指導) 【本分格守】 各兒の使命を自覺せしめ、臣民としての分をつくすべきことを教へ

銃後の國策に協調せしめると共に自分の本分を全ふすることに努めしめる。

第十三週 臣道實踐

【鍊成要項】

- 一、皇室を尊び、教師長上を尊敬する。
- 二、奉安殿に對しては正しく禮をする。
- 三、先生に對しての朝夕の挨拶を正しくする。
- 四、先生から命ぜられたことは正しく行ふ。
- 五、自分のせなければならぬ仕事は、必ずなしとげること。

【教科關聯】

國民科修身 十三、メイヂセツ

第十四週 應分生活

【鍊成要項】

第四章 初一・二歳の生活鍊成細案

- 一、初等科二年らしく行儀正しくすること。 二、學年團の作物は、精一ばいていねいに作る
- 三、掃除には、定められた所を早く美しくすること。
- 四、動物飼育當番は、仲よく、皆仕事を分けあつてすること。

【教科關聯】 國民科修身 十四、稻カリ

第十五週 職分自覺

【鍊成要項】

- 一、よく學習、よく遊び、よく作業にきばること。怠けてはいけない。
- 二、自分は學校の兒童であり、お國の大切な役目を果さねばならぬ子供であることを自覺せしめる
- 三、身體を強健にすること。 四、父母に心配をかけぬこと。
- 五、互にはげましあつて定められた仕事を最後まで正しくすること。

第十六週 責任尊重

【鍊成要項】

- 一、當番は定められてゐることを、その通りに正しく行うこと。

- 二、級長、副級長は、自分のつとめをよく知り、よく他のものの世話をすること。
- 三、お使ひを頼まれた時は、早く完全に行ひ、すましたら必ず報告すること。
- 四、使つた道具は必ず元へかへすこと。

【教科關聯】 國民科修身 十五、コウエンノシバフ

(十) 初二 一月の疑の生活鍊成細案

(一月の指標) 「生活更生」時間を尊重せしめ、物資を節約させ、生活を合理化する素地を固めさせ、生活能率を増進せしめることによつて、負荷の責務を全うすることに努めさせる。

第一週 能率増進

【鍊成要項】

- 一、早く起きて、神宮、皇居を参拜すること。 二、今年こそその意氣込で仕事にとりかゝる
- 三、用具の準備を正しくして忘れ物をせないこと。 四、夜ふかしをせぬやう感翔して寝ること。
- 五、皆が心を協せて、分業的に行ひ協同の精神を養ふ。

【教科關聯】 國民科修身 十七、天皇陛下

第二週 合理適正

【鍊成要項】

- 一、生活をよく反省して正しき道をまつしぐらに突進すること。
- 二、物を使用する時、その物の使命を充分理解して使用すること。
- 三、何事も、よく工夫して使用すること。
- 四、自分の言行を正しく判断する習慣を作る。

【教科關聯】 國民科修身 十六、タンジャウ日

第三週 勤儉貯蓄

【鍊成要項】

- 一、學用品は使へるだけ使ふ。
- 二、學習帳を破つたり、ゴムをくだいたりせぬ。
- 三、お正月の小遣ひ、お年玉はためておいて愛國貯金にくり入れること。
- 四、衣朝、履物等は、代用品で満足せしめ、よく修理したものを使用する。

【教科關聯】

國民科修身 十六、タンジャウ日 國能科工作「貯金箱」

第四週 生活改善

【鍊成要項】

- 一、早寝早起を實行すること。
- 二、時間を正しく守り授業におくれぬやうにすること。
- 三、用便は休み時間にすまして、學習中は席を離れぬこと。
- 四、朝夕、日の丸の旗下で生活させていたゞけることに對して感謝し禮拜を忘れぬこと。
- 五、國策に沿つて生活し、學用品、衣服類を大切に使用すること。

(十一) 初二 二月の親の生活鍊成細案

(二月の指標) 【氣分刷新】 御聖旨を奉戴せしめ信義を重んじ公正廉直の精神態度を培ひ、皇室に對して感謝報恩敬の念を持たしめると共に、生活を反省せしめて氣分の刷新を圖る。

第五週 質實剛健

【鍊成要項】

- 一、心身共に強い立派なものにたるやうに心掛けること。
- 二、少々の苦しみに耐えしのお辛抱強い人となること。
- 三、寒さに負けぬこと。
- 四、いつも身なりを正しくすること。
- 五、表裏のある行ひをしないこと

【教科關聯】 國民科修身 十八、キゲン節

第六週 隣保相扶

第四章初一・二級の生活鍊成細案

【鍊成要項】

- 一、友だちは互に助け合ふこと。
- 二、病人や弱い子を親切にしてやること。
- 三、一年生の子を助けて、仲よく登校するやうにすること。
- 四、忘れ物をした人に、物をかしてやること。
- 五、通は心よくゆるしてやること。
- 六、友達の悪口は言はないやうにすること。

【教科關聯】 國民科修身 十九、日本ノ國

第七週 信義節操

【鍊成要項】

- 一、些細な事で怒つたり悲しんだりして他人の感情を害せぬこと。
- 二、お互ひに、よい友達と言はれる人になること。
- (一) 友達に嘘を言はぬこと。
- (二) 友達が困つてゐる時は助けること。
- (三) 友達の上ることをする。
- (四) お互ひに忠告しあふこと。

【教科關聯】 國民科修身 十九、日本ノ國

第八週 公德尊重

【鍊成要項】

- 一、紙屑を路上にすてぬこと。
- 二、みざらの上を走らぬこと。
- 三、水呑みの茶碗は勝手に使はぬ。
- 四、廊下では遊ばぬ。
- 五、道路は常に左側を通ること。
- 六、便所の下駄は正しく揃へること。
- 七、むやみに、痰、つばを路上にはかぬこと。

【教科關聯】 國民科修身 十九、日本ノ國

(十二) 初二、三月の親の生活鍊成綱案

(二月の指標) 【徳器成就】 學業や作業に精勵せしめて、心身を鍛鍊し、日々の生活を反省せしめて、自らつとめて息まざるやう心身一體の態度及び良習慣を養成する。

第九週 知能啓發

【鍊成要項】

- 一、豫習復習は言はれなくてもすること。
- 二、わからぬことはどこまでもきいて覚えておく。
- 三、補充讀物によつて、時局の認識をし、知識大いに獲得せしめる。
- 四、發表を重んじ、他人の發表をよく聴く態度をつける。

五、人の話を聞いて、よいと思つた事は、自分でも實行する。

【教科關聯】 國民科修身 二十、ヨイ子ドモ

第十週 自強不息

【鍊成要項】

- 一、戦線に働く將士に感謝し精一ばい事に學習に努力せしめる。
- 二、常に自分の行ひを反省し、善惡の判断をあやまらないやうにすること。
- 三、人のいやがることも進んでやる習慣をつけること。 四、自分の務を忘れぬこと。
- 五、小さな成功に安心してはるけない。一步一步完全な生活で進んで行く。

【教科關聯】 國民科修身 二十、ヨイ子ドモ

第十一週 約束嚴守

【鍊成要項】

- 一、約束したことは必ず守る（個人と個人との約束、學級全體の約束、目上の人との約束）
- 二、級訓は正しく守る。 三、宿題を忘れぬやうにすること。
- 四、友人との約束は、よくないことをとりきめないこと。

五、學級自治會できめられた事は、しつかり行ふやう各兒がそれに向つて努めること。

【教科關聯】 國民科修身 二十、ヨイ子ドモ

第十二週 生活鍊成

【鍊成要項】

- 一、一ヶ年間を反省し、いたらない所は速やかに努力し補はせること。
- （一） 學習方面 （二） 操行方面 （三） 作業方面 （四） 身體方面
- 二、一年間學習したことを、生活にとりいれてゆくこと。
- 三、一年間の塵を、すみ／＼まで拂ひおとし、人間道場にみがきをかける。
- 四、小我をすて、大我に生きること。
- 五、三年生として恥じない生活であつたどうかをよく反省する。

【教科關聯】 國民科修身 二十、ヨイ子ドモ

第五節 練習上の諸問題

練習は、その實踐の場所から言つても、家庭學校社會等の廣汎なものであり、その實踐の方面も生